

---

# 愛していると言わない

あしなが犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛していると言わない

### 【Nコード】

N5374W

### 【作者名】

あしなが犬

### 【あらすじ】

夫となった人は毎晩『愛している』と言って私を抱きしめる。だけど、私は決して『愛している』とは夫に言わない。だって、夫は私を愛していないけど、私は夫を愛している。だから、絶対に『愛している』と言わない。それが私の最後のプライド。

そんな感じの複雑な夫婦と複雑な色々を巡る架空世界が舞台の物語。

「愛している」

夫となった人はそう言って私を一瞬だけ抱きしめると、すぐに離しベッドに横になり、取り残された私はベッドの脇に立ちつくし夫を見下ろした。

結婚して数カ月、彼は誓いの口づけを除いて、こうして毎晩抱きしめること以上のことを私に決してしない。

寝付きがいい夫はもう眠ってしまったらしく、私に向けた背が規則正しく上下している。

（それなのにどうして『愛している』なんて言うの？）

私を拒絶する背中に心の中で問いかける。だけど、一度だって本人に聞いたことはない……だって答えを私は既に知っているから。

（貴方にあるのは私への罪悪感だけ）

その罪悪感故に貴方は私と結婚した。

その罪悪感故に貴方は私に愛を呟く。

だけど、罪悪感しかないから貴方は決して私に触れない。私を本当に愛することはない。

（頼んだら抱いてくれるのかしら？）

そんな意地の悪い事を考えて、絶対にそんなこと言える訳がないと自嘲した。

何しろ彼が私を愛していないことを知っていたのに、彼の罪悪感

を利用して私は彼に結婚を受け入れさせた。

それだけでも彼には申し訳なく思っているというのに、これ以上の何かを望むことは我儘の他の何物でもない。

頭ではそう分かつているというのに、どうして私の心はこんなに傷ついているのだろうか？

（だって、私は貴方をずっと愛しているから）

瞼をつぶれば出会った頃の彼が私に笑って手を振ってくれる。今となっては決して見る事が出来ないその姿を思い浮かべて嬉しくなってしまう。そんな自分が無性に虚しくなって溜息をついた。

（せめて自分の本当の気持ちを告白しないことが、私の最後のプライドよね）

私は毎晩、『愛している』と告げる夫に一度もその答えを返したことがない。

私を夜の眠りから呼び起こすのは、朝の光でもなく、小鳥のさえずりでもない。それは隣で寝ている夫の遠慮がちに起きる気配。

夫はいつも夜が明ける少し前に起きる。

彼は私が自分に合わせる必要がないと言ったけど、そういう訳にはいかないと一度だけ同じ時間に起きたことがあった。

だけど、その時酷く迷惑そうな顔をされて私の心は折れた。ただでさえ疎まれているのに、これ以上の不快感を彼に与えたくなかった。

だから、私は毎朝夫の起きる気配で一度は目が覚めても寝たふりを続けている。

もし熟睡していたら極僅かな夫の気配で目が覚めることもないのかもしれないけど、悩んだまま寝ている私の眠りは浅いらしい。

その後、二度寝をしても誰が咎める訳でもないけど、広いベッドの上に一人で取り残されると強い孤独感が押し寄せて眠りを妨げるので、私はただじりじりと起きる時間を待つ。

そうして私が起き出すふりをする時間に侍女が寝室の扉をノックして、やっと私は孤独感から解放される。

ノックに答えると美しい笑顔で侍女が『おはようございます』と言う。それに『おはよう』と返しながら、夫とはこんな朝の挨拶すら碌に交わした事がないと気がついて苦笑した。

夜が明ける前に寝室を後にする気配を感じた後、彼に次に会うのは眠る前だけ。

——彼が発するのは『愛している』の一言だけ

そんな言葉、どうして信じられるというのだろうか？ いや、きっと夫はむしろ信じてほしくないに違いない。

彼が妻となった私に義務感だけで『愛している』と言っていると分かっていても、これでは却って寂しくて辛いだけ。だけど、私は決してそれをやめてとはいえない。

それを聞いて嬉しいと思う私が確かにいるから。そんな自分に私は強い嫌悪感をいつも抱いていた。

：というあまりに暗い出だしでごめんなさい。はじめまして、私の名前はアイルフィード・ヴァトル。今年で25歳になる。

他に自己紹介を：と思うけど、とりたてて紹介するほど私には特徴がない。強いて言うなら特徴がない事が特徴なのかもしれない。身長は高くも低くもなく、体型は痩せてもいなければ太ってもない。髪は一般的な栗色で目の色も黒に限りなく近い茶色。

顔は自分では特別不細工だと思ったことはないけど、一度見ても大抵の人はすぐに忘れてしまいそうな何処にでもある顔で、性格も別に普通だ。

そんな普通という名の皮しか被っていない私が、その皮を大々的に脱ぎ捨てることになるとは思わなかった。

———そうなった理由は夫：世界王フリー・ヴァトルとの結婚

彼との結婚で私は世界王の正式な妻：世界王妃という、あまりにも特別で、地下深くまで沈んでしまうほどに重すぎる肩書を背負うこととなったのだ。



「ごちそうさま。」

広い部屋での一人の朝食を終えると、すぐに控えていた使用人が音一つ立てずに食器を片づける。

「食事はお口にありませんか？」

食べ物半分くらい残ったまま下げられていく食器を横目で見ながら、私の後ろに控えていた侍女ルッティがそう聞いた。

あくまで優しい物言いだけど、その言葉に私は彼女を見上げて苦笑した。

見上げたルッティは侍女だけあって質素な化粧だし地味な洋服を着ているけど、それでは隠しきれない彼女の凛とした美しさはいつも眩しい。

初めて彼女を自分付きの侍女だと紹介させられた時、私はとても申し訳ない気分になったものだ。

「まさか。食事はとても美味しいわ。」

「ですが、ここ最近ずっと食事を残されていますよね？」

美しいだけでなく、ルッティは侍女としても完璧だ。私のことを監視している訳じゃないけど、いつもさりげなくちゃんと見ていて気を遣ってくれる。

慣れない環境にいきなり一人で放り込まれた私がここまで何とかやってこれたのは、彼女の献身的ともいえるサポートがあっただと私は思っている。

だからこそ彼女の働きに報いるならば、食事くらいちゃんとらないといけないんだろう。だけど、この事に関して言えば私にも言い分はあった。

「出される食事をちゃんと食べられなくて申し訳なく思っている。だけど、ここにきて数カ月、私は後宮から一步も外に出ていない。王妃として何の仕事だっしてしていない。ただ、日がな一日のんびりと過ごしているだけじゃお腹も空いてこないのよ。」

世界王妃となった私の住まいとなったのは、世界の中心にある神都アッパー・ヤードにそびえ立つ王城。更に詳しく言えばその最奥にある後宮だ。

広大な王城だけで私がかつて住んでいた都市と同じくらいの大きさがあり、私が入り出すことを許されたこの後宮ですら私がかつて住んでいた町くらいの大きさがあるという。

それを聞いたただけでくらりと眩暈がしたものだけど、いくら後宮が広いと言われたって、ここから出るなど自由を禁じられる事は強いストレスでしかない。

さらに言わしてもらえば、自由に歩いていいと言っても常にこのルッティを始めとした誰かがいるという大前提があるのだ。

彼女たちにしてみれば監視しているという意図なんて微塵もないんだろうけど、誰かに傳かれたり誰かを連れて歩くという生活と無縁だった私にとって、それはあまりに居心地が悪かった。

「そのことに関しては私たちも色々手を尽くしております。しかし、現状ではアイルフィード様の安全を確保できるのはこの後宮のみです。窮屈を強いてしまっていることは本当に申し訳なく思っておりますが、もうしばしの御辛抱をお願いせざるを得ません。」

「…わかってるわ。」

この会話をここ数カ月で一体何回交わしたことだろう。

その度、私はそれ以上何も言えなくて、ただ聞き分けのいい返事をしている。



「何しろ私はオルロック・ファシズ＜神を信仰しない陣営＞の人間です。それを承知でこちらに嫁いできたのだから：我儘は言いません。」

まあ、こうやって嫌味の一つや二つは混ぜているけど。

「アイルフィーダ様にそう言っていただけとありがたいです。」

だけど、ルツティの方が何枚も上手だ。

私が嫌味を返しているというのに、それを分かった上で笑顔でそう切り返す彼女に私はただ大きなため息をつくしかない。

——オルロック・ファシズ＜神を信仰しない陣営＞

それを語るには、まずこの世界について少し説明したい。

ともかくにも、この世界には『神』という絶対的な存在が君臨しているということを、まず覚えていてほしい。

：とはいうもの私はその姿を実際に見たことはない。

だけど、神は確実に実在している。それがこの世界の常識だ。

神は人を蘇らせ、雨が降らない砂漠にオアシスを作り、ドラゴン  
を退治した：どれもこれも真実とも嘘とも分らないお伽噺。

だけど、その人知の及ばぬ神という力ある存在を、人間たちは信  
じ仰ぎひれ伏した。

絶対服従を誓った人間を神も庇護し、様々な恩恵を与えた。

神と人間の友好関係は長く続き、それと同じ期間だけ平和と安寧  
があった。

しかし、数百年前よりその均衡は少しずつ壊れ始めた。

——それがすなわちオルロック・ファシズの誕生

彼らは神が与える恩恵から離れ人間だけで独自の自治体を形成し、  
神という存在を否定した。

神に従いしレディール・ファシズ＜神を信仰する陣営＞と私たち  
オルロック・ファシズは、それから大きな戦いこそなかったが、あ  
る程度の緊張状態を持って相対してきた。

ちなみに私がいる神都アッパー・ヤードはレディール・ファシズ  
の中心地であり、私の夫となった人はその中で神の次点である世界

王だったりして…。

まあ、ここまで世情というものを踏まえると、私と夫の結婚の意味がお分かり頂けるのではないだろうか？

オルロック・ファシズの人間である私と、レディール・ファシズの王である夫との結婚は、すなわち敵対し合っていた両陣営を結び付けるための政略結婚という訳だ。

それために後宮には正室の私しかいないので、後宮の女同士の争いなどはないのだけど、オルロック・ファシズである私に対する風当たりは非常に強かったりして、例えばこんなお人がいたりする。

「あらあ？このお部屋…何だか油臭いんじゃないやありませんこと？」

後宮であてがわれた私の部屋に入ってきた途端、挨拶より先にそのたまった女性に張り付いた笑顔が引きつった。

（ああ、始まった）

輝く金髪の長い髪を高く結いあげ、少々濃い目の化粧に派手で露出が多いドレスを纏った貴族然としたこの女性。

彼女の名前はファイリーン・ディレレクト。私より年下のくせに襟ぐりの深く開いた所から見える白い胸が目眩しい美女で、実は私の教育係だったりする。

レディール・ファシズの中でも指折りの貴族のご令嬢らしく、神への信仰心があつい彼女は私のことがともかく気に入らないらしく、3日に一度は彼女から講義を受けているが一度だってこんな感じの嫌味がない時はない。

かくしてファイリーンがいつものように嫌味を言って、顔の前で

はたはたと扇を煽ぎ心底不快そうな表情を浮かべていると、ルッティがすかさずフォローになっていないフォローを入れた。

「申し訳ありませんファイリーン様。すぐに窓を開けてまいります。」

「ああ、ルッティいいのよ。どうせ匂いの根源はこの目の前にいる、野暮ったい神をも恐れぬ野蠻人ですから、換気した所でどうしようもないわ。ねえ、アイルフィーダ様？」

「……」

そう語りかけられて、その匂いの根源だとされた私にどうすればいいのだろうか？

（出ていけばいいの？ だけど、ここは私の部屋だし、出ていくなら貴方じゃないの？）

ぐっと出かけた罵詈雑言はぐくりと飲み込んで、私はびくびくと米神を震わせて必死で別の言葉を返す。

「ええ、ええそうですね。ですが、どうして私ったら油臭いのかしら？ 侍女の皆さんが毎日綺麗にしてくれているのに。」

「それは勿論生まれてからずっと染みついた香りですもの。どんなに侍女たちが頑張っても、やはり仕方がないことですわ。私、ちゃんと我慢いたしますから。ですが、人前に出る時はなるべく香水を多めにふりかけることをお勧めしますよ。」

そして、『おーほっほ』と勝ち誇ったような高笑いが木霊した。私は思わず頭を押さえたが、変なところで律義なルッティが不思議そうに顔を傾けた。

「ですが、どうしてアイルフィーダ様の生まれついてから染みついた匂いが油なんですか？」

「ルッティったら知らないの？」

「もうその話はいいです！」

ルッティの問いに何やら嬉しげにファイリーンが答えようとするのを、私は少々大きめな声で遮った。どうせ私を貶す言葉に違いなのだ。そんなもの聞きたくない。

私の大きな声にファイリーンは少し目を見張ったが、今度こそ呆れたような私を小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「王妃ともあろうお方がそんな大声を出すなんてはしたないことですよ。まったく、貴方という人は本当に何度教えても優雅な立ち居振る舞いや物言いが身につかない人ですね。」

彼女の私に対する偏見や嫌みには口にしなくともいくらだって返す言葉が思いつくが、これに関しては彼女の言うとおりだったりするので、言い返す言葉がなくて私は俯く。

彼女に教えを乞い始めて数カ月、確かに私は一向に王妃として必要とされる素養が身についてはいなかった。

すると扇で顎を上げさせられ、ファイリーンは顔をずっと私に近づけた。

毛穴一つない白い肌、これでもかというほど長く伸ばされた睫毛、つやつやとした赤い唇、彼女は確かに化粧が濃いとしかいえない。だけど、その美しさは作られたものだとしても完璧と言わざるを得なかった。

その完璧に武装されたに近い顔の中で、だけれど、一番輝いているのは唯一の天然と思われるその青く大きな瞳。

その瞳がぎらりと光って私を睨みつけた。

「仮にも世界王の妻を名乗るのであれば、いつだって胸を張ってしゃきつとなさいな。ただでさえ野暮ったい貴方が俯いたり背中を曲げていては目も当てられませんか。」

その強い言葉と強い眼光に私は何も言えず、彼女を見つめ返すしかできない。

しばらく、いやもしかしたらほんの数秒のことだったかもしれない。だけど、私にはそれが酷く長い時間に感じられ、金縛りにあったかのような私相手に先に視線を離れたのはファイリーンの方だった。

「まったく、そんな事では来週の舞踏会…先が思いやられますわ。」  
「へ？何ですか？」

「まさか知らないと言っても言うんじゃないでしょうね？来週は貴方の方の誕生日。その日の夜にある舞踏会を始めとした様々な行事に勿論、貴方も参加するのよ。妻なのだから。」

（誕生日？嘘！来週！？）

驚く要素がありすぎて、何から驚いていいか分からない。

目を白黒させる私を見て、ファイリーンは勢いよく扇を閉じると油臭いと言った部屋の奥にずかずかと進んでいく。

「さあ、時間が惜しいですし早く始めますわよ。今日からは来週にむけて今までよりもびしばし行かせて頂きますよ！」

そう言って振り返りながら笑った彼女の後姿に悪魔の尻尾が見えるようで、私は目の前が暗くなるのを感じた。

後宮で私に宛がわれた部屋は、王妃専用らしく後宮の中でも一番広く豪華な造りになっている。

白を基調とした中に金や赤といった色彩で施された細工は繊細で格調高く、基本が庶民の私には少し居心地が悪い。更にいつも誰かによって片づけられ埃一つない室内は、いつまでたっても私を受け入れてくれない。

まるで他人の家か宿屋にでも泊っている感覚。

眠りが浅いこともあるだろうが、どんなに疲れていても私はこの部屋で癒されたり、休養できたと思ったことは多分一度もない。

その自室でファイリートの教育というより苛めに近い講義に耐え、疲れすぎてすぐにでも寝てしまいそうになりながらも、私は夫を待っていた。

どんなに遅くならうとも夫はいつも私の部屋で眠る。表にも自室があると聞いているけど、結婚以来その部屋で眠ったことはないはずだ。

その理由を彼に直接聞いた訳ではないけれど、偶然聞いてしまった侍女たちの噂話でそれは明らかにになった。



『ねえ！聞いた！？』

私に傳ってる彼女たちからは信じられないほど生き生きした声が静かな廊下に響く。

小さな声で話しているつもりだろうが、その廊下はとても声が響き、一人で散歩させてほしいと少しだけ許された自由の時間（とはいっても後宮内だけだけど）を満喫していた私の耳にそれはよく聞こえた。

『聞いたわよ！あのお静かな陛下が声を荒らげてお怒りになったんでしょ！？』

（へえ…それは確かに珍しい。何があったんだろう？）

夫の話ということもあって、立ち聞きは悪いと思ったが、何となく物陰に隠れて聞き耳を立ててしまった。

『それも後宮の事で！！』

『そうそう！後宮に行く行かないでもめたって話じゃない！！』

興奮する彼女たちの会話に比例して、私の心は冷たくなるのを感じた。

『まあ、オルロック・ファシズの王妃様じゃあ。陛下が後宮に行く気にならないもの分かるけどねえ。』

『へえ…それじゃあ、後宮に行きたくない陛下を重臣たちが止めようとしたってこと？』

『多分ね。まあ、陛下も我慢の限界が来たんじゃない？ここまでよく続いた方だと思うわよ？部屋の片づけとかしている感じ、あの夫婦…実際にはまだ夫婦じゃないし。』

その言葉に同意の声がいくつも上がる。

下世話な話…正直、侍女たちには関係ないと大声を張り上げたい気持ちもある。

だけれど、ここで彼女のたちの前に怒って現れたところで、全て



事実なのだから言い返す言葉もない。それよりも

（ああ、やっぱり本当は私の所なんかに来たくないんだ）

侍女たちの噂によると、後宮に行きたくないと訴えた夫を重臣たちが諫めたことに彼は声を荒らげるほど立腹したということなんだろう。

だが、結局夫はその後毎日私の部屋にやってきている。

夫の気持ちはともかく、現状オルロック・ファシズの心象を悪くしたくない以上、私がないがしろにされているという噂は問題なのだろう。

そんな噂が立たないように夫は毎日私の所に通うのだ。

そうして、私は彼が私の部屋を毎晩訪れ、『愛している』と告げる理由を現実として突き付けられた気がした。

それまでは彼の態度が私にどんなにそっけなくて冷たくても、心のどこかでもしかしたらと期待していた。

だって、好きな相手と夫婦になった……どんなに心に強い戒めをしても、『愛している』と言われたら期待してしまう。

だけれど、これはあくまで政略結婚でしかなく、夫にしてみればその相手が彼にとって扱いづらい厄介な相手だということなのだ。

分かっていた。結婚する時、どれだけ自分に言い聞かした？

私は夫の弱みを盾にして結婚を迫ったのだ。どうして彼に好かれるというのだ？嫌われても疎まれても仕方がない。

だけど、侍女たちのその話を聞いて酷く傷ついた自分がいた。



そうして、今日も夫は私の部屋を訪れる。

「おかえりなさいませ、陛下。」

いつもはぎこちなくなる一礼も、妙にはりきったファイリーンの特訓の成果か思わぬほどスムーズにできる。

それが嬉しくて疲れていても思わずにやけてしまいがら頭を上げた私だったけれど、こちらを見やる夫の顔に強い嫌悪感が浮かんでいて気持ちは沈んだ。

「あの…陛下？」

私を嫌っている彼でも、一礼したぐらいでこんな顔をされたのは初めてで戸惑う。

「…なんでもない。さっさと寝よう。」

何でもないというが、とても何でもないようには見えない。

お風呂に入った後らしく、ファイリーンと同じ金髪だが、夫の髪質の方が柔らかいため、いつもはふわふわとしている髪がべったりと張り付いている。

とても整った顔立ちをしている夫であるが、私と同じ年のはずだが未だに十代後半と見紛うほどの童顔が、不貞腐れたかのような表情が彼を更に幼く見せていて、私はかつて彼と出会った頃を思い出した。

（昔の私だったら、無理やりにも何かあったか聞きだすんだろうけど）

夫の拒絶を恐れる私にはそれができない。

嫌われている、疎まれていると理解していても、それを侍女の話を聞いただけでも傷ついているというのに、彼に直接言われた日には立ち直れる自信がない。

それにそんな事を言ったら、もう彼は言ってくれなくなるに違いない。

「愛している。」

与えられる毎日欠かされない言葉と、僅かの抱擁。それを惜しんでいる私が確かにいるのだ。

通常なら最後のプライドでそれに答えることはしない私の沈黙のため、それ以上の会話は続かないけれど、今晚は絶対に聞かなくてはならないことを思い出して、私は今にもベッドに横になろうとする彼に声をかけた。

「あのっ！う・伺いたいことがあるんですけど。」

焦ったあまり舌が絡まる。

「……何？」

朝から晩まで仕事をしてきているのだ。私なんかより疲れているだろう夫は、うっとうしそうに私を振り返る。

「来週、陛下の誕生祭があると今日ファイリン様に聞きました。私もそれに参加させて頂けるというのは本当でしょうか？」

ファイリンは私が出席するものだと言っつけて、今日は思い出したくないほど辛い講義だったけれど、実際に本当に私が出席するか否かを決めるのは結局は夫だ。

彼が私の出席を良しとするか否とするか、そこを私ははっきりさせておきたかった。その答え次第で明日からのファイリーンの講義を受ける意識が全く変わる。

もし、参加させて頂けるというのであれば、世界王である彼の隣りにいて釣り合いが取れる私でなくてはいけない。

（明日から少しは忙しくなるのかな？）

ファイリーンの講義は気が重いが、何も目的がないまま過ごす日常で目標が出来ることが何となく嬉しくて、うきうきした気分になる。

「…ああ、それか。」

だが、私の意気込みの強さに反して夫の反応は酷く薄いものだった。

「出たければ出てもいいし、出たくなければ出なくていい。ただ、国民に対する挨拶の時だけは隣にいてももらうことになるが。」

「え…？ですが、舞踏会もあると聞いています。その席に王妃はいなくてもいいんですか？」

ファイリーン曰く、舞踏会は最初王と王妃が揃ってダンスを踊ることが開会の合図だという。

全ての参加者の前でたった二人で踊るダンスは失敗が許されない。ファイリーンは特訓だと言って、今日は筋肉痛になるほどダンスを練習させられた。

「まあ、君が出ないなら代わりを立てるからいいよ。」

だけど、夫はあまりにあっさりとそう言った。

「去年までは巫女がその役割を果たしてくれていたから、今年もそうすればいいし。多分、もう重臣たちから巫女には打診がいつているはずだと思う。今年はまだ結婚して間もないし、君の舞踏会の参加は見送ろう。」

——巫女

彼が何気なく発した言葉に、妖精のように可憐な少女の面影がよぎった。

「あ、そうですか：分かりました。」

その声はいつもの私と同じ。だけど、鏡台に映る私の顔は今にも泣きだしそうだった。

（どうして？ どうして？ 私は貴方の妻ではないの？ 私は王妃としての役割すら果たせないの？）

愛されていないなら、せめて王妃として胸を張りたいと思っても、何もさせてもらえない。いや、寧ろ彼らにとって私なんていないと同じ存在なのだ。

だから、私に何も聞かされないまま、すでに私の代役が当たり前のよう存在する。

そのことに強い憤りを感じているはずなのに、立ちすくみ何も言えない私。

昔の私ならもっと思っていることを口にしていた。昔の彼ならもっと私の心を分かってくれていた。

（昔なら昔なら！！！！）

目の前が真っ暗になった私は、心の中に光を求めるように目をつぶり過去に思いをはせた。

——もっと違う出会い方をしていたら、何かが変わっていたのかな？



「アアアアア・アイルフィーダ!!!!!!!!!!」

そのヒステリックな怒号は静かな校舎によく響いた。

ふるふると震えながら怒りをあらわにする女性教師を前に、私は耳がキーンとするのを我慢して殊勝に俯いていた……いや、本当は笑っている顔を見られないためだけだ。

（『アアアアア・アイルフィーダ』って、『ア』言いすぎだし）

怒られているのは分かっているけど、何があっても笑えてしまうお年頃な私は俯いていたけれど、体が堪える笑いで震えている。

何しろこの女性教師、名をマリアは、全身を常に黒づくめの服装に身を包む厳格でストイックなお堅い人で、風紀委員の顧問教師でもある彼女はそこら中の生徒に些細なことでも注意をする所謂『説教ババア』（年齢的にはまだ20代らしいが）なのだが、今は服装どころか、その髪も顔もいつもはキラリと光る眼鏡のレンズすら全部黒に染まっていた。

なので、黒く染まっていなければきっと顔どころか全身が真っ赤になっていたのだろうけど、今はそれすらも分からないほど本当に黒い。

マリア教師がこれだけ怒っているのだから、こういう事になった理由は勿論私にあるのだけれど、どうしてかと説明すると、数十秒前に話はさかのぼる。

ここは全寮制の女学校クライン・スティリア。

女性の社会進出が珍しくなくなった昨今、教養と品格を兼ね備え、自立した女性を育成するための学び舎……とまあ、非常に素晴らしい謳い文句を掲げる結構由緒ある学校だ。

そういう理想的な女性を何人も輩出しているし、学校内にその片鱗を見せている生徒、また、そうとしか思えないようなすごい生徒もいるけど、その大半はごくごく普通な女子たちで構成された普通の女学校でしかない。私は考えている。（まあ、入学試験は難関だけど）

今日は朝から美術で、一日がかりでクラス40名全員で巨大なオブジェを作成するという、美術的センスと協調性や計画性を養うための授業に取り組んでいた。

私と言えばあまり美術は得意ではないけど、一日机に向かっているよりはクラスメイトとわいわい言いながら何かを創っていくという作業は楽しく、主にリーダー格の女子の言うことをはいはいと聞いて、材料を集めたり色塗りをしてみたり奔走していた。

——そして、それは私がその過程でバタバトと階段を駆け上がっている時に起こる

オブジェ造りも佳境に入ったが（私には美術的センスはないが、客観的に見て良く分からない塊ができてつつあった）、黒色のペンキがなくなったため、私はそれを用務員さんの所に取りに行くことになった。

……ここまで聞くと何となくお察しいただけるのではないだろう



か？

私は早くそれを届けたい一心で、『廊下・階段は静かに歩く』という基本的ルールは分かっている、はやる心でやや小走りに階段を駆け上がっていた。

黒色のペンキがある用務員室は一階、クラスメイト達が待つ美術室は四階。

結構重いペンキが入った缶を両手で持ちながら最初は軽快に駆けあがっていた階段も、二階から三階に至る階段の半ばに差しかかる結構しんどくなり、四階へ向かう段階になるとゼイゼイと息を荒らげたりして……。

まだまだピチピチの17歳。若いはずなのに、私も半ばムキになっていて、歩けばいいのに最後まで走りきってやると無駄な決意を抱いてしまったのが全ての原因。

息切れでふらふらとなっていた私は、上がらない足のせいで階段に引っ掛かり思いつきりこけた。

人間、本能的に自分の危機になるとりあえず自分の身を守るもので、顔面強打を避けるため私はその時、何の躊躇もなくペンキの入っている缶を手放した。そうしないと、手で顔や頭を守れないからだ。

ただ、不思議とこういうときって冷静なもので、

（あーあ、ぶちまけられたペンキの掃除は時間かかるだろうなあ）

などと呑気に考えていたのだ。

「キャア！！！！」

そんな悲鳴を聞くまでは。

ちなみにこの悲鳴は私ではない。膝とか缶を放り投げたおかげで

咄嗟に階段に付く事ができた手は、僅かに痛んだが、私には怪我ひとつないのだ。

じゃあ、この悲鳴は？と振り向いて私、絶句。

想像通りにペンキがぶちまけられていたのだが、同時に後に分かったのだけれど階段を走っていた私を注意しようと後ろにいたマリア教師が頭からペンキを被って立っていた。

とまあ、そんな訳で私はそのまま廊下で黒色のペンキを全身に被ったマリア教師に怒られることとなった。

私としては説教するより先に、マリア教師にかかったペンキをどうにかすべきだと思うのだけど、怒りのあまり彼女はそれすら考えが至らないようだ。

教師の声の大きさに気がついて怒られている私を、四階からクラスメイト達が野次馬根性丸出しで覗いているのが見えたが、マリア教師はそれにも気がつかない。完璧に頭に血が上っているらしい。

曰く『貴方は元々落ち着きがない』だとか『そんな事では立派な女性にはなれない』だとか、正直余計な御世話だと言いたくなるようなことを言われ続け、比較的彼女に怒られることが多い私は聞きなれた説教を右から左に聞き流すしかない。

それには気が付くマリア教師が目吊り上げた。

「聞いているのですか！！！」

「はい！」

ずっと俯いていたが、そう怒鳴られて思わず彼女の顔を見てしまい、堪え切れずに吹き出してしまう。

だって、眼鏡をしていたおかげで目の周りだけペンキを避けられたその顔は、まるで笑わせるためだけに化粧を施された変なピエロの様で笑わずにはいられなかったのだ。

「~~~~貴方という人はあああああ!!!」

しかし、そんな風に笑ったらマリア教師の怒りに油を注ぐことは明らかで（だから、顔を見ないように俯いていたのに）、彼女が握っていたペンキで黒くなってしまった眼鏡にひびが入るのが見えた。

（げえ…本格的にやばいかも）

キーンと頭に響く怒号は更にヒートアップして延々と続き、私のクラスのオブジェは結局その日時間内に完成を見ることはなく、クラス総出で居残ることになってしまった。

クラスメイト達には申し訳なくて謝ったけど、皆、マリア教師のあの姿で笑わせてもらったと怒られることもなく、更にぶちまけたペンキの後片付けも皆が手伝ってくれたおかげで早く終わった。

あれだけ怒られたことでさすがに凹んでいた私にはクラスメイト達の友情が身にしみて嬉しく、その日の事はそれで全て片が付いたと、寝て起きた次の日には全てを忘れていた私である。

だから、その三日後、マリア教師に呼び出されて、一体何事だろうと思っても、その時の出来事なんて微塵も思い出さなかった。

「アイルフィード。貴方には先日罰として、授業外に奉仕活動を申し渡します。」

そうして、何を言われているのか分からずに『何の事ですか?』と聞き返してしまった私は、その後またマリア教師に説教を受けることとなった。

生家を離れ学校内の寮で生活しているため、校外に出るには外出届けというものが気になる。

基本的に理由のない外出は許されないけれど、休みの日などは買い物などに出かけたりといった理由でも外出届けが受理されやすい。もっとも夕刻の門限は非常に厳しい。

私も何度か外出届けを提出したことはあったが、その外出理由に『奉仕活動』と記入する日が来るとは思わなかった。

「残念だったな、アイル。今日はお前が楽しみにしていたカフェに行く予定だったんだろ？」

寮の管理人に記入を終えた外出届けを渡しながら肩を大きく落としていると、後ろから声がかかる。

そこには同じ年の姉エリーが立っていた。

背がずらりと高くショートカットがよく似合う彼女は、姉とは言え同じ年にも関わらず非常に大人びた容姿をしていて、女子高ではありがちな皆の『お姉様』と崇められたりしている。（しかも、本人も悪い気がしていないらしく、今やファンクラブ的なものまである）

「笑わないでよエリー。ますます凹むから。いいのお土産は既に依頼済みだし。」

元々、今日は数人の友達たちと新しく出来たカフェでお茶をするはずだった。

それを何が悲しくて奉仕活動に貴重な休みを費やさなくてはならないのか……自業自得なのかもしれないけど、正直マリア教師を恨

みたくなる。

今までだって彼女に罰として反省文を書かされたり、校内の清掃をしたり、色々させられてきたが休みを潰されるまでの仕打ちはされた事がなかった。

まあ、あの『マリア女史真つ黒事件』（新聞部命名）はここ最近で一番の衝撃的な事件ではあったけれど……だって、わざとじゃないのに。

「そうか。まあ、校外の奉仕活動なんてなかなか体験できるものじゃないし、きつといい経験になるさ。腐らずに頑張るんだぞ。」

根が真面目で優等生のエリーらしい言葉に、内心閉口しつつも私は受理された外出届の自分控えを鞆に押し込むと彼女に笑顔で手を振った。

「はいはい。じゃあ、行ってきます。」

そう言った言葉は自分で言うのもなんだけど、かなり心がこもっておらず、エリーが微妙な顔をして見送っているのに私はぺろりと舌を出した。



クライン・ステイリア女学校があるのは、オルロック・ファシズの中央都市・メルトファウストの郊外だ。

現在、この都市を中心としてオルロック・ファシズの自治都市は今や三十三に及ぶ。ここまで陣営が大きくなるまでには、それはそれは大変な苦勞と時間がかかった。

幼い頃から教わる昔話によると、遙か昔、創世神話の時代にはこの世界は雑草すら育たない不毛の大地だったという。

それを豊かにし、人間が住める環境にしてくれたのが神という存在だ。

しかし、時を経てその神から離反した先人は、当初食べていくのも難しいほど困窮したという。

離反した以上、神の加護のない大地に追いやられる結果となった先人たちであったが、その大地は無論、不毛で雨が降らず、更には度重なる自然災害もあり、今まで受けられていた神の恩恵の大きさを実感し、自然の偉大さと人間の無力さを悟ったらしい。

直後は一度は離反したけれど、やはり神の御許に逃げ帰る人たちも後を絶たなかったということだ。

だけれど、そんな過酷な中でも生きることを諦めず人々を導いたのが、聖女ファミリア・ローズ様。

オルロック・ファシズの人間ならば、知らない人はいない正に伝説の人である。

彼女は特に人知を超えた力を持っていた訳じゃないけど、その素晴らしい人徳と人々に対する献身的な愛情は、彼女が亡くなって数百年という時を経ても未だに伝説として語り継がれるほどで、当たり前だけど無神教者の集まりにも関わらず、彼女の教えを後世にも伝えようとする集団はメジャーに存在する。

ファミリア・ローズ様の名前をとった集団の名は【薔薇の会】。

どこの町にも必ずと言っていいほど、その集会場などがあり彼らはファミリア・ローズ様の教えを広めるだけでなく、それを実践すべく無償奉仕を行い、恵まれない人のために生活する場所を提供した。

と、まあ少し話はずれてしまったけれど、そのファミリア・ロー

ズ様をはじめ偉大な先人たちは過酷な環境下であっても、大地を耕し、灌漑整備を進め、災害に対する対策を進め、段々と自分たちが少しでも住みやすい環境を整えていった。

そして、神の力ではなく、人間の力『科学』や『機械』を用いて今や、＜神を信仰する陣営＞の大都市にも匹敵するほどの豊かな都市となるまでにオルロック・ファシズを発展させていったのである。

以上、オルロック・ファシズの歴史講座終了！

もっとも、私は生まれた時から既に豊かな街並みと生活しか知らないのです、それがどれくらい大変だったとか、貧しかったのかも知らない。

だけど、実際には親世代の子供時代くらいまでは結構苦しい生活を強いられていたと授業で学んだ。

：ということは、本当の意味で豊かになったのはここ数十年ということなのだと思う。

（数百年間、苦しかったというのに：ここ数十年の間に劇的に変化する何かあったってことかな？）

授業の内容を思い出そうとするが、授業自体をぼんやりと聞いていたのでそれに思い当たる部分が浮かんでこない。

（うーん：帰ってからエリーにでも聞いてみよう）

成績優秀な姉に聞けばいいかと、安易に考えながら私は見慣れた活気と豊かさに溢れた街並みを横目に目的地へ足を速めた。



大通りを裏道に入って、建物と建物の間にできた迷路のような道を地図を頼りに進む。

難解な迷路に道を誤り、その度に近所の人に道を聞いて修正を繰り返す事、数回……私はやっと辿り着いた。

一見すると少し大きなお屋敷っぽい外観。

小さな白い花が咲く生垣と、そこからはこじんまりとした白い石造りの古そうな建物と、あまり手入れされているとは言えない色々と生えっぱなしの庭、その庭で走り回る子供たちとその声が聞こえた。

生垣に沿って歩くと、立派な門とその門に【ローズハウス】という札が掲げられている。

そう、マリア教師が私の校外奉仕活動の場を選んだのは、先程説明した薔薇の会の施設の一つだった。

（詳しい内容は行ってから聞けって言われたけど、子供がいるってことはここは孤児院みたいな場所ってことだね。）

どんな場所に放り込まれるのかと気が重かった私は、子供の相手くらいならどうにかなるかと少しだけ安堵する。

門をくぐり、玄関のチャイムを押すと、カランコロンと可愛らしい鐘の音がして、人がパタパタと近寄ってくる足音が続いた。

「いらっしやい！貴方がクライン・ステイリア女学校の生徒さんね。私はレイチェルよ、よろしくね！」

出てきたのはとても澁刺とした若い女性。

白シャツにダボダボの厚手のズボンを履き、茶色の髪は一つに結ばれ、顔には化粧の一つもしていないようには見えず、美しいとは言



えなかったが、その生き生きとした笑顔は初対面の私にすら元気を与えてくれるような感じのいいものだった。

「は…はい。クライン・ステイリア女学校から来ましたアイルフィード・ファシズと言います。今日からよろし——」

「まあまあ!! そんな堅苦しい挨拶は抜きにして早速皆に紹介しなくちゃ! 皆、若いお客さんが来てくれるって楽しみにしてたのよ!」

(若い?)

昨日の夜から考えていた挨拶をいい終わる前に、レイチェルさんに背中を押され建物の中に押し込まれる。

遮られたレイチェルの言葉に少し疑問を感じながら、何の心の準備もできないまま、色々とぐいぐいと押され私は驚くやら、どうしていいやらで混乱する。

玄関からまっすぐ廊下を進むと、大きな扉を開いてレイチェルさんが私を中に案内する。

その向こうにある多くの視線に私はぐっと緊張が押しあがるのを感じ、更に目の前の光景に頭が真っ白になった。

(え? え? ここって孤児院じゃないの?)

中々大きなリビングらしき場所に、たくさんの人が私の顔を興味深そうに眺めていた。

その中には私の予想通り何人かの子供もいたが、それよりもはるかに多い人数の想像していなかった人たちがいた。

円らの瞳、小さくて細い瞳、眼鏡で拡大されて歪な大きさを持つ瞳、病気だろうか白く濁った瞳、うたたねしているのだろうか目脂が張り付いたまま閉じられた瞳……ずらっと十数人並んだその瞳た

ちは、それぞれの歴史が積み重ねた個性を持った瞳をしていた。

「はい！！皆さん、今日は若いお客様が遊びに来てくれました！お名前はアイルフィーダさんと仰るそうです。今日はよろしく願いますね！」

レイチェルさんがビビっている私を一步前に押し出す。

「よ…よろしく願います。」

思わずもった私を笑う人は誰もいなかった。だけど、数人の子供が私の言葉に返事をしたけど、ここにいる大多数の人がぼかんと私を見ているだけだ。

「あはは！もっと大きな声で言わないと聞こえないわよ。ねえ！？」  
「はああ？」

レイチェルさんが豪快に笑いながら、近くにいた人の耳元で叫んだ。するとそれすら良く聞こえていないのか、しゃがれた声が返ってくる。

——その人はどうみても齢を相当重ねられたご老人にしかみえず……

薔薇の会が運営する施設【ローズハウス】、ここは身寄りのない子供を世話する孤児院であると同時に、身寄りがないご老人達も一挙に世話する老人ホームでもあったのだ。

急速な経済的发展で働く場も増え、同時に女性の社会進出も伴って、家という場所には極論かもしれないけど子供と老人が取り残された。

勿論、それは全ての家に当てはまることじゃない。

結果として老人が孫の面倒をみる構図が出来あがって、微笑ましい光景かもしれないけれど、それはあくまで孫の面倒をみる事ができる元氣がある老人のいる家に限られた構図でしかない。

それが出来ない老人という存在は、赤子と同じ、いやそれ以上に介護という名の手間を必要とする事もある。

それは決して悪いことではない、人として老いた時それは当然の事実でしかない。

だけれど、子供と老人しか残っていない家で、子供も老人も共に人の助けを必要としているのに、その手がないという現状……それは少なからず社会問題として取り上げられさえている。

(そういえば、そんな事授業で聞いた気がする。)

子供と老人たちの好奇の目に晒された後、レイチェルさんに紹介されたローズハウスの責任者だという、ユーナ・レシェットさんから、そういった社会問題に小さくとも助けの手を差し伸べるためにこのローズハウスがあるのだと、この施設の存在意義を私は聞いていた。

孤児院と老人ホームの混合施設の存在を私は知らなかったのだけれど、現実にもそれはほとんどないらしい。

どちらか片方に特化した方が色々な事が上手く回るし、施設としても面倒が少ない。

「だけれど、こういう形にして私は良かったと思っているのよ。身寄りのない子供にとって、ここの大人は甘えられたり、叱られたり限りなく家族に近い存在になるし、大人にとっては子供を見守ることで生きがいを見出したりする。全ての人に当てはまることじゃないけれど、それぞれが良い刺激を与えあっていると私は考えているの。」

「今のお話で言う所の【大人】：というのは、ご老人達の事を差すんでしょうか？」

「ええ。老人という言葉を使うと、彼らは気を悪くするから。子供たちと区別するために、スタッフたちは老人たちを総称して【大人】ということが多いの。」

なるほどと話を聞きつつ、私から見れば彼女も十分にその『大人』の一員なのだけだと思ったりして……だけど、小さく丸い体に、薄化粧をしてワンピースに身を包みコロコロと明るく笑いながら話す姿は、こう言っては失礼かもしれないがとても可愛らしく、これまでご老人と言う存在と関わったことのなかった私に親近感を抱かせた。

「それにしてもここがどういう場所か知らされずに来たのでは、驚いたでしょうねえ。まったくマリアも人が悪いわあ。」

「レシエットさんはマリア教師の事をご存じなんですか？」

妙に親しげない方に首をかしげる。

「レシエットではなく、是非ユーナと呼んで頂戴。ええ。よく知っているわよお。あの子は小さい頃、この近所に住んでいたね。子供の頃は毎日のようにここの庭で遊んでいたの。」

そう言っとうっそうと茂る小さな森のような広い庭を窓から見つ

めた。

庭は外から見ると手入れのされていない庭の様に感じられたが、こうして屋敷の中から見るとそれはある意味計算されている造りなのかもと私に思わせた。

子供の頃だったら秘密基地にしたいような背の低い木の影、うつそうと生えているかのように見せつつも子供たちが走り回ることができるように避けられた草、意外と美しく整えられた花々。

（うん。悪くない）

芸術的ではないにしても、遊んだり探索するにはうってつけの庭に違いない。私は心の中で何ともなしに頷いた。

ちなみに私が今いるのは建物の1階で、ユーナさんの執務室的な場所らしい。大きな窓から庭がよく見え、今も子供達が庭を駆けまわり、それを老人たちが微笑ましげに見守っている。

「この子供以外も出入りが自由なんですか？」

「勿論、ちなみに子供だけじゃないわ。大人だって、学生だって出入り自由。だから、貴方もここにいますのしょう？」

「はあ。」

「ここは誰も否定しない、誰しもを受け入れる場所。実際、ここで生活をしているのは今、ここにいる内の大体三分の二くらいの人数なの。結構、近所の人遊びに来てくれるのよ。」

にこにこ微笑みながらそう告げる彼女のこの施設に関する話は延々と続き、それに対して私はとりあえず『はあ』と気の抜けた相槌を打ちつつ段々とその話に飽きてくる。

なので話半分で聞きつつ意識を他に飛ばし、何気なく窓の外を見ていると視界を横切る異物に目を見張った。

それはまるで一枚の絵。

優しい木漏れ日の中、想像もできないくらい美しい少女が車椅子を押して庭を歩いている。

（……綺麗）

同じ茶色の髪なのに、ふわふわの長い髪はつややかで、深い緑の瞳は大きく長い睫毛に囲まれ、白い肌にバラ色の頬……何から何まで完璧な美少女から私は目が離せない。

「貴方には子供の遊び相手や大人たちの話し相手をしてもらおうと思っているの。学生さんは中々遊びに来てくれないから、きっと喜ばれるわ。」

「あ、はい！」

しかし、私が美少女に見惚れている間も続いていたユーナさんの言葉にはっと我に帰る。

「ちょうど今から昼食なの。食堂に皆集まるから、一緒に行きましよう。」

その言葉に促されて席を立つ、そうしながらちらりともう一度窓を見ると、美少女は既にいなくなっていた。

（私と同じ奉仕活動なのかな？）

だったら是非お友達になりたいものだ、その時の私は呑気に考えていた。



食堂での食事はまさに戦場の如く……だった。

子供と大人とはなく、これじゃあ子供と大きな子供だと私は思った。

スプーンを持つことすらできない手で食べる食事は、そこらじゅうに食べかすが飛び散り、介助者の手がないと言って駄々をこねるお爺さん、食事がまずいと言って皿をひっくり返すお婆さんまでいる。

子供たちの方が余程、静かに綺麗に食事をしていると、私は始めている光景に戸惑いを隠せなかった。

そして、それは食事に留まらない、普段の生活においてもやれオムツが濡れた。歩けないから車椅子を押せ。トイレに連れて行けなど、文句と言うか彼ら大人の要望は後を絶たない。

それをレイチェルさんを始めスタッフの人たちは笑顔一つでテキパキとこなしていく。

戸惑っている私の方が物知らずで、これが当たり前のことなのだと言わんばかりに、なんの文句も抵抗もなく。

そんな姿は私にとって本当に尊敬する他なく、私と言えば何もできないまま子供たちの遊び相手や、大人たちの話し相手を務めたただけで、酷く疲れてしまつてその日は終わった。

「今日はお疲れ様！初めてのことばかりで疲れたでしょう？」

「いえ…本当に何もできなくてすいません。」

来た時と同じ笑顔のレイチェルさんと、酷く疲れた顔をしている私とでは何が一体違うのだろうか？

「何言っているの！子供たちは遊んでくれるお姉ちゃんにはしゃい

でいたし、大人たちは私たちじゃゆっくり聞いてくれない話ができる若い娘さんが来てくれて、本当に喜んでいたのよ。」

「そうだったらいいんですけど。」

「本当本当！じゃあ、また来週よろしくね！もう、日も落ちるし気を付けて帰ってね！」

「はい。今日は本当にありがとうございました。」

レイチェルさんに一礼して私はローズハウスを後にした。現在、夕食の真っ最中なので、私の見送りは彼女一人だ。

（そういえば、あの迷路の路地をまた帰るのか。迷わずに帰れるかなあ）

疲れた頭でぼんやりとそんな事を考えていた時、夕暮れに長く伸びる他人の影が俯いた私の視界に入る。

それに気が付いてふと視線を上げると、すっかり頭から抜け落ちていたけれど、庭で見た美少女が私の目の前を横切っていた。

私は何も考えず、気が付くと彼女を呼びとめていた。

「あ…待って！」

その時、私がどうして彼女を呼びとめたのか、その理由を私は自分で答えることが出来ない。

もしかしたら、自分と同じような疲れを感じているかもしれない少女と一緒に何かを分かち合いたかったのかもしれない。

それともた、ただ目を見張るほどの美少女とお近づきになりたかっただけかもしれない。

だけど、どんな理由が私の中にあっただかは定かではないが、何にしても私は【彼女】に声をかけた。



「何？」

振り返る美しい少女、後に私の人生において大きな存在となる彼女との出会いを、私はその後何年たっても鮮明に覚えている。

彼女の視線は愛らしい顔とは裏腹に酷く眼光鋭いもので、私が思わずたじろいってしまったことだって、昨日のことのように覚えている。

「ねえねえ、ニースはどの辺に住んでいるの？」

「ガディバ地区」

「おお！高級住宅街だ。お嬢様なんだねえ。じゃあ、学校は何処？」

「レンブルトン学園」

「おお！お金持ち学校！じゃあ——」

「いい加減にしろ！！！」

淡々と無表情で私の質問攻めに耐えていた、先日ローズハウスからの帰りにナンパした美少女ニースが、我慢できないというように声を荒らげた。

その見た目は本当に本当に愛らしいのに、その大きな瞳から放たれる光は鋭く、荒らげた声はドスが効いていて、お近づきにはなつた事がないので正確な所は分からないけど、きっと札付きの不良にもきつと引けを取らないと私は思う。

ただ、どうやら着ている服装やその所作から彼女がお嬢様なのは間違いないはずで……そのギャップが私には彼女をただの美しいだけのお嬢様じゃなく、とても興味深い存在に感じさせた。

ともかくお友達になりたいのと、私は思った訳だ。

なので、こうして奉仕活動に出向いてニースに会う度に私は彼女に纏わりつき、質問攻めにした。

基本的に無愛想だけれど律義な彼女は私の相手をする度にこうし

て噴火する、だけどそうした所で私がにんまり笑うだけだと気が付くと、今度は無然とした顔をぷいっと背ける。

「その表情、かわいー！さすが美少女はどんな表情しても絵になるわぁ。」

「……このっお前はマゾか！！！」

私のそんな茶化しに、顔を真っ赤にするニアは眼光鋭く口は悪くとも、偽りなく本当に可愛い。

口汚く罵られようともますますにやけ顔の私（うーん、これじゃあマゾと言われても仕方ないのかな？）を、子供たちが興味深げに見つめていた。

「アイル姉ちゃん。どうして、この怖いお姉ちゃんをわざわざ怒らせるのお？」

「な！？怖い？？」

悪意のない子供の言葉に傷ついたような表情を見せるニアに吹き出す私。

最初は気が重くて仕方なかったローズハウスでの奉仕活動も、今となってはエリーが言っていたようにいい経験だなと思えるようになった。

最初は遠巻きにしか近寄ってこなかった子供たちに懐かれ、大人たちと会話を続けるコツを覚えてきて、本当に遊びと話相手しかしていないけれど、次第にそれが楽しいと感じられるようになってきたのだ。

だけど、それは私がとりたてて何かすごい事をした訳でも、私が人格者な訳でもない。

それはきつと、この子供と大人たちが誰にでも寛容な事が要因だと思う。

『私はここを誰もが受け入れられる場所にしたいの』

ユーナさんのローズハウスへのそんな信念が、ここの住人たちにきつと伝わっているんだろうなと思った。

そして、私がここに来ることを楽しいと感じられるもう一つの要因が、この美少女ニア。

彼女は私みたいに奉仕活動で来ている訳じゃなくて、家族がこのハウスにいるから毎週お見舞いに来ているらしい。

そんな彼女とこうして怒鳴られつつも親交を深めていくのが、私の密かな楽しみだったりする。

「あははっ！別に怖くないんだよ。ただ、ちょーっと感情表現が苦手なだけ。そうだ、今日は一緒に遊ぼうか！！！」

「おいっ勝手に——」

「わあい！！」

私が勝手に決めてしまうと、遊び相手が増えたことに子供たちが無邪気に喜び、この反応にニアも怒るに怒れなくなり、真っ赤になりながら私を睨みつけた。

（だけど全然怖くないもんね）

ローズハウスに来る事、今回で5回目。（休みの度に来ているので、初めて訪れてから一カ月以上がたつ）

その度にニアと出会い、纏わりつく度に睨まれ怒鳴られて続けている私である。いい加減、彼女の反応にも慣れて、何となくその扱いにも慣れてきた私である。



こうして美少女ニアに怒鳴られることがローズハウスでの日常になっている私だけれど、実際彼女との距離が縮み、親しくなったかと問われると否と断言するしかない。

はっきり言って彼女のガードは非常に固いのだ。

多分、私に許している部分と、許さない部分がはっきりしているのだと思う。

質問一つとっても、かんたんに答えてくれることもあれば、きっぱりと言えないと断れることもある。いや、断られる方がかなり多いかな？

きっと彼女に対して興味半分で纏わりついている私を、彼女は本気で鬱陶しがっている。

だけど、根本の部分で律義で優しい彼女は本気で拒否できないんだろうなと…想像するのは難しくない。

それが分かっているなら、ニアに近づくのは良くない事なんだろうとも思う。だけど…と、私は庭で子供たちと戯れながら上方を見上げる。（結局ニアは子供たちと遊ばなかった）

ローズハウスの本館というべき食堂やリビング、住人の部屋がある建物の他に、その陰に隠れるように小さな塔があった。

本館と同じ白い石造りの塔の高さは、三階建ての建物より少し高いくらい。

入ったことはないの、中がどうなっているかは定かではないけれど、あの塔にはたったひとりの住人しかいないらしい。

——それがニアの家族…私が初めて彼女を見た時、押していた車椅子に乗っていた人

ニアとその人が親子なのか兄弟なのかも分からず、いくつかの目撃証言からその人が女性だということは知っているけど、ローズハウスにいる理由も、どんな人物なのかも定かではない。(車椅子に乗っている時、私は見ているはずんだけど、ニアに見とれていて全く覚えていない)

塔には常に鍵がかけれ、その人はほとんどあの塔から出ることもなく、食事も食堂ではとらないので、子供たちの間でも謎の人物として有名らしい。

散歩も普段はしないということで、私が見かけたニアが庭で車椅子を押す姿と言うのはかなりレアな事だったらしい。

(多分、何か複雑な事情があるんだろうけど、なんか変なんだよね。)

知り合ってすぐに、とりあえず話題もないのでローズハウスにいるニアに家族のことを聞いた瞬間、彼女の表情が普段の不良バージョンよりも凶暴なものに変化した。

いつものように怒鳴りもせず、静かな声で表情がより一層私の恐怖を増幅させた。

『それ以上私のことを詮索するなら、あんたが誰だろうが容赦しない。怪我をしたくなかったら、何も聞くな。』

いやいや…え？いきなりそんな展開？と特に深い意味もなくした質問に、あまりに強い拒否と威嚇を受けた私は情けないかな半泣きになるほどビビった。

そんな私の表情を見てニアも気まずそうにしていたけれど、それ以降ニアの家族については怖くて質問しようとも思わなくなつた。

だけど、そう思う一方でその頑なさが痛々しく、いつも張りつめ

た様な様子の彼女が気になって、私は鬱陶しがられていると分かっている。でも彼女に纏わりついている。

（なんか放っておけないんだよね）

多分余計なお世話なのだろうし、放っておけないと言っても彼女に何ができる訳でもないと思うのだけれど、せめて少しでも気がまぎればいいなと思ったりして……

（あはは、何かこれって恋みたい？）

なんて、独り言を心の中で呟いていた頃は気楽だった。

この出会いと彼女に興味を持った事が、私の運命の転機だとも知らなかったのだから。

そして、私の運命は音を立てて動き出す。私の知らない遠いところから、少しずつ。

その日、私は異変を感じていた。

だいたい慣れたローズハウスへ向かう道は、迷路のように相変わらず入り組んでいて、まだぼーと歩いているだけでは迷いうと思う。その道を白いカッターシャツに膝丈のズボンという、初春らしい涼やかな服装に身を包み、私は気分よく歩いていた。

（雨：降りそうだな）

時刻は正午少し前、いつもならば燦々と太陽の光が降り注いで眩しいくらいだけれど、雲によって太陽は遮られ細い路地は薄暗い。急に天気が悪くなったため、傘を持ってくるのを忘れたことに凹んで、暗い空を見上げて歩きながら大きいため息をついていると、どんと結構強い勢いで誰かとぶつかった。

「うわ！」

転びはしなかったけれど、よろめく視線の先にピカピカの革靴が目に入り、そこから視線を上げると厳つい顔をした大男が仁王立ちしている。

（軍人？）

私は一目見てその男を軍人と断じる。

それはこの男が知り合いという訳ではなく、彼が着てる軍服を一般常識に疎い女学生の私でも知っていたから。

目に眩しいシミ一つない白い生地に、黒と金色の刺繍は贅沢にあ



しらわれ、その腕にはく神を信仰しない陣営の象徴とされる薔薇の花と齒車が絡み合った紋章が刻まれている。

「ごめんなさい。」

ぶつかったのは私がよそ見をしてたせいなのは明らかなので、すぐに謝ったのだけれど、軍人は無言でじろりと頭から足までじろりと見た後、さっさと歩いて行ってしまふ。

それを呆然と見送って、その後に急速に苛立ちが沸いた。

（何よアレ！感じ悪い）

ぶつかったのは悪かったが、謝ったのだからもう少し反応のしようがあるのではないかと憤慨する。

まったく気分が悪いと、その時はただそれだけしか思わなかった。だけど、その後、また違う軍人とすれ違い、今度はぶつからなかったのにもかかわらず、顔をまじまじと見られる。

「失礼しました」

その軍人はこちらが訝しげな顔をしていると、慌てて謝って足早に去って行ったが、軍人がこんな人気のない路地を何人もパトロールしているとは思えられない。

人の顔をじろじろと見るのも、普通に考えてあり得ないだろう。

（誰か探している？）

近くで事件でもあったのだろうかと思いつつも、軍人たちが私の顔を見てもスルーしていくことから自分に関係ある事とも思えなかった。

よって、さっさと頭の隅にその事を追いやろうとしていた矢先、ローズハウスに入った途端、異様な雰囲気が施設内を覆っていることに戸惑う。

いつもはのんびりした中にも子供と大人の笑い声が絶えないリビングに、今は何人かのスタッフしかおらず、そのスタッフたちも一様に暗い表情を浮かべている。

「こんにち：わ？」

挨拶も語尾に疑問が滲み、何かを相談しあっている彼女たちに私の声は気付かれなかったようだ。

話しかけられる雰囲気でもなく、立ち尽くしていると、やっとレイチェルさんが私に気が付く。

彼女はその顔に笑顔を浮かべたが、それはいつもの澆刺とした明るいものではなく、すこし苦しそうに歪んでしまう。

「あの：何かあったんですか？」

「うん：実は一人ローズハウスから出てしまった人がいて帰ってこないのよ。」

「え！？」

重苦しい空気に包まれていた中で驚きの声は大きく響き、私は思わず口を押さえた。

どくどくと不自然に心臓が鳴りだす。

「ご、ごめんなさい。」

まさか、私がすれ違った軍人たちはその人を探していた？と思いが当たる一方で、こう言っただがここで暮らしている一般市民が行方不明になったくらいで軍が動くということに違和感を感じた。

軍は普通、一般市民が関わるような事件では出動することはない。普通は憲兵の類がそれにあたるはずだ。

「えっと、それで誰が？大丈夫なんですか？」

感じた違和感はとりあえず置いておいて、私は誰かがいなくなっただという事実には若干パニックに陥っていた。

『じゃあ、いつてくるわね』

声と共に遠ざかっていく背中が脳裏をよぎり、私は大きく首を横に振った。

「アイルフイーダ？落ちついて？」

レイチェルさんが明らかに様子のおかしい私を心配するように覗きこむ。

自分でもこんなに落ちつかないのは変だと分かっているけど止められない。

「それで誰なんですか？私、探しに行きます。」

「そ、それは」

ともかく落ちついていられなくて、問い詰めるように聞くけど、不思議とレイチェルさんもいい淀む。

そうだ。軍が出張っているくらいなのに、ここのスタッフは誰ひとりその人の捜索に出ている気配がない。

やっぱり何かが変だと思うけれど、それよりもともかく私はその人を探しに行かなくてはと、自分で自分を追い詰めていた。

「早く教えて——」

「私の家族だ。」

迫る私に気圧されていたレイチェルさんに代わって、背後から静かな声がかかりはつと振り返る。

そこには相変わらず愛らしい容貌に、鋭い眼光を宿した美少女が立っている。・

「ニア：貴方の家族が！？じゃあ、早く探しに……」

塔の中に閉じこもっている人間がどうして急にローズハウスを出て行ってしまったのか、そんな事を冷静に考える理性はこの時の私には全くない。

ニアが急に現れた事にも驚かず、ただ、与えられた情報に飛びついて私はレイチェルさんから身を翻すと玄関に駆けだす。

だが、それに立ち足はだかる様にニアが前に立った。

「何！？」

止められたことに思わず苛立って声を上げた。

どうも様子がおかしいと、リビングで相談事をしていたらしいスタッフたちが私たちの周りに集まり出す。

「お前が探しに行く必要はない。既に軍に行方を探させている。」

「だからって数が増えて困ることはないでしょ！？」

言いながらニアの横を通ろうとすると、彼女はまた私の進路を遮る。

「あの人は最近はなかったが、少し前まではこういうことが良くあ

った。大体、少し歩くだけで足が覚束なくなるような人だ。いつもすぐに見つか——」

「だから、心配して探すこともしないの？そんなのおかしい!!」

ニアの首を突っ込む事を許さない強い口調の拒否にも、今日の私は負けなかった。

彼女より強く声を上げて、ニアが僅かに眉を顰めるのを見ても彼女に対する憤りしか感じなかった。

「いつも見つかるからって、それが今回もだとは限らないじゃない!! 誰かがいなくなるって、貴方が思うよりずっと簡単で、あっという間なのよ?!」

自分で何を言っているか良く分からなくなっていた。

そして、再び過る誰かの背中が遠ざかっていくイメージがちらつく。

(駄目! 思い出したら駄目!!)

この時の私の頭を占めていたのはニアの家族ではなく、消えることがない焦げ付いた私の絶望と不安。

「何を言っている? ともかく、落ちつけ: お前が何のことをいっているのか分からないけど、大体お前はあの人の顔も碌に知らないのにどうやって探すつもりだ?」

「それはっ」

理詰めで言葉を続ける彼女に返す言葉もない。

私を心配して周りに集まってきたレイチェルさんをはじめとしたスタッフたちも、彼女の言葉にうんうんと頷いて私が落ち着くよう

に促してくる。

（落ちついて私…大丈夫、落ちつ…）

私だって落ちつきたい。

だからこそ、彼女たちが促す通り落ちつくべく大きく息を吸おうとした瞬間、声が頭の中に響く。

『落ちつけ。アレの事だ。どうせまた自分を心配してほしいだけに決まっている。探しに行くだけ無駄だ。』

思い出したくない無情な声に吸った息が、ヒュウと変な音になり、吐き出せなくなる。

ヒュヒュと苦しい呼吸に胸を押さえる。

汗が噴き出て、心臓が大きく鳴る。

「おい！しっかりしろ！」

苦しさに蹲った私の背中に添えられたニアの手を撥ね退けた。

「もういい！！とにかく、私は探しに行く！！」

「なっ！」

「私、じっとしてられない！！」

ニアの言葉が返ってくる前に気が付けば、私は走り出してローズハウスを飛び出していた。

背後から私の名を呼ぶ声が聞こえても振り返らない。

呼吸が苦しくても、探す宛ても、探す人の顔も知らないのに我武者羅に走った。

私はともかく、誰かがいない事不安を感じたくなかった。帰っ

てこないかもしれない人をただ待っていたなくなかった。

『すぐ帰ってくるから、待っていてねアイル。』

かつてそう言って私を置いて行った人がいた。彼女はそのまま今も帰ってこない。

ニアの家族を捜すというよりは、彼女の幻影から私は逃げ出したのだ。



その後、どこをどう通って、どのくらい走ったのか定かではない。

「はあはあはあ」

全力疾走のために酸欠の頭では何も考えられず、私が感じるのは繰り返される自分の荒い呼吸だけだ。

それでもローズハウスを飛び出た本当の目的を忘れないでいたから、走りながら視線は歩く人を追った。

ただ、私が走った場所が悪かったのか、はたまた、雨が降りそうな天気が災いしたか、出くわした人は少なく、その全ては男性。

ニアの家族の数少ない情報によると、その人は女性だったはずだ。

さらにローズハウスに行くまでにすれ違った軍人とも会わない。もしかしたら、もうニアの家族は見つかったのかもしれない。衝動でローズハウスを飛び出たが、次第に理性が戻ってくる感覚を覚えながら、冷静にそんな事を考えたつつ、私はやっと走る足の速さを緩めた。

「あれ：ここ何処？」

ただ我武者羅に走ったのがいけなかったのだと思うけど、全然見覚えのない町並みしかなくて途方に暮れた。

しかも、ぽつりと頬に落ちる冷たい感触。

「え、嘘？」

数滴ポツリポツリと落ちてきた後、堰を切ったかのように大雨が滝のように降ってきた。

それで完全に頭が冷えたのか、情けないかな私はオロオロと急にうろたえだす。

（ともかく、どこかで雨宿りしないと！）

傘も持たずに飛び出たため、着衣は薄着だったこともありすぐに水を吸ってべったりと張り付く。

きよろきよろと辺りを見回して、ふと民家だけれど屋根が張り出していて雨宿りするのに良さそうな場所を見つけて私はそこに再び駆けだそうとした。

「馬鹿野郎！」

と、いきなり怒鳴られて、誰かに強く手を取られ引っ張られた。

「え？えええ？ニア！？」

後ろを見上げるようにするとそこには私と同じく濡れ鼠になったニアが、怒った顔をしていた。



驚いた私をニアは無言のまま、雨を避けるため民家の軒下に引っ張っていく。

無言の背中が怒っているのは間違いなく、私はどうしたものかと途方に暮れる。

（バカヤロウ…って初めて言われた）

元々他人と大喧嘩することもない気性なので、面と向かってあんな風に怒鳴られたことは一度もなかった。（マリア教師のお説教は除外）

それを怖いと感じつつも、何となく新鮮な気持ちが胸に過る。

（心配してくれたんだよね？）

多分、飛び出した私を心配して追ってきてくれたニアのその気持しが嬉しくて、私は無言のまま背を向ける彼女を見る。

そこで初めてニアが自分よりも頭一つ分は背が高い事に気が付く。

ニアは平均的な女性と比べても、きつとかなり背が高い部類に入るのだろう。スタイルがいいので、そんなに背が高いとは思わなかったが、こうして手を繋いで近くにいるとそれを改めて実感した。ほどなくして軒下に到着すると、やっとなめどない雨粒から逃れることが出来て、ほっとすると同時に急に張り付くシャツが不快に感じられ、雨に奪われた体温のせいで寒気が体を走る。

思わず愚痴の一つも出そうになって、ニアが沈黙したままで、そんな事を言える雰囲気ではないと気が付いて飲み込む。

代わりに何はともあれ聞いておかなくてはならないことを確認す

る。

「ニアの家族は見つかったの？」

彼女はちらりと私の方に目をやったが、すぐに顔を逸らす。かなり怒っているようで、僅かに顔が赤い。

「ああ、お前が出ていったのと入れ違いくらいのタイミングで、見つかったと報告が入った。」

「そう良かった。」

それが聞いてとりあえず安心して、次に私は勢いよくニアに向かって頭を下げた。

「ごめんなさい！私が勝手に怒鳴って、出ていったせいでニアに余計な面倒をかけました！」

「まったくだ。良く分からないことを喚いてお前が出ていったせいで、私が悪者だったんだぞ？」

私ではなく正面を向いたまま、ニアが顔をしかめる。

「へ？どういう意味？」

「レイチェルを始め、私が冷たいからお前が傷ついて出ていったんだから、私が探しに行くのが道理だと散々責められた。」

その言葉にぎょっとして目を見開く。

「いやいやいや！あれは私が勝手に逆上しただけで、ニアが悪いことは一切ないよ！！寧ろ私が謝らないといけなくらいだし。」

言葉は段々尻つぼみになる。

思い出すだけで数十分前くらいの自分の物言いや行動が恥ずかしくて、どうしようもなくなって縮こまってしまう。

だけど、一見するとあの時の私とニアの喧嘩は、ニアが私を突き放して私が逃げ出したように見えたんだろう。

そのせいでレイチェルさんたちに責められて、こんなところまで私を追いかけてくることになったニアに本当に申し訳ない気持ちになって頂垂れる。

「まあ、私も言い方がきつかったし、お相手って事にしないか？」

「でも、それじゃあ」

どう見ても悪かったのは私だ。

「お前は私の家族を心配してくれただけだし、結果はともかく、謝ってもらったようなことは何もしてないだろう？別にすぐにこうして捕まえられたし…な？」

顔は正面を向いたままだけど、視線だけこちらに向けて照れたようなニアの笑顔。

（わ！笑ったの初めて見た！！）

何かもう可愛いとしか言いようのないその笑顔に、妙なテンションが高まるのを感じる。

そんな私の様子に訝しげな表情を浮かべるニアとニマニマしてしまう私は、その後雨が止む少しの間だけ、特に会話はなかったけれど穏やかな時間を過ごした。

何故だかどんな質問に答えてもらった時よりも、彼女との距離が

少しだけ近づいたような気がした。



雨が止んでとりあえずローズハウスに戻ると、レイチェルさんたちが安堵した顔で私たちを出迎えてくれた。

彼女たちにも心配をかけてしまったと、ひとしきり謝る私に怒った様子もなくみんな一緒に私に何事もなかったことを良かったと優しく言ってくれる。

何だか泣きたくなるような温かな気持ちになった私だけど、ふいにかけられた問いかけに体が固まった。

「でも、どうしてあんな急に怒り出しちゃったの？」

「そういえば、とりあえずニアちゃんが悪いんだと決めつけちゃったけど、良く考えればそういう会話じゃなかったわよね。」

何気ない言葉だろうけど、その言葉に私は声が出なくなるのを感じた。

これだけ迷惑をかけたのだから、ちゃんと理由を話すべきだし、ニアを一方的に悪者にしたままではやはり駄目だ。

ごくりと唾を飲み込んで、その問いに答えようとだけど、急激に襲ってきた緊張に喉が渴いて言葉が出てこない。

「あ…」

「それよりとりあえず着替えとかないか？ 私たち、ずぶ濡れでこのままじゃ風邪をひく。」

隣にいたニアの言葉に、レイチェルさんが大きな動作で慌てだ

す。

とりあえず大きなタオルを借りているけど、私たちは全身がずぶ濡れでタオルだけではとてもじゃないけど、乾く状態ではなかった。

「本当!! そのままじゃ風邪ひいちゃうわね。ついでだからお風呂も入って温まりなさい。女の子二人くらいなら一緒に入れる広さはあるし、いつでも入れるように準備しておいたの!」

そう言っつていつもの彼女に戻って澆刺とした明るい笑顔で私たちの背中を押す。

「風呂!? 私はいい!! 着替えだけ貸してもらえればっ」

「何言っつているの! こんなに顔も冷たくなっているわよ? もう準備万端なんだから、それを無駄にしないで頂戴。」

何故だか急に焦りだしたニアアの頬を触って大げさにリアクションをして、有無を言わせずレイチェルさんは私たちを浴室に押し込むと、着替えをとってくると行っつて出ていった。

取り残された私たちに何故だか微妙な沈黙が落ちた。

ローズハウスの浴室に入ったことはないが、住人が何人か一緒に入れるように脱衣所も広々としている。

たくさんタオルや子供たちの玩具があり、ここで住人達が生活をしていることを感じさせた。

私は体が冷え切っているし、お風呂に入れるのは正直ありがたいので、扉の方を向いたまま固まったニアアを不思議に思いつつ、濡れた服を脱ぎながら話しかけた。

「ニアア、さっきはありがとう。」

「あ……!?!」

問いかけた私を振り向いた瞬間、ニアは思いつき顔を背ける。

「どうしたの？」

「い、いいいや何でも！！っていうか、ありがとうって何だ？」

「さつき、私が言いくいのに気が付いて話を変えてくれたでしょう？助かったよ。」

「まあ、誰だって言いたくないことの1つや2つはあるから、は、ハハハ」

乾いた笑い声と、急に焦ったような様子のニアは未だに洋服を脱ぐ様子はない。

だけど、洋服が濡れて透けてしまっただ着の線どころか色まで分かってしまう。（ニアは清楚な水色だ）

何処となくいつもと違う様子のニアを観察しながら、私は女同士と言えども、お嬢様の彼女は誰かと一緒にお風呂に入るという習慣がないから照れているんだという結論に達した。（ちなみに私は寮で共同風呂なので全く抵抗はない）

しかし、彼女も私と同じ状態なのだし、やはりお風呂に入った方がいいに決まっている。

私はとりあえずシャツとズボンを脱いで下着姿になると、彼女の背後から洋服を脱がせにかかった。

「な！何をっ?!」

「だってニア、全然洋服脱がないじゃない！服着たままお風呂は入れないよ？」

背後からまるで私に襲われるようになった形になって、暴れだすニア。

真っ赤になって焦る様子は普段の彼女とは全く違って面白い。

「私は風呂には入らない！！レイチェルが持ってきてくれる服に着替えるだけだ！！」

「何で？折角だし一緒に入ろうよ？」

「はいらな——おい、待て！！本当に脱がすな！！」

抵抗は驚くほどに激しかったが、幸いに今日彼女が着ていたのが後ろにチャックのあるワンピースだったこともあり、背後からさつさとチャックを下げていたので、脱がすのは結構容易だった。

パサリとワンピースが落ち、その瞬間ニアの抵抗が最大になる。彼女の背中に張り付くようにして服を脱がせにかかっていた私は、その瞬間バランスを崩しニアに凭れかかってしまう。

そのせいでニアの体がぐらりと揺れて床に私ともども倒れこんだ。

『うわ！！』

二人の人間が倒れこむ音が響き、冷たくなった肌と肌が触れ合う。私はニアが下敷きになってくれたおかげで何処も痛まなかったが、下敷きにしてしまった彼女は自分の重みで痛いに違いない。

「ごめ——」

急いで起き上がり、ニアに今日何度目かになる謝罪の言葉を途中で私は言葉を失った。

私は今、どういう風に倒れたかは定かではないけど、仰向きに倒れ込んだニアに馬乗りになる形になっている。

起き上がった私は真っ赤になって言葉を失っているニアと一瞬だけ視線が合い、その後、彼女の体に釘付けになった。

濡れた服の下から透けていた水色のブラ、それが包んでいるはずの柔らかい胸……のあるはずの場所から目が離せない。

言っておくけど、それは私が同性にそういう興味があるとか、そんなんじゃない。

(ない！)

何が『ない』かといえば、女性ならば大小の差はあれど、誰しものが持っているはずの胸の膨らみ。

それがニアには皆無で、代わりに明らかに胸板だとかいえない筋肉の上にボールのようなものが胸の代わりになっていてブラがそれを包んでいる。

胸が今まで出会ったどの女子よりもないという事実、一瞬、ありえない想像が頭をよぎる。

(ニアはもしかして…いいや！これはいまはやりのパットの類に違いない！)

胸のポリウムを出すための偽乳の存在は女学生の間では結構メジャーだ。

それとは明らかに違うと思いつつも、私は無理やりそう自分に言い聞かせた。

この時の私は本当にパニック状態だったのだ。

慌ててとりあえずニアから離れなくては、そして、自分のありえない想像を払拭して一緒にお風呂に入らなくてはと、立ち上がろうとしたけど力が入らず、とりあえず後退して体をどかさうと後ろに手をついた。

「うわあ」

「きゃあ」

その瞬間、手に何か柔らかい感触とそれまで茫然自失していたニ



ーアが叫んで急に立ち上がり、彼の腹部に乗っかっていた私は床にごろりと転がった。

床は脱衣所と言うこともあり、固い素材ではないので私はすぐに座り込んだまま体を起こし、そして、すぐ傍に立っていたらしいニーアのちょうど股のあたりが目の前に来る。

「き……」

そして、それを見た瞬間に喉の奥から、今まで自分でも出したことのないような悲鳴が押しあがってくるのを感じた。

（な…なんなのよ、この膨らみ！！！！）

羨ましいくらいの白くて細い御足よりも、私の思考を奪ったのはブラとお揃いらしきショーツに包まれた女性にはない膨らみ。

頭は真っ白になったけれど、たった一つの事実が明確になって私を襲った。

——男！！！！

その答えに辿りついた瞬間、私は押しあがってくる悲鳴を吐きだそうとして、それに気が付いたニーアに口を手で押さえられた。

「ま…まで！これには事情があるんだ」

「んゝ！！」

女子になりすましていた男子にどんな事情があるかなんて、この時の私の知ったことじゃない。

ただ、美少女だと思っていた相手が男で、今二人は互いに下着姿でこんなに近くにいて、もう何が何だか分からなくて、ただただ混

乱するしかなかった。

実はこの女装美少女（いや、美少年になるのかな？）ことニールが、後に私の夫になる世界王フィリーだなんてこの時の私には全く想像できない事であった。

## 2-1

昔々、大地は命が育まれることのない死の大地だった。

その大地に神が恵みを与え、動植物が息づき、人間が生まれた。

人間は神を敬い、神もまた人間を慈しみ、その中で一人の女性に神の血を引く子供を授けた。

——神と人間の血を引く子供、それが初代世界王レインバック・ヴァトル

彼は神と同じ、金の髪に青にも緑にも見える澄んだ瞳、そして、その左胸には神の子の証である太陽の紋章が刻まれていたという。

以後、彼の血を引く世界王は代々、同じ髪と瞳の色を有し、そして必ず太陽の紋章がその左胸に刻まれている。



「太陽は私たちの神の本当の姿だと言われ、光と命を象徴しています。太陽の紋章が刻まれているという事は、世界王が神の力を身に宿している証拠とされています。」

（左胸：そういえば何か紋章みたいなものがあつた気がする）

とはいっても、夫：もとい世界王フィリーの紋章を見たのは、彼がまだニアと言う名の少女の皮を被っていた頃。

彼を女の子だと思いこみ服を脱がせたあの時だけだ。

最近、昔の事ばかり考えているので、もう十年くらい前のこと

ただどすぐに思い出せた。

（まあ、あんな強烈な事そうそう忘れられないし）

男性に対して免疫がない訳では無かったけれど、女の子だと思い込んでいた相手が男だったのだ。驚くなという方が無理。

（あの後も大変だったんだよねえ）

「オホン！聞いていらっしやいますか？」

更に過去に意識を飛ばそうとしていると、ずいっとファイリーンの化粧の濃い顔が目前に迫って、私は咄嗟に体を引く。

「は…はい」

目つきが怖い彼女相手に、大人しく返事をするとき大きくため息をつかれる。

私は今、ファイリーンから神のことについて講義を受けていた。オルロック・ファシズの私は当然神の事など大して知らずに育っているけれど、世界王の妻となったからにはそう言ってはいられない。詳しく知らなくとも一般教養くらいの知識は身につけると、ファイリーンから今日も今日とてスパルタを受けていた。

とはいいつつも、ここ数日はこんな風に過去に思いをはせることが多くなり、講義にも丸つきり身が入っていないので、彼女がどんなにスパルタだろうと何一つ知識として実になるものはない。

その事を申し訳なく思っている、やはり、暗にでるなど言われた舞踏会のために必死で練習することなどできず、フィリーの様子

から考えてもこれからずっと何を勉強しようとも、それが役立つ日が来るとは思えない。

結果として本当にやる気のない私が完成してしまったのだ。

最初はそんな様子の私に口酸っぱく小言を言ったファイリーンも、何を言われても平然としている私に何も言わなくなった。

ただし、彼女もここで講義をするのが仕事なのでその役割は果たしてくれているし、私もそれを放棄することはしなかった。

何しろファイリーンの講義がなくては、私は日がな一日、何もすることがなく後宮に引き籠もっているだけになってしまいうから。

例えばそれが昔から苦手な勉強や、身につかない礼儀作法であったとしても：どんな形でも他人と関わらず自分の殻に永遠に閉じこもっているのは、私は生きながらに死んでしまうだろう。

そんな暗い考えを頭の中で何度も繰り返しては、鬱々とする日々が日常となりつつあった。

「えっと、一つ疑問に思ったのだけれど聞いてもいいですか？」

小言を続けるファイリーンを気にすることなく、私はふと今の講義で気になった事を口にした。

「あら、質問なんて珍しいですわね。どうぞ？」

「神、神っていうけど、貴方達の神の名前はないの？」

彼らの信じているのが唯一神であり、その他に登場する神がいなから、神と言えば『神』しかないのだろうけど、神にだって名前くらいあるだろう。

そう思っただけで、私の問いにファイリーンはきょとんとして首を傾げた。

「名前：ですか？私は知りません。というか、恐らく神に名前はなないように思いますわ。神は神ですもの。」

貴族のお嬢様然としているファイリーンだけど、その知識はこれらの博士を名乗る人より上だと聞いている。（自称だけれど）

それもかなりの書痴で、様々な知識に精通しているらしい彼女がこういうのだから、実際に神に名前は無いのだろう。

別に元々大して興味が無いことなので、ふーんと思いがようがなかったけど、何となく気になる。

「では、神についてはここまでにして、次はダンスの練習に入りますわよ！！」

何故だか私のやる気の無さを感じ取っているはずなのに、それに比例してダンスに対してだけは彼女のやる気は上昇する一方だ。

前はそれに反発したり、対抗意識を燃やしていたけど、最近の私は本当に何も感じなくなりつつあった。

「ダンスはいいです。それより神の話をもう少し聞かせてもらえないでしょうか？それともし神について私でも読める本があったら貸してもらいたいのですが。」

「どうしてですの！？」

とたんに目を吊り上げるファイリーンに、私はぼんやり笑って見せた。

「ファイリーンの話がとても興味深かったから、もっと知りたいと思って。それに私、オルロック・ファシズの間じゃないですか？早くここに慣れるためにも、色々知りたいんです。お願いします。」

ファイリーンは傲慢なお嬢様っぽいけど、勉強しようという意欲を見せると、それがどうやら嬉しいらしいと知ったのはここ数日。

「…まあ、それならば仕方ないですわね。」

怒ったような素振りを見せつつも、顔は微妙に笑っている彼女が微笑ましい。

多分、彼女は師として仰ぐのには十分な人物なのだと、彼女の見た方が私の中ではかなり変わりつつある。

嫌みや挑発の応酬さえないように私が心掛ければ（ファイリーンからあっても、それを返す気力が今の私にはない）、彼女と付き合いうことは大きな苦痛となる事はなかった。

「ですが、分かっているのですか？誕生祭は3日後、もう時間が無いのですのよ？」

その言葉には答えない。否、答えられない。

本当は言ってしまうばいいのに。

『陛下から舞踏会には巫女様をパートナーとすると言われた』

そう言えば、ファイリーンだってこんな風にダンスダンスと言わなくなる。

だけど、私はまだそれを告げれずにいる。

言ってしまうばそれを認めることになる…往生際悪く、私はまだ自分が王妃としてすら認められていない事実を受け入れられていないんだ。

そんな自分の諦め悪さが、底意地の悪さが憎い。

いつかは認めなくてはならない、いや、それより先に現実がそれを認めざるを得ないように私を追い詰める。

だけど、そうなった時、私は自分が大きく壊れてしまうような気がして、怖くて自分でそれを認められないのだ。

妻としての存在が疎まれているのは分かっていたから、せめて、王妃としてこの場所にいる意味が私の支えだったのだから。



ファイリーンは講義が終わった後、すぐにお問い合わせした本を手配してくれたらしく、ルッティから寝る前に本を渡された。

古く使い込まれているが立派な造りで分厚い本は、綺麗な挿絵も多く、ぱらぱらとめくった印象では神に纏わる伝説などを集めたものようだ。

あまり堅苦しい内容ばかりでなく、これならば私にも読めそうだと時計を確認するとフィリーがいつも来る時間よりまだ大分早いので、行儀が悪いとは思いつつもベッドに寝転がりながら本を読みだして数分後、

「アイルフィーダ様。陛下がお渡りでございます。」

ルッティからそんな声がかかって慌てる。

最近、特にこちらに来るのが遅いと思っていたから油断していた。急いでベッドから飛び出ると本を片づけて、シーツの皺を伸ばし、鏡を覗きこんで変なところがないか確認する。

最後に深呼吸一つして、数十秒後、ドアが音を立てて開くと同時に頭を下げる。

「おかえりなさいませ」

まあ、どんなに慌てて色々整えたところで、何かが変わる訳じゃない。

後は彼が私を抱きしめて、あの言葉を言って寝るだけ。

この間までは辛くてもまだ、その辛さに甘さが伴っていたことが、今となってはただの苦痛に過ぎなくて私はさっさとすんでくれればいいと、立ち上がったまま動かない。

だけど、今日は彼の方から、いつもとは違うアクションが起こる。

「今日はこれを君に。」

そういつて机に結構大きい箱を置く。

白い箱に金色の豪華なリボンが掛けられたそれは、見るからにプレゼントだ。

『君に』と言われたことから、私宛のプレゼントと言うことになるのだろうけど、そんなものを貰うとは予想したことがなかったので驚く。

そのままどうにも現実を受け入れられない私に、フィリーの方がしびれを切らして、机に置いた箱を私に直接押し付けてくる。

「ほら」

「あ、はい。えっと、ありがとうございます。」

中身が何かは分からないけれど、大きい箱を両手に抱えてとりあえずお礼を言う。

箱は大きさを割に軽い。

(????)

私は疑問符を頭の上に何個も飛ばす。

プレゼントを貰う理由と状況が分からない。

更にはそもそも実はこれがフィリーから貰う初めてプレゼントであると思いついて、嬉しいやら戸惑うやら、どうも反応に困る。

そのまま固まっていると、フィリーがまだこちらをじっと見つめたままなのに気がつく。目が合うと、不機嫌そうな顔で一言。

「開けないのか？」

「あ、はい！」

なるほど、わざわざ手渡ししてくれたプレゼントをすぐに開けないというのは、失礼というものかもしれない。

慌てて抱えたままだった箱を机に置いて、光沢のある高級そうなリボンに手をかけて、自分の手が震えているのに気がつく。

（えええ？私、嬉しすぎて震えてる？）

咄嗟に気が付けない感情を体は正直に表しているようで、顔の表情筋も笑いたいのに笑えないらしく、微妙にひくついているのに気が付く。

震えるくらい嬉しいのだけれど、照れているのと、その感情をフイリに知られてドン引きされるのが怖くて、理性が色々なことを制御しようとしているのに制御しきれていない…そんな感じ。

そんな自分でも呆れるくらい面倒くさい感情に閉口しつつ、ともかく、何でもないふりをしてどうにか箱を開けた。

「……ドレスですか？」

かくして、箱の中から出てきたのは、光沢のある柔らかそうな素材の布地。

見るからに高級そうで、箱を開いたはいいけれど触れるのにも躊躇してしまう。

後宮に入ってから、ドレスと言われる類の服を日常着として着せられてきているが、着慣れていない上に、平凡な容貌にドレスが似合わないのも十二分に理解しているので、私はドレスと言うよりはなるべくワンピースに近いものを好んで着ている。

そもそもオルロック・ファシズで一般的な服装は、基本的にシン

ブルで簡素、更に女性もズボンを履くことが当たり前なのに対し、レディール・ファシズにおいてはそれは野蛮とされる。

ここでは上層階級の女性ならばドレスを着ることが当たり前で、それが豪華であればあるほどステータスであると考えられている。

私も王妃として様々なドレスを用意されているけれど、そのどれもフリルやレースをこれでもかという程使用され、輝く宝石やビーズがそこかしこに付けられている。

正直、全く趣味でないというのが本当の所で、確かに綺麗だと思うけれど、それが似合う似合わないは別問題。

平凡で貧相な私には、そういった飾り立てられたドレスは基本的に似合わないと思うが分かりそうなものを、これが王妃として正しいドレスだと押しつけられる。

でも、やっぱり似合わないから着たくなくて、結局は実家から用意してきたワンピースばかりを着てきた。（その度にファイリオンには馬鹿にされたけれど）

だから、ファイリーがプレゼントしてくれたのがドレスだと察して、嬉しいと思う反面、それを着こなせるか全体像を見る前から非常に自信がなく、心が萎えた。

おかげでドレスが入った箱を前に、私は再び立ちつくす。

「出さないのか？」

「は、はい、いえ、すぐ!!」

そんな私にじれったさを感じたのか、再びファイリーが口を開く。

それは敢て疑問形にするのも不自然なほど、明確な命令形で、私は急かされるようにドレスを箱から取り出す。

さらりとした涼やかな布が音を立てて、寝室の柔らかな光の中に金ともベージュとも言えぬ色が煌めいた。

全貌が明らかになったドレスを見て私は一瞬息をのむ。

(綺麗…)

そのドレスは私がここにきてからイメージしてきたドレスとは違った。

細身のAラインのドレスは、スカートの部分はフワリとしているが、だけれどフリルやレースではなく、絶妙なバランスで布をまるで花卉のように縫い合わせており、更に細かな刺繍によって派手ではないが繊細で美しい模様が描かれている。

シンプルで露出が少なく、更に気品があって美しいドレスに、あまり洋服に興味のない私も胸が高鳴った。

思わず声が出ないくらい見とれていた私だけれど、フィリーはそれを悪い方にとったらしい。

「気に入らないのか？」

その言葉にはっとして、とりあえず首を横にブンブンふる。

「いいえっ…あのとても素敵なおドレスで気に入りました。」

本当ならばもっと感情をこめて喜びをアピールする所かもしれないけれど、どうにも照れが先行してしまい言葉は酷く他人行儀なものになった。

あまり喜びすぎてフィリーに引かれるのもやはり怖い。

幸いに私の不器用な喜び方でも、彼は幾分か不機嫌な顔を緩めてくれる。

「なら良かった。こっちのドレスはメルト・ファウスト育ちのお前の感覚では抵抗あるだろうから、そういうドレスなら気に入ると思った。」

「えら・んでくれたの？」

フィリーの言葉に信じられないような気持で問うと、彼は顔を歪めた。

「昔からお前の服のセンスは正直言って質素すぎるんだ。今度の誕生日祭であんまり貧相なものを着られても困るからな。」

そういつて悪態をつかれても、今日は堪えない。

だって、それって要するにこのドレスを選んだのがフィリーだと認めたということ。

ただでさえ綺麗だと思ったドレスが、ことさらに大切に思えて私は言葉詰まらせた。

こんなことでこんなに喜んでしまうなんて、今の自分の弱さと言うか、妙な感受性の強さに、馬鹿だと思う。

更にさっきまでは単語だけでまるでロボットの様に言葉を発していた彼が、昔までとは言わないけれど私と会話をしてくれることも嬉しかった。

フィリーの行動や言動に、こんなに一喜一憂するなんて大人にでもなつて、学生の頃と私は何一つ変わらない。

だけど、今はその言葉に喜びを感じていなかった。

「ありがとうございます。」

でも、それはフィリーにとってはきつと重荷にしかないだろうけど、せめて感謝だけはちゃんと伝えたいと、久しぶりに彼の眼を見てお礼を言った。

それが多分、珍しかったのだろう。

フィリーはただでさえ大きな瞳を更に大きくさせて驚いた表情を浮かべる。

（こういう顔を見ると、昔と変わらない。）

今となつては美青年と言っても差支えないだろうけど、私から言わせると美少女だったころの面影が消えないままだ。

今だって女装させたら、体格的な所はどうしようもないけれど、少なくとも私よりは美女になるに違いないと確信している。

そう思うと何だか笑えてしまつて、気が付くと小さく吹き出してしまつた私を見て、何か不機嫌にさせてしまつたのだろう。フィリーが何かを我慢するように顔を背ける。

（あ…）

それを見て、嬉しくて高揚していた気分が急速に萎んでいく。

何が気に障つたのか分からないけれど、それまであつた和やかな雰囲気が一気に霧散して、いつもの重い沈黙が私たちの間に戻る。

そして、沈黙に耐えがたさを感じたのか、フィリーは何の脈絡もなく唐突に

「愛している」

そう言つて、いつも通りドレスを持つたままの私を抱きしめてベッドに入っていく。

それをいつも通り何も言えないまま私は見送る。

（私は何を間違つたのかな？）

そう心の中で問いかけても、あたりまえだけど誰も答えてはくれない。

私が今できるのは、せめて先程の楽しい名残を抱きしめるように、もらったドレスを抱きしめることだけだった。

## 2—3

——アイルフィーダ

それは神の子を宿した女性が愛した伝説の花



何気なく目に入ったページに自分の名前があった。

フィリーからドレスを賜るという珍事の翌日、ファイリーンの講義も今日はなく、午前に誕生祭での注意事項をルッティと確認してからは特にやることも無く、ぼんやりと過ごしていた午後。

ファイリーンから借りた本を暇潰しに読んでいた私は、自分の名前にそんな意味があることを初めて知った。

「ルッティ、私の名前って花の名前だったのね。」

やることも無いのに、傍に控えてあれこれと世話を焼いてくれるルッティを振り返ると、彼女は優しく笑顔を浮かべた。

「ご存じありませんでしたか？こちらでは女の子の名前として少ない名前です。」

「うん。」

本には花の絵も描かれている。

白にうつすらと青を乗せたような色で描かれている花は、見た目



は薔薇のようだけれど、薔薇よりも花卉が多く柔らかい感じで描かれている。

「アイルフィーダは想像上の花なの？」

「はい。実際にはない花です。伝説によりますと、神が悪魔の毒に苦しんだ時、アイルフィーダの不思議な力によってその毒は癒されたとか。以降、アイルフィーダは神、ひいてはその子孫である世界王を支える巫女の象徴とされております。」

その言葉を聞きながら、私は本に描かれたアイルフィーダを指でなぞる。

（巫女の象徴：彼女にならこの花もよく似合う）

自分と同じ名前の花というにはあまりに可憐な花が、『彼女』の象徴であると聞くと途端にしっくりとくる。

そのことに凹みながらも、表にはおくびにも出さず本を読み進めていると、部屋の外から誰かがドアをノックする。

ルッティがそれに対応すると、彼女は戻ってきて私に告げた。

「アイルフィーダ様。巫女がお会いしたいと仰っておりますが、どうされますか？」

聞き取りやすい声でゆっくりと告げられた言葉。

だけれど、その言葉を頭が理解するのにゆうに数十秒かった。

（巫女が私に会いたい？）

彼女と会ったことがあるのは、実際には数回。

彼女は私のことなどほとんど記憶にも残っていないだろう。だけ

ど、会ったことは少なくとも、私は彼女のことをよく知っていた。

——それも知りたくないほど知りすぎて、彼女を嫌いになるほどに

ぐっと握った拳の中で汗が滲む。

本当は会いたくない。

私と彼女が会って何になるというのだと、追いつきたい気持ちは十分にある。

だけど、ここで彼女から逃げたと思われるのも嫌なのだ。

弱い私と意固地な私が戦うためにたっぷり数分沈黙した後、私はルッティに巫女と会うことを了解する旨を伝えた。

どう見ても不自然に考え込んだ私にも、ルッティは怪訝な顔一つせずに対応してくれる。

心配されるのも嬉しいけれど、今はそんな風に放っておいてもらえるほうが助かったので、口には出さないけれど私は彼女に心の中だけでお礼を言った。



——【巫女】とは何か？

その起源は神に子供を授けられた女性、要するに初代世界王の母親であるとされている。

後に聖母様と崇められるその女性の名はヴィルシェリア。

世界の王の母であると同時に、神を守る守護者で戦乙女の名を同時に冠する伝説の存在。

彼女亡き以後、神と世界王を何人からも守り、公私にわたって補佐する役目として、世界王が選定される度に、その対となるように

巫女が選ばれるようになる。

そして、巫女が生んだ子供が次の世界王となる。

巫女と呼び方は違えども、要するに巫女も世界王の妻と同義なのだ。

もっともその存在はレディール・ファシズにとって世界王と同列の地位を有し、後宮ではなく巫女のための離宮があり、彼女はそこで暮らしている。

はつきり言おう、王妃なんて私だけじゃなくて、歴代の王妃その大半が皆名ばかりの存在だったに違いないのだ。

実際、世界王の本物の妻は巫女：その存在であることは、誰が見ても明らかな事実としか言いようがない。

しかし、不思議な慣例というものがあり、世界王と巫女は二人の間に子供を作り、巫女が生んだ子供でなければ世界王になれないというのに、結婚はしない。

それはその始まりが母と子であったことに帰来するのか、その辺りの事情に明るくない私には計り知れない部分があるのだけれど、世界王に即位したと同時に新しい巫女も選ばれ、そして、結婚しないまま子供を作り、その子供が次の世界王として即位するまで二人は世界王と巫女として共にあり続ける。

世界王は基本的には王妃と後宮を持つものらしいが、巫女を想い、妻の一人も娶らなかった世界王も実際にはいるらしい。

要するに舞踏会でフィリーと踊るのだって、王妃わたしではなくて巫女がその役割を担うのが正しいといえれば正しいのだ。

ちなみにもちろん私がこちらの嫁ぐより前に巫女はフィリーの隣に当たり前のよう存在していた。

そして、フィリーと私の結婚式にも参列し、彼女から祝福を受けた。

神々しい巫女の衣装を身に纏った彼女は、花嫁衣装を着た私より

もはるかに美しく、世の人は世界王の妻が巫女でないことを私に聞こえるように嘆いた。

彼女と最後にあつたのはその時だと思うのだけれど、それ以降、一度だって会いたいなどと言われたことはない。

（一体、何の用なんだろう？）

私は巫女の所に行くために着替えるのをルッティに手伝ってもらいながら、悶々とそれについて考え続けるがやはり何も思い当たる節がない。

ちなみに会いたいと言ってきたのは向こうなのに、どうして私が赴かなくてはならないかと、そういうツツコミは心の中でしまっておいてほしい。

こういう堅苦しい場所はともかく、地位や礼儀というものにうるさい。

世界王のただの妻という私の立場より、巫女という世界王に匹敵するただ一つの存在の彼女のほうが、ここでの立場はかなり上。

その彼女に私のところに来て頂くなど、はつきりいつて失礼千万、不敬罪で首が飛んでしまうくらいのことらしい。（ドレスだって失礼のないように着替える必要があるのだ）

そんなの会いたいほうが会いに来ればいいんじゃないと、私なんかは思ってしまうのだけれど、それで私の周りの人に迷惑がかかるには申し訳ないし、どうせ暇なのだから出向くのは億劫ではなかった。

しかし、着替えを手伝いながら、後宮から出るということにルッティが難色を示していた。

「今はまだアイルフィーダ様の警備が万全でない以上、後宮から出ることはやはりお勧めいたしません。」

着替えはすみ、今度は鏡台に座って髪を結いあげられる。  
ルッティはブラシとピンを使って、魔法のような手際でそれを完成させた。

「そうはいっても、行くって言ったものを今更行けないとは言えないし、巫女に来てもらう訳にもいかないでしょう？」

「そうなんです。大体、慣例はあるかもしれませんが、アイルフイーダ様のご事情を鑑みれば、巫女の方から来るべき所です。用があるのもあちらですし：一体、何の用なんでしょうね？」

「そんな事、私もわからないわよ。ともかくお待たせするのも申し訳ないし、さっさと行って帰ってきましょう。」

全体像を鏡で確認して準備は完了。

「しかし……」

私の侍女という立場で責任を持つ彼女としては悩ましいところなのだろうが、実際、私としてはそんなに自分に警備を裂く必要があるのか首を捻るところだ。

確かにオルロック・ファシズの王妃というのは前代未聞だろうし、私が誹謗中傷されているのも事実なのだろう。

だけど、ここはあくまで城の中なのだし、しかもこんな白昼堂々と私を襲う輩がいるとは思えない。

幸い巫女の離宮は後宮とはさして離れていないというし、私としてはそのことに何の不都合さも感じないのだが、さて出陣だとかばかりに立ち上がる私をルッティはなおも引き止める。

「お待ち下さい！ いかれるにしても、ともかく一度陛下に許可を頂いてからでないと。」

「城の中を移動するだけで陛下の許可がいるの？」

こんな言い方をしたくないけれど、いい加減言いたくなる。

「申し訳ありません。ですが、アイルフィーダ様のことに関しては全て陛下のご意志を確認するように申し付けております。」

部屋から廊下に行く唯一のドアの前に立たれてそう言われては、私も折れる他ない。

「はあ……じゃあ、その旨を巫女側にも伝えておいてください。陛下にも早く許可をもらってください。」

待たせて後で難癖をつけられても面倒だ。

「はい！では、もう少しお待ちください——」

「し・失礼いたします！アイルフィーダ様、巫女よりお迎えの使者がいらっしゃいました。」

ルッティがフィリーの許可をもらうべく部屋を出ようとした時、別の侍女が何だか慌てた様子でドアの外から声をかけてきた。

ノックもなくいきなり声をかけてくるなんて、教育が行き届いている後宮の侍女にはあるまじき行為だけれど、その言葉にルッティも驚いたらしく、それに気が付かぬままドアを開ける。

「迎えですって？」

「はい。あのえっと……アイルフィーダ様のご事情を察して、巫女の護衛騎士ランスロット様が離宮までご案内すると言ってお越しなのです！」

現れた侍女は私も見知っているいつもは落ち着いた感じの女性だ

が、彼女もどうしたらいいかわからずオロオロしている。

どうやら命を狙われる危険がある（笑）私を慮って、巫女が私の移動に際して自前の騎士を護衛につけてくれるらしい。

至れり尽くせりで怖いくらいだ…だけど、そうまでして彼女は私に会いたいということでもある。

「と、ともかく陛下の指示がなくてはアイルフィーダ様は動かせません。騎士殿にも少しお待ちいただいて——」

「と言われても、もう来ちゃってるんだけど？」

その声に侍女たちのやりとりを見ていなかった私も驚いて振り返る。

侍女二人があんぐりと口を開けて驚いたその先に、一見して騎士だと分かる服装をした青年が一人。

見事な銀髪は長いまま垂れ流し、切れ長で聡明そうな瞳は深い青、派手な配色を有するその青年は、なるほどその派手さに見合う美しい造形をしている…が、

（騎士っていう割には軽薄そうな男ね）

いい大人が『来ちゃってる』なんて言葉を堂々と使うなど、私は男をじつとりと睨み付けた。

だが、男は睨み付けた私の顔を別の意味にとったらしい。

「いやあ、そんなに見つめられると困ります。どんなに焦がれても、貴方は王の妃なのですから。」

などと妙に芝居がかった言葉でおちゃらける。

その言葉に怒りと呆れで米神と口元がひくつく。

かくして、この男、侍女が言った通り巫女付き騎士ランスロット

への最初の印象は最悪の一言に尽きた。



まるでお伽噺から飛び出た王子のように、ランスロットは優雅に一礼すると口上を述べた。

「お初にお目にかかります。私は巫女直属騎士ランスロット・ロバルデ。王妃様におかれましてはご機嫌麗しく。お目通り叶いまして恐悦至極に存じ奉ります。」

顔を上げるときらりと光る笑顔。

私はそれを見て、彼は職業を間違えたに違いないと心の中で断言する。

（これだけ顔がいいんだから、役者にでもなればよかったのに：いや、演技は下手だからそれも難しいのかな？）

言っていることは非常に礼儀正しいのだけれど、その言葉を告げる声や態度が薄っぺらく、私は自分自身がひどく軽く扱われている気がして、気分が悪くなるのを感じた。

別にこの派手な男に敬われたいとか、傳かれたいとか、そういう事じゃない。

ただ、こういう薄っぺらい態度で接するのならば、それに相応した軽い言葉で話せばいいのだ。

妙に丁寧な言葉を軽い声で話されるから、馬鹿にされているような、見下されているような気がして、嫌な気分になる。

（そんでもって、この男は最悪なことに、それを無意識じゃなくて：私の機嫌を損ねるためにわざとやっている。）

挑発されているのだろうか、頭の片隅で考える。

この挑発がランスロット個人のものなのか、はたまた巫女から男を通してされているものなのか、相手の意図が分からないまま、こんな安い挑発にのるのも馬鹿馬鹿しい。

すうっと私のどこかで温度が下がるのを感じた。

「こちらこそ初めまして。アイルフィーダと申します。本日は巫女様のところまで護衛して頂けるとか、ご多忙の中お手間を取らせてしまい申し訳なく思っております。」

笑顔を浮かべ、スカートの裾を両手で持ち、僅かに腰を落とす。

その角度や、頭を下げるかどうかなど、自分と相手の地位を考えて変化させなくてはいけない、この一連の動作もファイリーンのスバルタ教育の賜物で完璧だ。

そんな上っ面だけ完璧な王妃の私を見て、ランスロットも更に笑みを深くする。

「これはご丁寧に。何、私は巫女付きなので、巫女が動かなければ大した仕事もない暇な身ですのでご安心くださいませ。それより王妃様こそ誕生祭が近い今お忙しいでしょうに、主の我儘におつきあい頂き申し訳ありません。」

表だけ取り繕って空言で謙虚に装い、互いの腹を探るかのような言葉のやりとりが、笑顔の間に火花となって散る。

その火花が見えた訳ではないだろうけど、そこでそれまで呆けていたルッティが我を取り戻し、弾かれたように叫んだ。

「ランスロット様！こちらは後宮、それも王妃様の自室ですよ?!」

いつも静かに話す彼女が真っ赤になって声を荒らげる様子に、隣

で一緒に呆けていた侍女も目を丸くする。

それに一瞬気まずそうな表情を浮かべた後、ルッティは冷静さを取り戻すかのように深呼吸を一つすると言葉を続けた。

「貴方様が誰であろうと、後宮に陛下以外の殿方が入ることは許されません。すぐにご退出下さいませ。」

「まあまあ、侍女殿。そんなかたいことを仰ら——」

ランスロットは人好きしそうな笑顔を浮かべながら、ルッティの肩に手を置いて彼女を宥めにかかろうとする。しかし、

「汚らわしい！触らないでください。」

その手をルッティがピシヤリとはねつけ、手を落とされたランスロットも上っ面が剥げて目を見開く。

（『汚らわしい』なんて、中々強い言葉を使ったわね）

いくらランスロットが軽薄な若者そのものだとしても、いくらなんでも『汚らわしい』とまでは思わないし、それは思っても口にするのは少々憚れる言葉だ。

そんなこと侍女の鏡のようなルッティが分からないはずはないのだが、ランスロットの突然の登場に混乱しているということなのだろうか？

常とは違う彼女の態度に、私も心の中で首を傾げた。

「巫女からの使者であるというのであれば、取次の間でお待ちください。これ以上、ここに居座ると仰るのであれば、後宮の護衛兵を呼んで貴方を排除するだけです。」

小柄なルッティがランスロットと私の間に立ちはだかり、毅然と言いつ放つ。

「それは困りますね。畏まりました。すぐに退散いたします。」

上っ面を取り戻したランスロットは、困ったと言いながら顔に笑顔を張り付けたまま両手を上げて降参のポーズをとる。

そして、一礼をして頭を下げたまま視線だけを私に向ける。

「それでは取次の間でお待ちしております。お早いお越しを…巫女は王妃様と違ってお忙しいので、あまり時間がございません。」

丁寧な言葉を軽い声で紡ぎながら、最後のところだけ少し声のトーンを落とし、私を見る目に剣呑な光が宿る。

その瞳の光はランスロットが、ただの顔だけの男だということを否定するだけの強さがあった。

（あら、そういう顔もできるわけね。）

その瞳が含むところに気が付かないふりをして、私はのんびりとそんなことを考える。

軽薄なだけな男の軽口に閉口し続けるのと、侮っては痛い目にあうからと気を張り続けているのでは、どっちが楽なのだろう？

まあ、ランスロット相手に喧嘩をするわけじゃないのだから、そんなことを考えなくてもいいのかと思いついたが、巫女に会う前から疲れてしまって、私は大きく息を吐いた。



ランスロットが告げた通り、巫女は分刻みのスケジュールを無理やり開けて私と会おうとしているらしい。

遅れる旨を伝えたら、それでは困ると巫女サイドから強く拒否されたのがその証拠だ。（向こうが会いたいと言っているのだから、その言い分には理不尽さを感じないでもないけれど）

それならばルッティも自分が同行するということを条件に、フリーへの報告を後回しにして私の久々の後宮脱出はなされた。

かくして、私は巫女の離宮へと案内されている。

先導するのは無論、使者を買って出ているランスロット。

群青のマントを翻して颯爽と歩く様子はさすがにさまになっていと言わざるを得ず、通りすぎる城仕えの女性たちがうつとりした目で彼を見送るのも当然なのだろう。

しかし、一方で男性からは憎々しげな視線が多く向けられ、その視線の強さから同性にはやはり好かれないタイプなんだろうなと想像がついた。

まあ、彼の後ろに私がいることに気が付くと、皆一斉にオルロック・ファシズに対する嫌悪だったり、侮蔑を隠しもしないので、彼に対する城の人たちの反応は大体しか分からない。

「王妃様は結構度胸が据わっていらっしゃるんですね。」

離宮への入り口は後宮と同じく、一つしかないらしい。

そこに辿り着くと、ランスロットは入口の前で立ち止まり急にそんなことを言い出した。

人通りが多かった後宮からこまでくる廊下とは違い、離宮へ続く入口である大きな扉の前は警備の兵が二人立っているだけ。

それも職務に忠実なのか、ランスロットに敬礼をした後は微動だにする様子もない。

「どういう意味ですか？」

「いいえ？ここまで来る間、どう見ても好意的とは言えない視線を送られたり、陰口を叩かれているのに気が付いていない訳じゃないでしょう？そこまで鈍感だったら、逆に尊敬しちゃいます。」

だんだん私に対する敬語は崩れ、攻撃性が増してくる。  
だけど、やっぱり『しちゃいます』はないだろうと閉口した。

「だから、てっきり俺に助けを求めるか、彼らを黙らせるように命令するかと思ったのに、貴方は彼らの前をオドオドもせず堂々と歩いた。中々立派でしたよ。」

言っただけぱちぱちと手を叩きさえする男に、勿論怒りを感じた。だけど、

（それだけ私がここではなめられているってことよね）

そう思うと怒気が削がれ、逆に呆れる気持ちが強くなる。

侮られたり、卑下されることには慣れていたし、そう思っている人たちの鼻を明かすのは痛快で嫌いじゃない。

でも、私が鼻を明かしたいのはこの男ではないんだ。

「ランスロット様、アイルフィーダ様に失礼じゃないですか。」

ルッティが私に代わって怒ってくれるのも嬉しいけれど、今はそれではランスロットの挑発に乗る訳にはいかない。

「いいのよルッティ。この方が言っているのは間違っていないわ。……それで、助けを求めたら助けてくださいました？」

私の言葉にランスロットの顔が爽やかなまま、凶悪な色を纏うのを私は確認した。

この男は私がこういうのを待っていた。そして、次の言葉を言いたくて仕方がなかったんだ。

「名誉ある巫女直属騎士である私が、『たかが』王妃を守る義理はないでしょう？」

巫女の周辺にいる人にとって、王妃<sup>わたし</sup>という存在は邪魔で仕方がないのだろう。

それもオルロック・ファシズの王妃だ。

だからこそ、巫女の権威を振りかざし、私を貶めたくて仕方がない。そうしないと我慢ならない……そういうことなんだろう。

（なんて性格が悪い男）

だけど、この男がどう思っているのが、何を言おうが関係ない。

（要はこの男の言葉が、巫女の言葉かどうかっていう事）

ランスロットが個人的に私を嫌っているのならば、大した問題でもない。

ここに来るまでに私を睨みつけたり陰口を言った人たちと、それは同じ。

だけど、巫女までもが同じとなれば話は別だ。

「それもそうですね。それより、巫女はお忙しいのでしょうか？ お待

たせしては申し訳ありませんわ。」

何しろ彼女は私の夫の、たった一人の想い人。

私にとっては恋のライバル…まあ、最初っから負けは確定なのだけれど。

だけど、彼女にだけは自分の弱みを見せるわけにはいかないのだ。

彼にとっては最大限の攻撃にも動揺する様子のない私に、たじろぐランスロットを尻目にさっさと歩き、扉の前で開門を要請する。

「王妃アイルフィード。巫女のお召しにより参上しました。お取次ぎをお願いいたします。」

視線は下げない。背筋は曲げない。

ファイリーンとの講義で、威厳を保つために重要なことは姿勢と心持だと彼女は断言していた。

そんな精神論なの？と苦笑したものだけど、こうして実際に威厳というものが必要な場面に直面してそれが正しいことがよく分かった。

（巫女と対面する少しの時間だけ…頑張れ私）

小さく心の中でそうつぶやいて、重い音を立てて開く扉を私はくぐった。



私の身長の三倍はある大きな扉が開いた瞬間、光が溢れた。

眩しいと細めた瞳で扉の向こうの景色を認識して、ここが自分が今までいた城の中と同じ場所とは思えなかった。

広がるのは植物の緑と、空の青の美しいコントラスト。私が今立っているのは、さながら空中庭園。

城の高い位置に建てられている離宮は、その大半が美しい庭園で、遮るものがない空はただ只管に青く果てしない。

沢山の側室たちの部屋を一堂に集めるべく存在する後宮は、広い敷地でも部屋の数が多く、ぎゅっと詰めこまれたような閉塞感を覚えるが、さすが巫女一人のために用意された離宮は大した広さはなくとも後宮にはない解放感があった。

庭園を道なりに歩けば、見たことも無い色取り取りの花々、鳥や蝶、せせらぎを奏でる小川まである。

それを横目にたどり着いた先には、こじんまりとしているが贅を尽くされたと分かる美しい離宮が鎮座している。

多分、何とか様式みたいな伝統ある造り方で建てられているのだろうが、生憎そういったことに疎い私には綺麗な建物だなぁぐらいの感想しか抱けない。

「王妃アイルフィーダ様をお連れいたしました。」

離宮の前でランスロットが高々にそう告げると、離宮の扉が開き、そこから続く廊下に十数人ほどの侍女がずらりと並んで頭を垂れ、私たちを出迎える。

頭を下げる角度は直角で、彼女らの表情は私からは全く窺い知る

ことはできないが、なるほどここまで来る間に会った城仕えの人たちよりは『教育が行き届いている』訳だ。

（本心はどうだか分からないけど？）

そんな意地の悪いことを心の内で考えながら、嫁いできて私も疑り深くなったものだと思いで自分が悲しくなる。

故郷を離れ、誰一人味方がいないとわかっていて嫁いだつもりだったけれど、想像と現実はやはり違うものだと思感させられたこの数か月。

誰も頼ることができない孤独感、明らかに異分子と認識せざるを得ない環境、隠されることのない嫌悪と侮蔑。

それに対する自分の感情の動きが、嫁いだ当初とは明らかに違っていると気が付いた。

少し前は自分が変われば周囲も変わるのではないかと色々試してみたりもしたけれど、やはり＜神＞という存在を隔てた私と彼らの溝は、私の努力程度では埋まるものではないのだと実感させられた。結果として私は少し変わった。

人を始めから疑っていれば、何か言われても傷は浅い。

自分のことを他人事のように考えておけば、自分の傷と向き合わずに済む。

多分、無意識下で私はそういう風に感じて、それを実行している。人間というのは気が付かぬうちに、こんな風に自分の心を守るように防衛手段をとっているのだと、自分のことながら感心してしまう。

（まあ、そういう自覚があるうちは、まだ大丈夫よね。さて…今日のメインイベントよ）

前を先導していたランスロットが膝をつき、斜め後ろを歩いていたルッティが大きく頭を下げる。

私もファイリーンに教えられた最大級の礼をとって、頭を僅かに下げ、スカートの裾を持ち、腰を少し折って、彼女から話しかけられるのを待つ。だけど、膝はつかない。

「頭を上げて、アイルフィーダ。」

高くもなければ低くもない、聞き心地のいい声が私の名を呼ぶ。

「急に呼んだりして、ごめんなさい。でも、どうしても貴方に話しておきたいことがあって。」

巫女様と崇め奉られていようと、昔から飾り気のない気さくな彼女の気性は変わらないらしい。

自分が悪いと思ったことはきちんと謝る様子に、ランスロットのような嘘は感じられない。

だけど、だからこそ彼女という存在は厄介なのだ。そう思いながら、私は頭を上げ彼女の顔を見て笑って、考えてきた挨拶の言葉を述べる。

「こちらこそ、ずっとご挨拶もしないまま本日に至りまして申し訳ありませんでした。リリナカナイ様。」

——巫女リリナカナイ・デュヒエ

彼女という人物を的確に表すと、清く正しく美しい完全無欠の聖女様。

言っていて非常に嘘っぽい言葉に聞こえるかもしれないけれど、

彼女は実際に容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群と、本当に非の打ち所がない。

更に言えばこれだけ色々な天賦の才的なものがあれば、それを鼻にかけて性格の一つや二つ悪くなりそうだけれど、彼女に至ってはそれもない。

「様付で呼んだりしないで！昔みたいにリリナって呼んで？」

大人の女性のように強く正義感に溢れ、明るく優しく、それでいて子供のように無邪気で天真爛漫。

せめて、物語の恋のライバルのように鼻持ちならない高飛車なお嬢様（例えばファイリーン）みたいだったら、彼女を憎むことは簡単だった。

「ですが……」

「確かに私と貴方は、ファイリーの巫女と王妃っていう関係になってしまったけど、それは政略上仕方のないことだもの。むしろ、貴方を巻き込んで私もファイリーもとても心を痛めているのよ？だから、ね？私とファイリーだけは貴方の味方だから、そんな他人行儀にならないで！！」

せめて、彼女が私を傷つけようとしているのなら、反撃することは簡単だ。

だけど、彼女は昔に少しだけ付き合いがあっただけの私を守ろうと、助けようとしてくれるから、私は何もできない。

（だって、これで私が嫌味の一つでも返そうものなら、私が悪役じゃない？）

いや、実際にはそうなんだろうと思う。

これが巷に溢れる夢物語なら、主人公は何もできない根暗王妃じゃなくて、綺麗で優しい巫女様だ。

背後で巫女に使える人たちもそう思っているに違いない。

振り返らなくてもビシバシと感じる、警戒するように私たちのやり取りを見つめる視線がそれを物語っている。

それに気づかず私を氣遣うリリナカナイにヤキモキしつつ、彼らはそんな彼女に心酔し、私を悪役に仕立てたくてたまらない。

だけど、それも無理のないことなのだと諦める。

悪役になるのは簡単だったけど、私だってこんな風は無条件で私を心配してくれる彼女を昔から苦手とは思っていても、心底嫌いはなれない。

だから、苦しくても笑う。

「うん。リリナ、分かったわ。」

「良かった！私も昔みたいにアイルって呼んでいいよね！」

そう言って輝かんばかりの笑顔を見せる彼女に、NOといえる人間がいたら是非お目にかかりたい。

リリナカナイのことを心底嫌いになれないと思う。だけど、やっぱり嫌い。

でも、それは彼女自身が嫌いというわけじゃない。

私にはない全てを持っている彼女、フリーに本当に愛されている彼女、そんな彼女を妬ましいと思う卑屈な自分が嫌い。

だって、それは戦わずして負けていることと同じ。

何だかんだで結構負けず嫌いな私は、彼女から逃げたくないと、こうして性懲りもなく彼女に立ち向かったりするのだけれど、やっぱり一度だって彼女に勝てた試しはない。



時間がないという割には、リリナカナイは優雅に私を午後のお茶に誘った。

離宮の一室、多分こうして来客などがあるときに使う場所は、明るい日差しが差し込んで、とても気持ちいい。

そこで私は同じテーブルで、お茶とお菓子をリリナカナイと囲んでいる。

私の背後にはルッティが、彼女の後ろには年配の侍女と反対にとっても若い侍女の二人が並んでいる。

侍女二人、特に年配の侍女はにこやかに給仕してくれたが、その目がリリナカナイを傷つけたら許さないと如実に語っていて、少々笑えた。

昔から彼女は老若男女問わず好かれていた。

「それにしてもこの前見た時にも思ったんだけど、随分髪が伸びたのね。昔、最後に会った時と全然印象が違ってびっくりしたわ。」

話があると言ったきり何も切り出してこないリリナカナイに、私はとりあえず無難な世間話を持ち掛けた。

今は長い髪だけど、昔の彼女はショートカットだったはずだ。

私と彼女は昔に何度か面識はあっても、深い関わりがあったわけじゃないので、共通の話題が大してないけれど、この話題にリリナカナイも笑った。

「うん。この髪と目は巫女の証みたいなのだから、周りが五月蠅いの。」

そう言って、彼女は陽の光にキラキラと光る銀の糸のように艶のある髪を摘まんだ。長さは彼女の腰ほどはある。ちなみに瞳の色は薔薇のような赤。

一般的には髪も目も黒や茶が大多数な世界分布率から言って、この組み合わせは非常に珍しい。

そして、それは巫女に選ばれるための必須条件でもある。

「だけど、本当は私の髪、すごい癖があるから伸ばすと面倒なの。寝癖もすごいし。侍女の皆がものすごい気合い入れて手入れしてくれているから何とか見れるけど、私一人だったら大爆発してる。」

「そうなの？」

私も髪は比較的長いほうだけど、そんな悩みは持ったことはない。（嫁ぐ前は基本的にいつも一つに結んでいただけだった）

「私、結構面倒くさがりなの。基本的にお洒落とかにもあまり興味ないし。髪を伸ばし始めて結構経つけど、やっぱり昔みたいなのシヨ

ートカットが一番楽だったと今でも思う。」

「まあ！何を仰いますか！リリナカナイ様がお持ちのような美しい髪を伸ばさないだなんて、もったいないですわ！」

「えゝ？でも、やっぱり色々面倒だもん。」

年配の侍女が窘めるように言った言葉に、頬を膨らませるリリナカナイ。

私より四つ年下だった彼女も立派に成人したはずだけど、美形というのは大人になってもこんな表情が様になるから恐ろしい。

そこから話はしばらくリリナカナイの意外な一面とでも言おうか、愛らしく可憐な容貌とは裏腹によく言えば活動的、悪く言えばじゃじゃ馬だという事実に終始した。

「でも、フィリーが髪が長いほうが好きだっていうから：長くてもいいかな？って：ふふ、なんか恥ずかしい！」

「ええ、よく似合っているもの。」

なのに惚気に行き着いた話の結末を苦々しく思いながら、顔を赤らめてはにかむリリナカナイに笑顔でいれる自分に拍手を送りたい。それにしても、フィリーが髪が長いほうが好みだとは意外だ。

昔はショートカットの女の子の項が大好きだとか、私にさんざん持論を展開していたというのに、好みが大人になって変わったのだろうか？

「どうかした？」

ふと、そんなどうでもいいことに気を取られて黙り込んだ私を、リリナカナイがテーブルを乗り出して覗き込む。

間近まで迫った珍しい赤い瞳にぎよっとする。

実はいろいろと思い出すことがあって、私はこの赤い瞳が好きじ



やない。

「なんでもないわ。それより、今日は時間がないって聞いたわよ？  
話があるって言っていたけど、何だった？」

「あっ！うん：あのね？」

本題に話を進めた途端に妙に歯切れの悪くなるリリナカナイ。  
その表情に僅かに暗い影が落ちることが気になった。

「何か言いづらいことなの？」

とはいえ、彼女と私の共通点はフィリーしかない。多分、その関係の話だとは思うのだけど、私には全く彼女が何を話したいか見当がつかない。

かくして、僅かに逡巡した後、彼女はドンと机に手について私に言い放った。

「ごめんなさい！！！」

「……へ？」

いきなり謝られて訳が分からない。

背後の侍女たちも、何が始まったのかと驚いた表情を浮かべている。

「明後日のフィリーの誕生祭なんだけど：その夜には舞踏会があるの。そこでは本当は王と王妃、フィリーとアイルが躍るはずだったのに、頭の固いお爺さん達が——」

「私じゃなくてリリナに躍るようにお願いしたんでしょ？」

何か酷く申し訳なさそうに謝る彼女に、それ以上言わせたくなく

て私が彼女の言葉を変わった。

それをどうして知っているの？と言わんばかりに目を大きく開けて、リリナカナイが私を凝視した。

「知っている。陛下からこの前言われていたから。」

それを聞いて大きな目を更に見開いた後、彼女は大きく息を吐く。しゃべり方や仕草など色々と幼い印象を受けるリリナカナイだけれど、こうして大人びた表情を見ると彼女もこの数年の間に大人になったのだと実感させられた。

「そう。私から話すっていったんだけど、フィリーは自分が悪者になつてくれたんだね。」

「リリナ？」

「私とフィリーは、本当はアイルに舞踏会に出てもらうつもりだった。ううん、明後日の誕生祭はアイルを王妃としてきちんと周知させる絶好の機会だもん。私たち二人で貴方をオルロック・ファシズの世界王妃としてきちんと認めさせる予定だった。」

言いながら頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜ、綺麗にセットされた髪をぼさぼさにする。

「なのに！頭の固いお爺さん達が！！私達の予定を悉く潰したの：ごめんなさい。私もフィリーもこっちに来てもう七年も経つのにまだあの人たちに対抗できないでいるの。」

「いやっ、そんな謝ってもらうことじゃ…？」

しゅんと萎れた花のように項垂れるリリナカナイに私が慌ている。背後の侍女たちの視線は怖いし、何より彼女の告げた事実に混乱する。

「えっと、要するに本当は私が舞踏会にも出る予定だったけど、それを重臣の方々が反対したってことでいいのかしら？」

「重臣じゃなくて、あんなの頑固爺どもでいいのよ！！」

子供のように反論された言葉はとりあえず無視して、そこではてと思い至る。

「だけど、陛下はそんなこと一言も仰らなかったけど。去年まで貴方が出ていたから、今年もそれで行くみたいな言い方だったわ。」

「フィリーの悪い癖ね。自分が悪者になっても、貴方に余計な心配をかけないようにしたんだと思う。アイツってば昔からそうなのよ、自分よりもいつも他人ばかりを心配する。」

そう言って仕方がないというように苦笑する彼女の表情は慈愛に溢れ、二人の二人にしか分からない絆を見せつけられる。

少なくとも私は彼のことをこんな風には言えない。

「でも、私はね、アイルに全部話したほうがいいって言ったの。重臣がアイルを王妃として認めたくないと思っていたり、色々な人が貴方を傷つけようとしているって知っていたほうが良いと思ったから。どんなに私たちが庇っても庇いきれない部分はある。それだったら、アイルにも全部了解の上で一緒に頑張りたいと思ったから。」

それはそうだろうなと思う。

後宮に閉じ込められていようとも、やっぱり周囲の私に対する偏見や風当たりは感じざるを得ない。

「だから、私から話すって言ったのよ。フィリーが言ったのではア

イルだって頷かないわけにはいかないでしょ？私から事情を聞いた  
らアイルは嫌な気持ちになるかもしれない。だけど、アイルが嫌だ  
と感じたら、私相手だったら怒ったり断ったりしやすいでしょう？」

リリナカナイは私が反発するかもしれないと分かった上で、この  
話を自分から言おうと決めていたらしい。

潔癖で優しい彼女らしいと思ったけれど、私は自分の気持ちが塞  
ぎ込んでいくのを感じた。

（フィリーから言われようが、リリナカナイから言われようが、私  
に否だといえると思っているの？：思っているのよね、彼女は『何  
も知らない』んだから）

心の中でそう呟いて、私は膝の上に置いた拳を握りしめた。

「でも、怒られたって、断られたって：私は最終的に私とアイル、  
二人でフィリーを支えていきたいって思っている。」

「え？」

思わぬ言葉に私は声を漏らす。

「オルロック・ファシズを離れる時、話したよね？フィリーと私は、  
二つの陣営をいつか手を取り合っていける存在にしたい。その一つ  
の手段として、レディール・ファシズを中から変えるために私たちは  
世界王と巫女になった。」

二人は歩み寄ることない両陣営を、強いては世界を一つにするた  
めに自ら苦行を選んだ。

その決断を知っている私は、彼女の言葉に頷く。

「でもね、それは私たちが思っている以上に大変で、もうあれから七年も経ったのに私たちは重臣の意見一つ変えられない。自分の無力を実感するばかりの数年だった。今のアイルみたいに風当たりも強かったしね。でも、やっとここまで来た。」

まっすぐに赤い瞳に射抜かれて、私はどきりとした。

彼女の穢れのない瞳は何もかもを見透かしてしまいそうで、見つめ返すのが怖いくらいだった。

「私やフィリーはオルロック・ファシズの人間じゃない事になっているから、私達を通してオルロック・ファシズを理解してもらうには限界がある。それを公表するのは現状では難しいしね。でも、とりあえずオルロック・ファシズの人間だと思って人間だと思ってもらうところから始めなくちゃいけない以上、実物を用意する必要があるの。」

「それがオルロック・ファシズの王妃ということか。だけど、私人が来たところで何が変わるっていうの？」

「分かってる。だからこそ、私もフィリーもアイルを大々的に発表して、これから色々な公式行事にも参加してもらうつもりだったの……なのに」

まあ、世の中そう上手くはいかないものだろう。

フィリーからは全く聞いていなかった、彼らの事情というものを目の当たりにして私もなるほどと納得する部分が大きい。

オルロック・ファシズから押し付けられた私に対して、妙に厚遇されている（警備が厳重だったり、侍女の質が良かったり）と思っ  
てはいたけど、それにはそれなりの彼らの思惑があったというわけだ。

「でも、今後はアイルにも表舞台に立つてもらいたい。……辛い

かもしれないけど、二人で守るから！お願いよ、私とフィリーに協力して？一緒にレディール・ファシズを変えていきましょう？」

そう言って私の手を握りしめると彼女は懇願する。

普通の人間なら、その言葉に、心根に、信念に感銘を受けて、心から頷く場面なのかもしれない。

（どうして、私にそんなこと言えるの？）

心がそう叫びをあげて、強く苛立ちを感じた。

分かっている。彼女は『何も知らない』。

知っていたら、私にそんな事をいえる娘じゃないことは分かっている。だけど、それが何だというの？

知っているからこそフィリーは私に何も告げなかったというのに、彼女はそれを察しないの？

「わ・私は…私は」

声が震えた。

怒りとも悲しみとも分からぬ、だけど大きな感情の揺れが私の中で震えていた。

「アイル？」

それを不思議に思ったんだろう、私が賛成することを微塵も疑っていないリリナカナイが小首を傾げて私を覗き込む。

「私はっ！ー！！」

「私は――」

この時、本当は何を言いたかったのだろうか？  
理不尽な周りへの鬱憤？

リリナカナイへの感情？

何もかも自由にならない事への嘆き？

愛されない自分への絶望？

「何をやっている？」

自分で自分の感情を制御できない混乱する頭に、静かな声が響く。  
確かに喉元まで出かかった強い感情は、その声の正体に驚いて再び飲み込まれた。

「へ――」

「フィリー！！どうしたの！？」

扉の所に佇むその姿を見て、弾かれたようにリリナカナイが席を立ち駆け寄る。

その顔は満面の笑みに彩られ、声は喜色に満ちていた。

突然の王の登場に侍女たちも俄かに色めき立ち、私以外の全てが彼を中心に回ります。

「リリナ：いや、もうすぐ会議があるだろう？迎えに来たんだ。」

駆け寄った勢いのまま抱きつく彼女を優しく見下ろしながら、そう告げるフィリーの表情は、過去に彼女を見つめていた彼と寸分変

わりなく、優しく愛に溢れている。

『愛している』なんて言葉にしなくても、伝わってくる二人の絆に私は自分の中で一瞬だけ爆発しそうになっていた感情が、冷え切っていくのを感じた。

（私：何を言おうとしていたんだろう？何を言ったところで何一つ変わる訳でもないのに）

二人が想いあっていることは八年前から知っていた。

だからこそ、全てを諦めていたはずなのに、それでも私の中にフィリーを思う気持ちがある限り、二人が一緒にいるところをみて平気でいられるはずもない。

「それより、どうして彼女がここにいるんだ？」

言葉とともにフィリーが私を見る。

その言葉と視線に宿る強さが、暗に私がここにいることを責めている。

「それ——」

「私が呼んだの。」

フィリーへの問いに答えようとした私の声を、リリナカナイの声が掻き消す。

「フィリーはアイルに何も言うなっていうけど、やっぱり協力をお願いする以上、彼女を除け者にはできないよ。大丈夫、彼女は私の言っていることを理解してくれた。」

私はここにいるのに、まるで私がいなかったかのように二人の間で話



が展開する。

大体、私はまだ彼女の要請に承諾の意を示した覚えはない。だけど、長い彼女の話の中で、否定の言葉一つ言わなかった私は、リリナカナイの中では既に協力者らしい。

（ううん。そもそも貴方は私が断るなんて微塵も考えていなかったんだろう。）

私に『断られても、怒られても』いいから自分の言葉で協力を求めたかったと、彼女は言った。

だけど、今の様子を見て分かった。

そうはいっても、彼女は実際に私の拒否する様子など何一つ想像してない。いや、想像できないといったほうが正しいのかもしれない。

彼女のような特殊で選ばれた人間というのは、きっと他人に強く拒絶されたことなんかない。

だって、彼女はいつだって全てが正しから、誰一人彼女を拒絶することがない。

（それに拒絶したところで悪者になるのは私……ただでさえ居心地の悪い場所を更に自分から悪くしようなんて馬鹿としか言いようがないわね）

そう思って、『そうだよね？』と言って笑うリリナカナイに薄く笑った。

自分の意見すら言えず、答えようと声を発しても全て遮られる。何だか自分という存在が酷く不必要な気がして、声を出すことすら億劫で、数歩歩けばすぐそこにいる二人が私には果てしなく遠く感じられた。

「何処まで話したんだ？」

「まだ、全然。明後日の誕生祭の事くらいかな？ねえ、会議までまだ一時間くらいあるわよね？これから三人で今後の事話し合いますようよ！！アイルをどうやって国民に好意的な王妃として見られるようにするかとか考えなくちゃ！！」

妙案だと言わんばかりに声を上げる彼女には、顔を歪めるフィリ―が見えていないんだろう。

「リリナカナイ。君がどう言おうと、やっぱり俺は彼女をこれ以上巻き込むことは反対だ。」

「え？だけど、私達話し合って決めたじゃない。オルロック・ファシズの王妃を大体的に打ち出して、国民の感情を変えていこうって…そのために恥を忍んで捨てた故郷に頭を下げたんじゃない！！折角、情勢が味方してそれが可能になったのに。」

二人の声をこれ以上聞いていたくない。

二人の姿なんて視界にも入れたくない。

冷えていく心と連動するように、指先が冷たくなって、震えていることに気が付く。

それでも顔だけ笑っている自分が滑稽すぎて泣きたくなった。

「だが、まだその準備は整っていない。事を急ぎすぎて、彼女に危険があったらどうする？」

「それを守るのが私たちの役目じゃない！！」

「勿論そうだ。だけど、俺たちもずっと彼女の近くにいるわけじゃない。彼女はお前や俺とは違って普通の女性なんだ。彼女を守るにはもっともっと強い盾が必要となる。それを作るには時間がかかる。」

まるで大人が子供に言い聞かせるように優しい声で、貴方は私を自分とは違うと切り離した。

リリナカナイは同じで、私は違う。

（貴方と夫婦になった私より、やっぱり彼女が貴方にとって一番近しい人なのね）

「でも、巻き込みたくないっていても、アイルはもう貴方の王妃なのよ?! そうである以上、表に立たなくたって全く巻き込まないことなんてあり得ない!」

「だが、必要以上に表に立たせる意味もない。現状はお前と俺がいれば、今まで通り何でも上手くいくさ。そうだろう?」

リリナカナイの華奢な肩を抱いて、まるで愛を囁くように言葉を紡ぐフィリーを私は呆然と見た。

（ああ、貴方が愛を囁くときはそんな顔、そんな声なの）

毎晩、私に告げる固い声じゃない。顔はいつも抱きしめられて見れないけれど、きつと顔だってそんなにとろける様な表情じゃないんだろう。

一緒にずっと戦ってきたパートナーと、自分に関わることも関わらせることも嫌な昔の知人程度の女じゃ、比べるまでもない。

（妻の前で他の女といちゃつく夫に、追いつがって『行かないで』という資格すら私は持っていないのね）

「フィリー…」

彼の言葉にリリナカナイが顔を赤くする。

そんな風にまるで周囲を忘れたかのように、熱い視線で見つめあう二人をどうにかして欲しいのは、どうやら私だけじゃないらしい。

「ウオッホン」

未だに立ったまま扉の入り口でやり取りを続けていたため見えなかったが、フィリーは誰かを連れていたようだ。

扉の影になって見えない場所から、野太い咳ばらいが聞こえて、リリナカナイは赤い顔を更に真っ赤にして、フィリーから離れる。私も金縛りにかかったように固まっていた体が、急に自由になったような気がした。

「レグナ！ビククリさせないでよ！！」

「何言ってるんだ、この巫女さんは？俺はずーっとここにいたんだぜ？あんたがフィリーしか見えてなかっただけだろうが。」

リリナカナイがフィリーから離れると、のっそりと重そうな体を気怠そうに一人の男が部屋に入ってくる。

（大きい…）

小綺麗な部屋に非常にミスマッチとしか言えない、大きく強面の男。

決して長身とは言えないが、平均的な男性の身長はあるフィリーより頭一つ分大きく、服の上からでも分かる筋肉質な体はまるで熊。小柄なリリナカナイが喚いても、まるで気にした様子もない。

「大体、あんたは何しに来たのよ！？フィリーみたいに私を迎えに来てくれたわけ？！」

「ほんとにキャンキャンと子犬みてーに五月蠅いなあ。お前みたい

な色気のない小娘に俺様、用はないの。」

「なんですって!？」

どうやら彼らは犬猿の仲らしい、ああいえばこういうといった感じでポンポンと言葉が行きかう。

リリナカナイの子供っぽい物言いも何だが、大男の方も彼女を挑発する気満々で言葉を選んでいるのは一目瞭然で、仲が良いのか悪いのか定かではないが、私はそれをオロオロと見ているしかない。

(…はあ、もう私に用がないのなら帰ってもいいかしら?)

この後、何やら会議もあるようだし。私をどうやって利用するかどうかは、もう勝手に話し合ってくれればいい。

ここに座っているのも自分の気持ち的に限界に近づいてきている。これ以上、ここにいて更に傷つけられるような言葉も聞きたくない。

リリナカナイに断ってこの場を辞しようと、心の中で決意すると、とりあえずルツティにそれを伝えようと後ろを振り向こうとした。

「俺が用があるのは、お前みたいなチンシャクじゃなくて、もっと大人なレディだ!」

だけれど、その声と共に腕をぐいっとなつかまれて、私は椅子から無理やり立たされた。

無様に転びはしなかったが、無理な態勢で引っ張られたため大きくよろけた私を力強い腕ががっちり掴む。

「レグナ!」

「わーってる。わーってる。」

何が起こったか目を白黒させる私を、決して美形とは言い難い顔が覗き込む。

強面の顔の割に、小さくとも円らな瞳が興味深そうに私を見ている。

「大丈夫か？」

「はっはい。」

肩を支えられ、高い位置から覗き込まれた顔は近く、私は思わずのけ反りながら答える。

「ふざけるのはやめろ、レグナ。」

はっとして周囲を見ると、驚く一同の中でフィリーだけが怒ったような顔をしてこちらを見ている。

「別にいい？俺はふざけてなんていないぜ？俺は後宮から消えた王妃様を探して連れ戻すために来たんだし？」

「え！？」

彼はフィリーに向かってそう言ったけど、その言葉の内容に私が素っ頓狂な声を上げた。

「うん？」

「あの、一応、後宮を出る旨は後宮の護衛をしてくれている人に報告してもらっているはずなんですけど？」

なのに『消えた王妃を連れ戻す』なんて言われるのは心外で、そうお伺いを立てると私を間近で見下ろしていた顔の目と口が意地悪い感じで弧を描いた。

「おう、報告はもらったぜ？だが、その報告の後色々あって……なあ？」

レグナは私に答えているはずなのに、何故だか視線はフィリーに向けた。

「???」

「まあ、とにかく今日は後宮に戻ってもらうぜ？そのためにわざわざ騎士団長の俺様が迎えに来たんだからな。いいよな、フィリーも巫女さんも？」

疑問形で投げかけているはずなのに、大男にして騎士団長らしいレグナは私の肩を抱いたまま動き出す。

その言葉にいくらか怖い顔をしたままのフィリーが黙って頷くのが、視界の端に見えた。

「え、ちょっと待ってよ!!!!」

だけど、リリナカナイはまだ言いたいことがあるらしく、レグナに背中を押されているため振り返っても姿は見えなかったけれど、彼女の声が聞こえる。

「リリナ、もうやめろ。」

そのあとにすぐフィリーの静止の声がかかる。

「だけど、まだ話が!!!!」

「そのことで俺からも話がある。いってお——」

その後も二人の会話は続いたようだけれど、部屋から連れ出され扉が閉まってしまうと、その声はもう届かなくなる。

そうして私はやっと息がつくことができた。

「アイルフィーダ様、大丈夫ですか？」

私たちの後を追ってきたルッティが、どうやら見るからに疲れているらしい私に声をかけてくる。

それに声返す元気もなくて、少しだけ笑って答える。

ルッティは更に顔を心配そうに歪めた。

だけど、この時の私は彼女を思いやって元気に見せる気力すらもなかった。

（そういえば、昔もリリナカナイと会った後はこんな風に心が疲れすぎて声も出なかった）

あの時は姉エリーを酷く心配させたと、離れてしまった姉のことが急に懐くかしくて切なく思い出された。



### 3—1

——恋だと気が付く前に砕け散った感情は、歪な形となって永遠に消えない傷になった

貴方を思う気持ちを恋なんて言わない。

それはきつと恋よりも深く、重く、醜い感情。



#### 【八年前】

——私は今恋をしている

そう自分で心の中で呟いて恥ずかしさのあまり悶絶し、手に持っていたTシャツに顔を埋めた。

「一人で何をやっている？」

てっきり一人だと思っていたのに誰かの声が聞こえて、飛び上るほど驚いた。

「エリー！いきなり吃驚するじゃない！」

振り向けば、同い年の姉エリーが間近に立っている。  
床に座り込んでいた私を見下ろす彼女は、いかにも私を馬鹿にし

たようにため息をついた。

「『吃驚するじゃない』はこっちのセリフだ。何回も部屋をノックしても気が付かない。部屋の鍵はあいている。こんなに近くに来ても気が付かない……いつものアイルだったら考えられない。」

「え、嘘？」

私が今いるのは寮の自室。

各自に一人部屋が与えられているけど、中は狭くベッドと筆筒と勉強用の机と椅子を入れたら、後は何も入らない。

その部屋で私は筆筒の中の洋服を全てひっくり返すくらいの勢いで並べて、ああでもないこうでもないと思いついた所だった。

自室ということもあり油断していたところもあるだろうけど、ノックされて更に部屋に入ってこられても人の気配に気が付かないなんて、エリーの言う通りいつもの私だったら考えられない醜態だ。でも、

「まあ、いつもの私じゃないってことか。」

「?どういう意味だ？」

エリーは眉を顰め、そんな彼女を見てにんまり笑う私に、眉間の皺を更に深めた。

「私ね、恋をしていると思うの。」

そして、自分でも阿呆なことを言っているなと思いつつも告げた言葉に、エリーがあまり見せない間抜け顔を披露する。

「……………はあ？」

きりりとした美少年真っ青の凜々しい姉の顔が、笑ってしまうくらい呆けたものになった。

それに笑いながら、私は繰り返す。

「恋をしているって言ったのよ。だから、色々注意力も散漫なんだろう。それについてはごめん。謝るけど…それよりも何着て行ったらいいと思う？」

謝意のない謝り方をして、それでも全く話についていけないエリーに広げていた洋服の一つをあせながら見せる。

明日は『ローズハウス』への奉仕活動の日。

奉仕活動を始めて春が過ぎ、今は夏も終わる頃。

マリア教師からは奉仕活動は終わっていいと言われていたが、授業があるときは毎休みに、夏休みに入ってから怪しまれない程度に頻繁に通っている。

それは理由として『ローズハウス』で色々勉強になると思うことも多く（実際、最近では将来老人や子供の世話ができる仕事に興味がある）、それも大きな一因ではあるのだけれど、そこに大きな不純な動機もある。

『ローズハウス』で私は恋をした。

それも青春真っ只中って感じの、自分でも妙に照れるほどの淡い片思い。

「こ・『こい』って、まさか恋愛の『恋』か!？」

「そうだけど？」

やっと、私の言葉の意味を正確に理解したらしいけど、まだ受け入れられないのか問いかけてくるエリーに顔はむけず、私は答えた。

「冗談だろう!？」

「冗談でこんなこという訳ないでしょ？」

その言いぐさには少しむっとした。

怒った顔をしてエリーを見ると、彼女も自分の失言に気が付いたらしく顔を顰める。だけど、言い訳を続けた。

「だって、アイルは昔言ってたじゃないか！！周りにどんないい男がいようと、自分は恋愛感情を持てないって。」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたね。」  
「だろう？」

よくそんな事を覚えているなと思いつつ、確かに言ったことなので頷いて見せる。

「だけど、それは『あの中』でっていう話だったでしょ？実際、未だにあの人たちの中で誰かと恋をするなんて考えただけで鳥肌ものだよ。」

思い浮かぶいくつかの顔と自分が熱く見つめあっているのを想像しただけで、ぶるりと悪寒が走る。

「…彼らじゃないのか？」

「うん。むしろ何でそこにエリーの考えが辿り着いたか聞きたいよ。」

「それは夏休みを利用して、アイルは彼らに会いに行っただけだったし。」

言われてそういえば、夏休み実家に帰る人ごみに紛れて『彼ら』がいる場所に戻った。だけど、それは

「あの人たちに会いに行っただっていうよりは、ストレス解消に行ってきたって感じだし。」

「だけど！アイルはいつだってここよりも彼らと一緒にの方が生き生きしているじゃないか。私は怖いんだ。アイルがいつか向こうに帰ってしまうんじゃないかって。」

なるほど、だから私の恋をした相手が『向こう』の誰だと思って過剰反応した訳か。

いつもは妙にすっかりしていて同い年とは思えないほど大人びているエリーが、しゃがみこんで項垂れている姿は何だか可愛らしい。しかも、私の事をこんなに思ってくれている彼女の姿に、嬉しさが溢れてきて私は腕を伸ばして頭を撫でた。

「アイル？」

「私はずっとここにいます。そう決めたし、その事を後悔してもいい。」

「うん。」

いつもだったら、こんな子供にするようなことをすれば逆上するに違いないのに、妙におとなしく『うん』と返事をするエリーに私は笑った。

「それに恋をした相手はこのメルト・ファウストの人なんだし、そんな心配はご無用よ！」

そして、彼女を安心させるためにと明るくそういうと、エリーがずいっと顔を私に近づけた。

「そうだ。彼らではないなら、恋の相手は誰なんだ？女子高で、最近遊びにも行かないアイルにそんな出会いがあるわけないだろう

「？」

可愛らしい子供返りしたエリーは霧散して、妙に据わった目が眼前に迫る。

目を逸らすことすら許されない気配に、話は誤魔化せそうにもない。

ただ別に隠すことでもないかと考えていると、エリーとはまた別の趣がある美少女が私の頭の中で怖い顔をした。

『言っておくが、俺が男だと誰か一人にでもばらせば、それ相応の報復を覚悟してもらう。』

どうみても自分より愛らしく、儂げな美少女が眼光鋭くドスを聞かせてそう言い放った姿は滑稽で、だけどそれが自分の好きな相手かと思うと複雑のような笑えるような。

（まあ、別にニアの事を好きだということ、彼が女装した男だっというのは全く別の事だもの。言ってもいいよね。）

心の中でそう言い訳して、私は『ローズハウス』で出会った同年頃の『少年』に恋したことをエリーに告げた。（実際、女装した姿しか見たことはないけど、ニアは身も心も男らしいから間違っ  
てはいない）

だが、彼女の追及はそこに留まらなかった。

「そいつのどんな所が好きになったんだ？」

「うーん、まずは『外見』かなあ？」

「顔だけの男のどこがいい!？」

まあ、『外見』といった私の言葉を聞いたら、そういう反応があ

ってもいいだろう。

エリーが思っている『外見』と私の思う『外見』には大きく隔た  
りがあるし、私も別に美少女が好きなのわけでは断じてない。

それに本当の所は『外見』が良いということには、さして魅力は  
感じていないと思う。

だけど、初めてニアを見たときに、彼を（あの時は彼女だと思  
っていたけど）綺麗だと純粋に思った。

だからこそ、ニアの事が心に残ったし、声をかけようと思った。  
彼が醜くても好きになるような気もするけど、でも、人間って結  
局体と心があって一つの存在なのだから、それを切り離して考える  
のも変な話だ。

だから、やっぱり彼の外見も好きなんだと思う。

「まあ、でもね？私も一時は悩んだんだよ？この感情が恋かどうか  
って。」

初恋ではないけど、それまでの恋とニアへの感情は大きく違っ  
た。

「始めはね…同情かとも思ったの。」

「同情？」

「うん。彼は昔の私ととてもよく似た境遇にいて、それに同情して  
いるんだって思った。そう考えた方が楽だとは思うけど…やっぱり  
恋なんだって諦めた。」

ニアへの感情はすごい単純なような気もするけど、複雑に入り  
組んでいるような気もして、他人に説明するのは難しい。

そもそも…と考えると、私はちらりとベッド近くの時計を見て話を  
切る。

「ま、この話はもうやめよう！ぼちぼち消灯時間だよ？」

「あ、そうか。ごめん。」

「うん。別に謝ることじゃないでしょ？」

「違う。家族といえど、今の私はアイルの感情に立ち入りすぎた気がして…昔の事や向こうの事は言わない約束だった。」

こうやって例え家族であっても、悪いと思ったら素直に謝ることができるのはエリーの美德だと思う。

私もそんな彼女の潔さが心地いいと感じる。

「別に気にしていないよ。私はどこにでもいる普通の女子高生だもん。恋バナの一つや二つバンバンするって。また、聞いてね？」

だから、エリーが気に病まないよう笑って、左手をヒラヒラさせる。

「うん。ありがとう。おやすみ。」

「おやすみー」

彼女を見送った後、結構長く話していたのに洋服が決まっていな  
いことに気が付いて、消灯までの短い時間に私は慌ててそれを決め  
なくてはならなかった。



翌朝、ローズハウスへの道をとぼとぼと歩く私の服装は、Tシャツにズボンといういつも通りの色気のないものだった。

「はあ」

消灯時間まで自分なりに悩んでみたものの、どうにもしっくりこない上に、見るからに気合いが入った服装は奉仕活動をしに行くのに適しているのか？という今更な問題に直面した。

結果、考えるのが面倒になって洋服を散らかしたままベッドに入り、朝起きて、自分で片付けなかったくせに、部屋の中の惨状に泥棒でも入ったのかと驚いた。（すぐに気が付いたけど）

そもそも急に私が洋服と格闘する羽目になったかと言えば、ローズハウスでの何気ない日常が原因だった。



「アイルねーちゃんも、ニーアさんみたいにもっと可愛い恰好すればいいのに。」

それは本当に悪意のない言葉だったと信じたい…いや、悪意がないということはその言葉が真実ということになるからダメなのか？

……ともかく、その言葉を発した少年レイモンが私を見上げる瞳には、子供の特有の本当に不思議でなりませんという無邪気さしかなかった。

あのお風呂での衝撃の事件より数か月、どうやらローズハウスで

は私とあと数人しかニアを男だと知らないらしい中、それでも彼に纏わりついた私に折れる形で私とニアは友達となった。

友達というのは私しか思っていないかもしれないけれど、ローズハウスに私がいたらニアは大抵私の所にも必ず顔を出してくれるようになった。

それは何だか懐かない猫に一步だけ近づけたような、妙な高揚感を私に味あわせてくれた。

そして、そういった変化に伴い、今までは家族以外とは交流を持たなかったニアも私と一緒に大人や子供と接することも多くなり、その日もまた子供たち相手に遊んでいたところでのこの言葉。

「あははは」

なんていうか、乾いた笑みしか出てこない。

何しろそれは事実。

別に女になりたい訳じゃないと言うニアだけど、その女装ははつきり言って趣味の領域を超えていた。

洋服の下は女物の下着を身に着けているし（…これについては如何なものかと思うけど）、あまり露出の激しくない服装を選んでいるらしいけどズボンよりスカートのほうが多い。

更にさりげなく流行を取り入れお洒落度は高いはずなのに、決して品位を失わず、かといってローズハウスで浮くこともないという着こなしには頭が下がる。

「確かに！アイルねーちゃんもオシャレの一つもしないと、彼氏ができないよお。」

今度はおしゃまな少女ファラの言葉。

比較的子供たちには私とニアはセットで扱われているような気がするけど、その実、待遇に差があるのは明確だった。

垢抜けない普通の女子高生の私と、絶世の美少女でどこなくミステリアスな雰囲気漂う美少女ニアでは当たり前かもしれないけど、子供たちのなつき方にも大きな差がある。

私に対しては『ねーちゃん』と軽口も叩くくせに、

「オシヤレしても生憎、私には彼氏はいないけど？」

にっこりと私相手にはあまり見せない美少女の微笑みを浮かべて顔を覗き込めば、少女はたちまちのぼせ上ったように赤くなり、もじもじする。

「ごめんなさい！ニアさんの事を悪く言うつもりはなかったの…。

」  
「いいよ。ごめんごめん、からかっちゃった。」

ニアに許してもらえれば、とたんに満面の笑みになる。

そんなやり取りをしつつ、私は自分の洋服を見下ろしてため息をつく他ない。

私の服がいつもどことなくダサくて、ニアがお洒落なのはわかりきっていたことで、だけど、ニアは男で私は女。更にニアは私の片思いの相手なわけで……

（それって女としてどうなの？）



そんな風に思わず対抗意識を燃やしてしまったのが昨日の洋服騒動の始まりだったりする。

結局、いつも通りの服を着ているのだから、戦う前から負けているというか、そもそも戦いなんて始まってすらいらないんだけど…、ともかくそんな気分なのでかなり凹んだままローズハウスに着いた。ニアはまだ来ていない。

別にこの日に来ようと互いに約束している訳じゃないので、ローズハウスで会えないことも多い。

だけど、今日はそれでよかったかもと、複雑な乙女心に浸っていると、

「アイル。ちょっといいか？」

こんな風にニアが現れたりする。

何で今日に限ってと、そんな感情が思わず外に出たらしく、

「別に嫌ならいいの。」

と、美しすぎる微笑み。

機嫌が悪いというか、他人行儀になると妙に女の子らしくなるニアの氣質を理解しつつある私は慌てて首を横に振る。

「ううんっ大丈夫。えっと、キヌさんの散歩が終わったら――」

「散歩なんてしたくないわ！」

私の言葉が言い終わる前に、車椅子に大人しく収まっていたはずの80歳を大きく過ぎたキヌさんが叫んだ。

長い年月で縮んだ体は車椅子に座ると更に小さくなり、髪は真っ白、顔はしわくちゃ。

かなり認知が進んでいて、こうしてついさっきは散歩に行きたいと自分で言っていたはずなのに、数分後には自分が言ったことも忘れている。

時々、暴言を叫んで周囲を驚かせたりすることもあるけど、基本的には舌足らずなしゃべり方が妙に可愛らしいこのお婆ちゃん（大人といわないところでは怒られるけど）が、私は割と好きだった。

「え〜？ キヌさんがさつき散歩したいって言ったんじゃないですか。」

「わたしや、そんなこと言っとらんよ！」

背後から覗き込むようにして顔を見ると、皺の深い所から小さな目がちらをぱちりと見ている。

円らな瞳にきよとんとした表情がぴったりで笑ってしまう。  
老人を可愛いと思ったことなんて、ローズハウスに通うまで思ったこともなかったけど、こうして直に接してみるとお爺ちゃんとお婆ちゃんはとても可愛らしい。

姿というか、仕草とか言っていることとか、妙に微笑ましいのだ。  
それは実際に大変なお世話をしてない私だから言えることかもしれないけど、レイチェルさんたちも良く子供だけでなく老人たちにも『可愛いね』と言っている。

それを聞いて本気で怒っている人もいるけど、大抵の人は喜ぶか照れたりしている。

いくつになっても他人に可愛いと言われたり褒められたりするの  
は、やっぱりうれしいものなんだと思う。

「そうだっけ？ うーん、じゃあ、散歩やめてどうするの？」

「眠たい。眠たい。」

言いながら膝からの下を上下に動かす。

彼女なりのそれがダダの捏ね方だと知っている。

「横になりたいの？」

「うん。」

「しょうがないなあ。でも、昼間に寝ちゃうと夜寝れなくなっちゃうから、ちょっと寝てもいいか聞いてからね？」

車椅子をＵターンさせて建物に戻って、スタッフさんに事情を話すと、とりあえず寝かそうかとキヌさんは私の手から離れた。

ああなってしまうと多分、自分の願いがかなうまでしゃべり続けてしまうから、スタッフさんも苦肉の策だ。

「その代り夜はちゃんと寝てよ？」

「わかつとるわ。」

すぐさまよい返事が返ってくるけど、多分数分後には忘れているだろうと、笑いながらスタッフさんに連れて行かれるキヌさんを見送って、私はようやくニーアに向き直る。

「ごめん。それで何だった？」

ニーアは私ということで、子供や大人とも話すようになったけど、やっぱり積極的には関わろうとはしない。

それは彼が男とばれない為なのか、っていうか、何で女装しているの？って話だったりするんだけど、生憎それを尋ねたら無言で睨みつけられた。（なので、趣味という可能性もやっぱり否定できない）

ニーアは私にとって、数か月たった今でも謎が多すぎる人物のままだ。

だけど、変わったこともある。分かったこともある。

「ああ、塔と一緒に付いてきてくれないか？」

「了解。今日はどの花にする？」

言いながら庭を見渡して、夏になり明るい色で咲くいくつかの花を見つける。

「この間は白だったから、あの黄色の花はどうだろう？」

異存はなかったので、スタッフさんに断ってその花を少しだけ摘ませてもらうと、私たちは揃って小さな塔へと足を向けた。

ニアと出会って数か月、私は彼の秘密を一つ知った。

私が塔に行くことになったのは、一応ニアから誘われたという形になる。

塔にはニアの家族専属のスタッフがいるので、ローズハウスの住人はおろか、スタッフも塔に入ったことはないというのに、どうして私が？

誘われた時、そんな疑問が当然湧いた。…というか、あの話の流れでどうして私を誘う気になったのか、その理由は今も謎のままだ。



そもそも始まりは塔から出てきたニアを見つけて、偶々声をかけたことだった。

あの雨の日に心配をかけた謝罪を含め、庭で雑草取りを買って出ていた私が、腰が痛いと言より臭く背筋を伸ばしていたところ、ニアがボタンと音を立てて塔から出てくるのを見かけた。

「？」

その様子が普段は落ち着いた優雅な動作とは違って、まず違和感を抱いた。

ちなみにこの頃はまだニアが男だとは知っていたけど、彼に対して恋愛感情を抱いてはいなかったと思う。

「ニア、来てたんだね。」



こちらに小走りに駆けてきた彼にそう声をかけると、あからさまに顔をそむけられた。

両手は顔の近くで、ハンカチを固く握りしめられている。

私が来る前から塔にいたのかニアを見かけていなかったの、そう声をかけたのだが、視線を合わせないまま何が気に入らないのか妙に刺々しく言い返される。

「そうですけど、私がここにいて何か問題がありますか？」

この頃はまだ女度が上がると機嫌が悪い証拠だと知らないけど、その声に苛ついた様子を感じ取って、何かあったんだろうなと察しはついた。

放っておく方がいいのかなとも思ったけど、何処となく余裕がないように見えて、私に怒鳴るのは割といつもの事だし、怒鳴らせてガス抜きでもさせるかという感覚で私は軽く言葉を続けた。

「別に悪いわけじゃないでしょ？寧ろ私はニアに会えて嬉しいくらいだし？今日も可愛い恰好だね。うんうん、眼福眼福！」

ニアが男だと知った後も、ばらすなと脅された意趣返しも込めて、私は彼をとびきりの美少女として褒め讃えることを日課にしていた。

それをする度、男としてのプライドが邪魔をするのか、ニアが怒ったり慌てたりするのが面白かったのだ。

だから、今日もすぐに返ってくる怒号を期待したのだが、予想とは違う表情を浮かべるニアに驚く。

「……本当？」

何だか妙に頼りなさげな瞳で見返してくる表情は幼気で、その目

元は赤い。

(泣いているの?)

道理で顔を合わせようとしなはずだと思う一方で、男とは思えないほど美しく儂げな姿に私はうっかり危ない道に足を踏み外しそうになったり。ならなかったり。

ごくりと唾を飲み込んで、一つ深呼吸。

(うんうん。私、別のことを考えろ……よし! 『本当?』という聞き返しは何についてだ?)

『悪いわけないでしょ?』、これの真偽を確かめるのは会話の流れとして有りだ。

だけど、『会えて嬉しい』『可愛い』『眼福』のあたりの真偽を確かめるつもりならば、明らかにいつものニアとは違う。

いつもなら真偽を確かめるでもなく、怒鳴られるのが当たり前になっている。

これは本格的に何かあったらしいと、私は彼に一步近づいた。

「ニア?」

「…いいえ。何でもないんです。ごめんさない。」

名を呼べば、はっとしたように大きく目を開いた後、私から顔をそむけ一步後ずさる。

そこには先程までの幼気な頼りなさはない。

だけど、もっと危ない何かがあるような気がして私はぎくりと心が音をたてるのが分かった。

「待って! 何でもないなんてこと、その態度でないでしょう?」

手を取って、自分に引き寄せる。

同い年の男子の割には細く、背が高いとは言えないニア相手ならば、私でも力で対抗することは十分に可能：というか、私から腕を取り返そうとするニアの非力さに逆に妙に心配になったくらいだ。

「アイルには関係ありません！放して。」

「：何で急に女の子ぶるの？いつもは私にはそんな話し方しないじゃない。」

細い腕、白い肌、ニアは自分を女だと見せるために、方法までは教えてくれなかったけど、男としての成長を意図的に止めていると聞いた。

その成果は女の私も真っ青なほど完璧と言わざるを得ない。

だけど、それは彼の体に悪影響を及ぼさないのだろうか？

どうしてそこまでして彼は女でいなければならないのか？

なんとなくだった疑問が、急に知りたくてたまらない謎になった。

「今日からそうする！もう私にあまり話しかけないで：貴方と話しているのを誰かに聞かれて、男だとばれる訳には――」

「はあ？どうしていきなりそんな話になるの？」

「だって、女の子ぶるなって！それが嫌なら私に話しかけないでよ！」

言っていることが、はちゃめちゃだ。

ヒステリックな声に、庭で遊んでいた子供たちがこちらを窺っているのに気が付く。

「こっちに来て。」

私は腕をとったまま、建物と塔の間の影にニアを引っ張り、子供たちの目を遮る。

喧嘩していると思われても構わないけど、ニアが男だと会話の中からバレても困る。

抵抗を見せる彼だが、やっぱり非力な彼に私を止める力はない。

「何！？もういいでしょ！？」

ヒステリックになっても、女言葉が抜けない。

ニアがいつから女の子として生きているか分からないけど、女としての部分が彼にとって深く根付いているだと思う。

女になりたい訳ではないといったニア。

いらぬものを無理やり押し付けられ、甘んじてそれを受け入れるしかない彼の境遇に同情を感じた。

でも、だからと言ってこんな風にヒステリーになる彼を可哀想に思っているだけでは、何故だか私はいられないと思った。

「八つ当たりはみつともない。」

ヒステリーなニアに対して、私の声はとても静かだった。

だけど、しっかりと彼を見つけて告げた言葉に、ニアが怯えたような表情を浮かべる。

「急にそんなことを言い出す意味が分からない。ニアが何も言わなきゃ、私にはあんたがそんなに何に動揺しているのか分からない。それが私のせいだっていうなら私が悪いのかもしれない。だけど、私に関係ないのなら、私にヒステリーになるのはただの八つ当たりでしかない。」

何かがあったニアを更に追いつめる様な事を言っている自覚はある。

私の手の中のニアの腕が、小刻みに震えている。

「ニアは私を友達だと思っていないのかもしれないけど、少なくとも私は友達だって思ってる。友達に何かあったら心配だってする。それは私に限ったことじゃない。ここにいる人だったら、ニアに何かあったと思ったら多分みんな心配する。」

何かに傷ついたり、動揺したり、色々な感情を表に出すことは悪いことじゃない。

人間って誰しもが一人で生きているわけじゃないから、それで周りを心配させてしまっても構わないと私は思う。

だけど、それを拒否するんだったら、誰にもその感情を知られたくないと思うなら、それを一人で抱え込む覚悟がいると思う。

「その心配を鬱陶しいと思うのもニアの自由。それを拒否するのだって自由だと思う。だけど、それで傷つく人の事を覚えていて。少なくとも、私は今のやり取りで傷ついた。」

まあ、自分でも傷ついている人の言い分じゃないなと思う。

実際に傷ついたかと言われれば、これで顔の皮の厚い私は別にと答える。

ニアのヒステリーを聞き流してあげても良かった。それが彼にとって是最良なのかもしれない。

『お嬢さん。世の中、自分だけが悲劇のヒロインだと思っていると、後で恥ずかしい思いをすることになりますよ?』

ふと頭の中で昔、私を窘めた大人の声が響く。

あの時はその人のことを心底鬱陶しいと思った。何てお節介だとも思った。

私は多分、同じことをニアに言っている。（言い方は私の方が粗野で乱暴だけど）

自分がすごいお節介な女になって、彼に説教する資格もなく、偉そうにしたり顔で言葉を発していると自覚がじわじわとせり上がってきて、私は片手で口を押さえてた。

（私、ひょっとして）

そして、彼の境遇に、彼の様子に、私はかつての自分を重ねていたのだと気が付く。

（これは昔の私に、今の私が言いたいことなんだ。）

そこに考えが行き着くと、急に自分が恥ずかしいというか、居たたまれなくなって私も俯いて、言葉を失った。

しばらく、妙な沈黙が私たちの間に落ち、何を言おうと頭を回転させているとニアの方が先に口を開いた。

「……ごめん。」

謝った声は小さい。

「そうだな。自分が傷つけられたからって、誰かに八つ当たりしていい理由にはならない。」

感情が昂ぶっているんだろう。

新たな涙がニアの瞳に溢れてくる。

それを男らしい仕草で拭い去ると、彼はばつが悪くてどう返した

らいいか分からない私をヒタリと見据えた。

あのいつもの美少女に似合わない強い眼光。

「アイル」

名を呼ばれて、どうしてだか胸が跳ねた。

それまで掴んでいた腕が急に恥ずかしくなって離す。

「今から一緒に塔に入ってくれないか？」

「塔に…？でも」

「あんたは何もしないで一緒にいてくれればいい。『俺』を男だと知っているアイルにしか頼めないんだ。」

私はニアが自分のことを『俺』と呼ぶのを初めて聞いた。

「ニアのままじゃやっぱり嫌だ。俺はフィリーとして、あの人に自分を知ってもらいたい。」

「フィリー？」

私に聞かせるためというよりは、自分で自分に言い聞かせるように頷くニアに首を傾げた。

「俺の本当の名前。フィリー・ヘインズって言うんだ。アイルも誰もいない時は、そう呼んでくれ。」

なるほど『ニア』っていうのは女の子の名前だから、本当の名前は別にあったわけかと思ひ至る。

だけど、私にとって『ニア』はニアでしかなくて違和感を感じた。だけど、

「フィリー」

「ああ。」

その名を呼んで答える彼は見るからに美少女なのに、私にはもう  
彼が男の子にしか見えなくなっていた。

私って単純だと思う。

『フィリー』という名を呼んだ瞬間から、私は本当の意味で彼を  
男として意識しだしていた。



ニアに連れられて初めて入ることとなった塔の外観は白く、円柱状になっていて、頂上は王冠みたいに形作られている。

窓は上方にしかなく、下方にあるのは目の前にある鉄製の重々しい扉だけ。

ニア改めフィリー（そう呼べと言われたので）がゆっくりとその扉の鍵を回し、音を立てて扉は開いた。

（まるで監獄）

たった一つしかない入口には嚴重な鍵がかけられ、窓は逃げ出すことができない上の方にしかない作りにふとそんな感想が漏れる。ローズハウスの敷地内にあるというのに、塔の内部には全く違う空気が存在していた。

重く、静かで、痛い……塔の内部が薄暗いからそんな風に思うのかもしれないけれど、私は別の世界に迷い込んだような気すらした。塔の内部は色々なものが溢れていたが、フィリーは迷うことなく上へと延びる螺旋階段を目指す。

「こっちだ。暗いから階段に気を付けて」

フィリーの後に続いて階段を上りながら、一階にキッチンらしきものがあることに気が付いた。ここで料理とかも全部しているようだ。

「ここにはこの間、失踪騒動を起こした俺の家族。母親がいる。」

表情は見えなくても、声の固さからフィリーの緊張が伝わってくる。

る。

「この塔は母の揺り籠で棺桶。母を守る盾で、閉じ込める檻。……  
本当は俺がいちゃいけない場所なのかもしれない。だけど、俺は――」

フィリーの母親がどんな人物で、どんな状況にある人なのかは全く分からない。

だけど、私がこの建物に抱いた感想は強ち間違ってもいなかった。多分、ここはその人を外から守るための場所であるのだろうけど、それは同時にその人の自由を奪い、閉じ込めることとなったんだろう。真実、そういう意図がないとしても。

この場所は現実と隔離された場所なのだ。

そして、フィリーがそれ以上何も語らないまま、塔に唯一しかないとされる部屋の前に到着する。

数秒扉の前で立ち止まり、意を決してフィリーは扉をノックする。

「はい。」

「フィリーだ。入るぞ。」

帰ってきた女性の声にフィリーは一声かけて、ドアノブを回した。薄暗い塔内から、窓からの光が満ちた室内の明るさに目が眩む。

目が慣れて、フィリーの後に続いて部屋の中に入ると、鋭い声と何かがぶつかる音が聞こえた。

「いやああああ！来ないで！！！」

悲鳴と変わらぬ女の声。

ばさりとフィリーの足元に本が落ちたのを見て、私は先程聞いた

音がフィリーにぶつけられた本だと知る。

「だ、大丈夫？」

本とはいえ角が当たったりしたら、かなり痛い。

フィリーの背後から彼の覗き込める位置まで移動して、私は絶句する。

彼の表情があまりに悲しそうで、辛そうで…だけど、私が覗き込んでも彼は気が付いた様子がない。

フィリーはただ一点を見つめたまま、立ちすくみ、何も聞こえず、何も見えなくなっていた。

その視線の先にある存在に私は目を丸くする。

「おやめください!!!」

「イヤイヤイヤイヤ!!!」

車椅子の上で狂ったように叫びをあげ、髪を振り回す痩せ細った女性と、彼女を押さえつけようと抱きしめるようにしている女性。

「クルナアアア!!!」

胸を抉るような、悲痛な叫び。

そこには狂気じみた憎悪と絶望があった。

なりふり構わない剥き出しの強い感情が、声となり私を貫く。

痩せ細り、眼球の形が浮き彫りになった瞼は限界まで開かれ、そこからまるで血を滴らせたように鮮やかで、燃える炎のように煌めく赤い瞳がざらりと光った。

叫びと同じ感情しか有していない、その瞳が私を疎み上がらせる。そして、その感情はすべて、フィリーへと向かっていた。

強張った彼の表情から、彼があれほど動揺していた原因が朧げな

がらに浮かび上がる。

この女性がフィリーの母親なのだ。そして、彼女は全身でフィリーを拒絶していた。

「か：母さん。僕だよ、貴方の息子のフィーーー」

「来るなああああああ」

震える声でフィリーが伸ばした手を強く振り払い叫んだ彼女は、その勢いのまま車椅子から転げ落ちる。

「母さん！！」

「アイルフィーダ様！」

フィリーの言葉ともう一人の女性が叫んだ声に、私はわずかに固まる。

（アイルフィーダ？）

フィリーの母親は私と同じ名前だった。



そんな衝撃的な出会いを果たして、早数か月。

フィリーのお供をしてそれから何度も塔へとお邪魔することとなり、私もこの親子の複雑な事情という奴をぼんやりと知ることとなった。

フィリーの母親であるアイルフィーダさんは、昔、自我を失うほ

ど深い心の傷を負った。

以来、時たま正氣に戻ることもあるらしいけど、基本的には無感動・無表情・無氣力。

彼女の眼は何も映さず、耳に言葉は届かず、口が意味のある音を発することは、ほとんどない状況だという。

息はしている。生きてはいる。

だけど、彼女は誰かが食事を食べさせ、服を着せ、風呂に入れなければ、何もできない人形と成り果ててしまったのだ。

その後、アイルフィーダさんがどういう経緯でこの塔に入ることとなったのかは定かではないが、彼女はこの塔で専属の使用人、あの時アイルフィーダさんに抱きついていた女性ガーネットさんと二人っきりでひっそりと生きている。

見舞いに来るのは、息子のであるフィリーと、そのお供の私だけ。複雑な事情はフィリーの無言と、ガーネットさんの何も言わせない笑顔の前に、聞くことはできていないけれど、やはり計り知れない何かがあるんだろうと察しはついた。

さりとて何の力もない小娘にできることはなく、できることと言えば、フィリーに誘われてお供をするのと、その時に花の一つでも持参するくらいだ。（しかも買ったわけでもなく、ローズハウスの花を拝借しているし）

「ガーネットさん。こんにちは、これ今日の花です。」

「アイルさん。ありがとうございます。さっそく飾らせていただきます。」

アイルフィーダさんと区別するためか、ガーネットさんは私のことを一度も『アイルフィーダ』とは呼ばず、『アイル』と呼んだ。多分、年ごろは40代半ばといった所なのだろうけど、きっちりと纏められた髪に化粧気のない顔で、常に笑顔なのにどうしてかい

つも相手にNOと言わせない威圧感を漂わせる。

そして、まるで貴人の世話をするように、アイルフィーダさんのことを様付で呼び、何をするにも恭しく、ローズハウスで住人たちの世話をしているスタッフさんたちとは明らかに一線を画している。アイルフィーダさん専属というのもあるかもしれないけれど、主人と使用人のような厳粛な関係を少なくともガーネットさんは築いているらしい。

塔の中で私がそんな彼女に花を渡している横で、車椅子に座った母親の前に膝をつきフィリーは取り留めのない話をしている。

「母さん。今日はいいい天気だよ？」

「学校で面白いことがあったんだ。」

「アイルが子供たちに馬鹿にされて怒っていたんだよ？」

最後は少しばかり言わなくてもいいことのような気がするけど、返事がない母親に穏やかに言葉をかけ続けるフィリーははた目から見ればバカみたいかもしれないけど、フィリーの思いを知っている私はその光景を見るといつも心が痛んだ。

アイルフィーダさんはフィリーに視線すら向けないまま、茫然と前を見ているだけで、初めて会った時のような激しさは微塵も感じられない。

それは今の彼女に完璧な女装を施されたフィリーは『女』として認識されているから：

——アイルフィーダさんは『男』に強い拒否反応を見せるらしい

負った心の傷に『男』が強く関わっている：のかもしれない（これはあくまで私の予想）、ともかく『男』という存在が近くにいないだけで、彼女は初めて会った時のように激しい拒否反応を示す。

それは血を分けた息子フィリーに対してもそれは同じ。

あの日、フィリーがとても動揺していた日。

フィリーは暑さのあまり服を一枚脱ごうとして、うっかり上半身裸になってしまい、母親に男と認識された。（顔が女でも、さすがにあの胸板の上に偽乳を乗せただけでは男とばれるだろう）

結果、アイルフィーダさんは発狂し、それを目の当たりにしたフィリーは塔から逃げ出した。

それまで完璧な女装で、彼は一度も男として母親と接したこともなかったらしい。

男を拒否すると話には聞いていたけど、想像と現実は違う。

あの存在すら認めない強い拒否。しかも、それが母親が初めて発した彼へのまともな言葉と感情だったとしたら、それはあまりに辛い経験だっただろう。

そこを私に八つ当たりするなどと責められれば涙の一つもでるだろうと、それを聞いて少しづつが悪くなった。

だけど、その後、フィリーはまた母親の元に戻った。

発狂したまま、彼を拒絶したままの母親であろうとも、それから逃げ出さずに受け入れることにしたのだ。

そして、フィリーは自身を息子、すなわち男として受け入れて欲しいと思うようになった。

それまでは母親が心安らかなれば、女としてしか受けられなくてもいいと思っていたらしいが、女装にも限界があるし、やはり本当の自分を受け入れて欲しいと考え直したらしい。

とはいうものの、フィリーは女装はやめていない。

いきなり男の姿でアイルフィーダさんを混乱させても仕方がないと、とりあえずは女装したまましゃべり方などから本当の男としてのフィリーを見せていくと彼は語った。

結果として、今のところアイルフィーダさんも目立った拒否を見

せないまま今日に至っているけど、私にはそれまでの彼と今の彼の違いが全く分らない。

「そうですか？全然違いますよ…フィリー様は女性の演技が本当に上手でいらっしゃるから。」

首を傾げる私にガーネットさんはそういうけど、少なくとも私の前ではいつもあんな感じだし、それで問題がないから気にしないことにした。

（それよりも私、いつまで付いてくればいいのか？）

付いてくるのが嫌な訳はないのだけど、来たところでいつも母子の語らいを見守ってお茶を啜っているだけの私は身の置き所に困ることもしばしばだったりする。



「アイル。今日もありがとう。」

塔を出るころにはすでに夕方、門限も近いので帰ろうとするとフィリーも一緒に帰ることとなった。

「ううん。別に私は何もしていないし。」

塔に行くようになって一緒にいられる時間は増えたけど、フィリーとアイルフィーダさんの時間を邪魔するわけにもいかず、私たちに取り立てて進展はない。



というか、私も進展させようと思っていない。

フィリーに恋していると思うし、もし、彼がそれに答えてくれたら最高にハッピーだと思う。

だけど、今はまだその時期じゃないとも思う。

何しろフィリーはアイルフィードさんの事でいっぱいだし、思うし、何もできないけど彼が悩んでいるとき、せめて、相談くらいには乗ってあげたい：なんて、似合わない乙女なことを考えたりしている自分が嫌いじゃないのだ。

今はまだこうして夕日に伸びる二人の長い影が重なるくらいでいい。それを見るだけで嬉しい自分が楽しかった。

「あのさ、俺：じゃなかった私、アイルに何かお礼がしたいと思っているんだけど。」

「お礼なんていいよ。言ったでしょ？私は何もしていないし。」

だから、急にそんなことを言われても恐縮する。だって、言える訳ないけど私の行動には下心ありだ。

「私だってお礼って言っても、大したことはできないよ。だから、考えたんだけど、この間子供たちに服装を馬鹿にされてたよな？」

「ばっ馬鹿になんてされてないし。」

そうはいつでも、今の自分の服装を見下ろして段々と声が小さくなる。

フィリーはそんな私にこともなげに言った。

「だから、私がコーディネイトしてやるよ。」

「なっ！」

絶句。何を言い出すこの男。

「心配するな。私のいつもの服は自分で選んでいるんだ。子供たちも私の服装は褒めていただろう？洋服を買ってやるほど財力はないけど、見立ててやるには十分なセンスだと思うぞ。」

だから、任せろと言わんばかりの彼に『問題はそこじゃない！』と声を張り上げたかったけど、ぱくぱくと口を動かすしかできない。

「今は可愛くて安い服も多い。私も秋に向けていくつか服を見ようと思っていたから、ついでだ。ついで。来週の休み。ローズハウスに行く前、午前中とか時間はあるか？」

「あ…え？」

てきばきと私の返事も聞いていないのに、彼の中で話が進む。

「だから、時間はあるのかと聞いている。」

「あります！」

ずいっと覗き込まれて、のけ反りつつも咄嗟に答えてしまう。

「そうか。じゃあ、来週10時にメルト・ファンドの時計台で待ち合わせにしよう。じゃあ、私は向こうで迎えを待つからお別れだな。アイル、気を付けて帰れよ。」

そして、颯爽と走りさっていくフィリーをボンヤリと見送って、硬直すること数分。

（これってもしかしてデート！？）

フィリーにそんな意図はないと分かっているけど、私には突如持ち

上がった重大事項に嬉しさよりも、混乱が先んじていた。

——メルト・ファウンド

それはメルト・ファスト最大の多目的娯楽施設の名前だ。

買い物、食事、遊園地、舞台、映画など細分化すればするほど数限りない、人間が遊ぶための要素が詰め込まれたその場所は、5年前オープンした。

娯楽施設というものがなかった訳ではなかったけど、細々としたパツとしないものばかりしかなかったため、メルト・ファウンドができた直後は毎日人が入りきれないくらい溢れ、社会現象まで引き起こしたことが記憶に残っている。

ミィハーな女学生たちに紛れて、私も何度も遊びに行った。

5年たった現在でもその人気は健在で、様々に趣向を凝らしたエンターテイメントは行く度に違う楽しさを客に与えてくれている。

『私はこの場所で全ての人に夢と希望が与えられればいいと思っています。束の間、つらい現実を忘れられる場所：人にはそんな場所が必要なのですから。』

インタビュでそう答えていたのは、メルト・ファウンドの創始者にして、自治役員の一人ケルヴィン・ヘインズ。

彼の名はメルト・ファウンドができたことにより一躍有名になった。



（なんて堅苦しいことをいくら考えても、全然落ち着かないわね）

ぶつぶつと頭の中でこの場所について難しく考えてみたものの、全然落ち着かず、私は大きく肩を落とす。

一週間も経てば、自分の中の感情を整理して落ち着けるかと思いきや、約束の日が近づくにつれて私の落ち着きのなさには拍車がかかった。

あまりの挙動不審ぶりに周囲は心配し、自分でも制御できない感情に私も戸惑った。

それも今日で終わりかと思えば気が楽に…なすはずもなく（だって今日が本番だし）、私は現在一人でメルト・ファウンド入口付近で往生際も悪くキヨロキヨロ・そわそわしていた。

ちなみに時刻は9時30分…実はその30分前からここでスタンバイしていたりするのだけど、何度時計を見てもなかなか時計の針は進まない。

（何か…早く来てほしいような。来てほしくないような）

気持ち的には一人でアタフタするのも疲れたし、さっさと済ませてしまいたいという気持ちもある。

だけど、そうそうあるはずもないフリーとの二人っきりで出かけるというイベントが、終わらなければいいとも思っている。

相反する二つの感情の狭間、まさに複雑な女心を実感して唸っていると、人混みの中に彼というか彼女を見つけて、その全てがどこかにいってしまう。

「アイル！早いな、待たせたか？」

「う、ううん！今来たところだよ？」

なんて、会話…ああ、本当にデートみたいだと、緩む頬を無理や

り引き締める。

（いかんいかん）

首を振る振って、改めてフィリーに向き合う。

彼の美少女ぶりは今日も素晴らしい。

長い髪はシュシュで一つに結ばれ、珍しく活動的に七分丈のズボンは薄桃色。可愛らしいけど決して下品ではないシフォンのカットソーはオフホワイト。その上にモカ色のカーディガンと綺麗なコーサージュをつけている。

夏っぱさを残しつつ、もう秋先取りですか？と言いたくなるような、ファッショ誌から飛び出てきた感じの服装には降参するしかない。

そして、フィリー越しにぶつかっていくつかの視線。

私一人のときは感じなかった視線が、フィリーと合流した途端に四方八方からビバシ感じられる。

いつもは子供か老人しかいない中でしかフィリーとは会ったことはなかったので実感しないけど、こうして街中で会ってみると彼の美少女ぶりは凄まじいんだと笑えてくる。

（誰もフィリーが男だなんて分かんないよねえ）

そんな中で自分だけ彼が男だと知っていることに、妙な優越感を感じつつ、一方、私の服装はといえば昨夜も数少ない洋服たちと戦った結果、今回は辛くも勝利を収めたような気がする。

何しろ唯一の外行き用のワンピースを投入したのだ。これで負けてはとうしようもない。（…そもそも誰が勝ち負けを決める訳ではないのだけど）

「じゃあ、チケット買って中に入ろうか？」

メルト・ファウンドは様々な娯楽施設が一堂に介していて、来る人は皆それぞれ目的は違うだろうけど、とりあえず中に入るチケットが必要なのだ。

買い物するだけで必要なかと憤慨する人もいるだろうけど、ここはいるだけで何もしくなくても十分楽しめるテーマパーク。

チケットさえあれば、アトラクションには乗れずともショーやパレードは見放題だし、入場チケット代と言ってもジュース一個買うくらいの値段だから、これらを見に来るためだけに入場する人も少なくない。

ここは買い物をするために来るといよりは、雰囲気を楽しむための場所と言って良かった。（店の品揃えは確かだけど）

「それなら私が持つてる。」

「え？ ありがとう、先に用意してくれたの？ お金払うよ。」

チケットブースを見れば人がたくさん並んでいるので、並んでは時間もかかっただろう。

「何言ってるんだよ。別にいいよ、父親からくすねてきただけだし。」

「ええ？ 駄目だよ！」

「：なあ、アイル。ひょっとして気が付いてないのか？」

「何を？」

本気で何に気が付いていないのか分からないので首を傾げると、笑ってフィリーは首を横に振った。

「ねえねえ、私、何を分かっているの？」

この話の流れで何を分かれいいのか全然見当もつかないけど、何だか分からないことが恥ずかしいような気がして、笑うフィリーに問い詰める。

「いやいや。別に？ほら、行こうか？」  
「ちよっ！」

だけど、フィリーはそれ以上何も教えてくれず、私の背を押してメルト・ファウンドの中に入った。  
その時、私たちを見つめる目があることにも気が付かず。



「……………」

フィリーが絶対私に似合う服があるといって連れてこられた店の中で、私は沈黙していた。

「これなんかどうだ？…これも絶対似合いそうだ。」

次々とフィリーの手によって服が当てられるけど、彼の言葉に私は絶対にそれはないと声を大にして言いたかった。

俯いた視線を僅かに上げれば、きらきらと光る安っぽそうなガラスのシャンデリアが、店内のこれでもかというほどキラキラして、可愛らしい感じの洋服たちを照らしている。

（可愛い…うん可愛いと思うのよ）



店内には私たちを始め、数人の女性客と店員がいて、その全てが明らかに私とは違う種類の服を可愛らしく着こなしている。

その全てにはフリルやら、レースやらがたくさん使われていて、そういう洋服のジャンルがあるのは知っていたし、友達にもそういうのが好きな子もいるから別に偏見を持っている訳じゃないけど：自分では絶対に着ないと思っているジャンルの服に囲まれて、私は心底居たたまれなかった。

私がそんな状態なのに彼は全く気にした様子もなく、嬉々として私の洋服を選び続けている。明らかに二人は浮いていた。

「ね、ねえ？」

「何？…あ、これもいいな。ちよつと試着してみたら？」

「ええ！しないしない：っていうか、ニアは私にこれが似合うって本気で思っているの？」

むしろ、冗談だと笑ってくれた方が嬉しかったのに、彼はあっさり頷いた。

「アイルは割と幼くて可愛い顔立ちだし、華奢だろ？髪も長くて、目も大きい、絶対こういう服が似合うと常々思ってたんだ。」

「えええ？！いや、そんな風に言われても」

少しでも照れながら言ってくれでもしたら、その言葉にも信憑性があったかもしれないが、あまりにさりとて言われた上に、こんな美少女相手に言われても信じられない：っていうか、それは寧ろフイリーの方がその言葉通りだ。

「気に入らないか？」

「気に入らないっていうか：趣味じゃないっていうか。」

買ったところで絶対に着ない。

「似合う服と好きな服は別物だ。ともかく着るだけはただだし、一度試着してみなよ。」

言いながらグイグイ引っ張っていくフィリーに抗うこともできなかったらうけど、あまり意地を張って折角のデートを台無しにしたくない。

（まあ、似合わないに決まっているし。試着してさっさと脱ごう）

そんな風に思いつつフィリーに引っ張られるままだった所、前を見ていなくて誰かにぶつかる。

「ごめんなさい！」

相手はだいぶ小さな背丈の人だったようで、よろめいて尻餅をついてしまっていて私は慌てた。

「イタタ…ううん。私も人を探しててキョロキョロしてたか——  
ああ!！」

顔を上げた瞬間に交わった視線の先の瞳の色に、思わず息を飲む。

（アカ）

宝石のように煌めく赤い瞳、短くてもサラサラな銀色の髪、天使のように美しい少女…私は彼女を知っていた。

(どうしてここに?)

混乱する私だけど答えはすぐに分かった。

「リリナ、どうしてここにいるの?」

「フィリー: あは、見つかった?」

私の背後から彼女を呼ぶフィリー。

そのフィリーに対してバツの悪そうな顔をする彼女。それが全ての答えだった。嫌な予感に頭が真っ白になった。

「外ではその名は呼ばない約束でしょう? ごめん、アイル。この子は私の幼馴染で…」

「リリナカナイ・デュヒエといいます。初めまして!!!」

私の胸ぐらいの背丈の彼女が、可愛らしく頭を下げながら自己紹介をする。

「それで? どうしてここにいるの?」

「だって、フィ: じゃなかったニアったら最近、全然遊んでくれないんだもん。だから、今日こそはと思って家に遊びに行ったら、もう出かけたって聞いて。」

しゅんと萎れた花のように俯くリリナカナイ。

それまで少しだけ怒ったような顔をしていたフィリーも、そんな彼女に仕方がないなあといったように彼女の頭をポンと叩く。

そして、笑う。

(…ヤメテ)

呆然と立ち尽くしたままの私は心の中で呟いた。

そんな顔で笑わないで、優しく、愛おしくて仕方ないという笑顔：アイルフィーダさんにも見せたことないじゃない。

フィリーは17歳。リリナカナイは13歳。

この年頃の4歳差は大きい。

フィリーにとって彼女はまだ妹のような存在かもしれないけど、リリナカナイにとってフィリーはすでに恋する相手だと一目で分かった。

頬を染め、大きな瞳に好きだという感情を隠すことなく彼を見つめる表情は、少女ながらに一端の女でもあった。

そして、フィリーがそれに気が付いているか否かはともかくとして、その視線に誰にも見せない優しい微笑みを返している。

数年後の二人が恋人になっているだろうことを想像するのは、ありふれた恋物語の結末を予想するのと同じくらい容易い。

（お願い『彼女』だけはヤメテ）

「それで追いかけてきたの？ まったくりリリナの行動力には驚かされるわ。：よくここが分かったわね？」

「だって、ケルヴィンおじ様がニアにチケットをせびられたって珍しがってたから。」

「っち、くそ親父め。」

小さくつぶやかれた言葉は私にもリリナカナイにも聞こえなかったけど、萎れていた彼女も、フィリーの声音が怒っていないことを感じ取ったのか、にこりと天使のような笑顔で彼を見返す。

美少女二人の競演に店内も何事かと、こちらを遠巻きに窺っている。

リリナカナイの登場に呆然自失となっていた私も、正氣に戻りとりあえずはここを離れなければと思う一方で一つ気になった。

「ケルヴィンおじ様？」

まさかという気持ちで問いかける。

確かフィリーの正式な名前は、フィリー・ヘインズ。ヘインズなんてありふれた名前だったから、気に留めていなかったど、父親がケルヴィン・ヘインズ？

「ああ…ばれた？ そうなの。」

それが答えだった。

フィリーはこのメルト・ファウンドの創始者ケルヴィン・ヘインズの息子…あの『ヘインズ』の子供。

それを理解した途端に、色々なことが私の頭の中で駆け巡った。フィリー、リリナカナイ、ケルヴィン・ヘインズ…その三人によって導き出された結論は、私にとってあまりに残酷だった。

「アイル？ どうかした？ ごめん、隠しているつもりはなかったんだけど、チケットをくすねたって言っても気が付かないし、わざわざ言うのもどうかと思って。」

沈黙に沈む私が怒っていると思ったらしく、謝るフィリー。

「何でもない。別に怒っていない。それより、一旦店を出よう？」

「でも、まだ試着が…」

その声は聞こえないふりをして、私は試着するはずだった服をてきぱきと元にあった場所に戻すと一人で店を出た。

「アイル！ どうしたんだよ！？」

振り返らず歩き続ける私は、店のすぐ外で手を取られる。  
向かい合ったフィリーと目が合わせられない。

（だって、こんなの酷すぎる!!）

心はまるで嵐のようにざわめき、ここが町中じゃなかったら正直泣き叫びたい気持ちだった。

だけど、私は笑った。

「どうもしないって、ほら彼女がそんな大きな声を出すから驚いているわよ？」

「あ…」

何だか怯えたような表情で固まっているリリナカナイに、私はしやがみこむと張り付いた笑みを向ける。

それぶ僅かに安心したように息を吐くりリリナカナイに、私の心はどんどん冷たくなっていくのを感じた。

「リリナカナイちゃんはニアと遊びたかたんだよね？私も一緒に申し訳ないけど、それでいい？」

「はい！あ、私のことはリリナって呼んで！私もお姉さんのことアイルって呼んでいい？」

彼女は昔から物怖じしない、誰にでも愛される少女だった。

13歳の彼女からしたら、17歳の私は大きなお姉さんだったに違いないのに、全く人見知りもなく笑いかける。

その彼女を邪険にできるはずがない。そんなこと誰も許さないだろう。

それから、私たちはわずかな時間だったけど一緒にメルト・ファ

ウンドで遊ぶこととなり、私もフィリーも洋服を一着も買わずに、リリナカナイに付き合ってパレードやショーを見た。

その後、ローズハウスに行く時間になって、リリナカナイがまだフィリーと遊び足りない駄々をこねたので、午後になってからは私だけがローズハウスへと行くこととなり、二人とは別れた。

だけど、結局私はその日、ローズハウスへはいかなかった。

そのまま寮へ帰り、自室へ直行するとベッドの中にもぐりこむと、大声で泣いた。

「どうして？ どうして?!」

出てしまった決して覆らない結論。

せめて、フィリーがヘインズの息子でなければ、フィリーを好きなのがリリナカナイでなければ良かった。

それだったら、例えフィリーへの思いが報われなくても、私がこんな風に悲しむことはなかった。苦しむことはなかった。

「ううううっ」

泣きすぎて苦しくなった呼吸すらも無視して私はただ泣いた。

泣いたって、何も現実是不変ならないと分かっていたも、制御できない感情は泣かずにはいられなかった。

せめて、彼と彼女の前で感情を爆発させなかったのが、私のせめものプライドだった。

そして、私はその日からローズハウスへはいかなくなった。

泣き腫らした後、全てから逃げ出すことを私は選んだ。

—— 一難去ってまた一難

リリナカナイ、強襲！（実際には襲われたわけじゃないけど、気分的には『強襲』という言葉がぴったりな邂逅になった）：により疲れ果てた私に更なる危機が迫りつつあった。

それがこれから始まる大きな事件の始まりであることを、私はまだ知らない。



ギギギギ：来た時と同じように、重い音とともに開く扉を見て私はやっとここから出られるのだと、ルツティやレグナにばれないように僅かに息を吐いた。

（早くベッドに入りたい）

まだ日の高いうちからそんな事を考えてはいけないけど、普段通りならば夜には寝室でフィリーと顔を合わせることになる。

フィリーの方は何一つ困ることも無いだろうけど、今の状態で彼と同じベッドで寝るなんて拷問以外の何物でもない。

だけど、フィリーに後宮に来るなどとは言えないし、かといって私はどこにも逃げ場所も隠れ場所もない。

気持ちを切り替える上でも、一度一人になって思いっきり泣いてしまいたかった。



昔から私は嫌なことがあると、大抵一人で大泣きをして、そのまま泣き疲れて寝てしまうのが常で、そうしたところで現状は変わりはないし、嫌なことが忘れられる訳でもないけど、気持ち妙に軽くなる。

だけど、フィリーと一緒にベッドにいては泣く所か、愚痴の一つも漏らせない。

だったら、今の内にさっさと部屋に籠って思いっきり泣くことの一つでもしないと、感情が収まらない。

リリナカナイとの会話で溢れた感情をフィリーの登場で飲み込んだ私だけれど、気が緩んだ今になってそれが喉元まで溢れてこようとしていた。

今は何とか耐えられているけど、このまま急に泣き出すか、ヒステリーを起こしそうな自分がいとも簡単に想像できる。

（まあ泣くとか、ヒステリーくらいなら情緒不安で片付けられるけど…私の場合更に厄介な症状が出たらやばいし）

ともかくさっさと後宮に戻って、いつもの自分を立て直さなくてはと思っていると、私たちを止める声が背後からかけられた。

「お待ちください！」

声に振り返ると、颯爽とマントを翻しながら駆けてくるランスロットの姿。

空中庭園に降り注ぐ太陽の光に銀色の髪がキラキラ光る。だけど、今は心の余裕の無さに、その髪の輝きにさえイラツとさせられる。

「ああ？また面倒な野郎がお出でなすったなあ。」

私たちを先導していたレグナが、だらしなく頭をかきながら酷く

億劫そうにぼやく。

そのあまりの覇気の無さに一抹の不安を覚えつつも、その発言には激しく同意をする。

ランスロットが私ではなくレグナにしか視線を向けてないこともあり、私が口を出す場面でないことは重々承知しているけれど、色々我慢が限界な私は思わず……いけないいけない、この先は想像しちゃダメだ。

私は両手をぐっと握りしめて、溢れる衝動をやり過ごす。

「よう、色男。今日も目が潰れるくらい眩しいねえ。」

誰が聞いても十中八九褒め言葉には聞こえない、明らかに馬鹿にしたレグナの挨拶らしき言葉にランスロットの美しい顔が赤く染まる。

「どうしていつもそうっ……いや、そんな下らない挑発に私がいつも乗ると思わないで下さいよ。」

「下らない挑発……ねえ。別に俺はそんなつもりはないぜ？単にお前のその無駄にキラキラしている眩しさが目に痛くてよ。」

「貴方は！！！！……くっ」

そう言って両目を手で隠すレグナと言えば、髪も目も黒く、肌もこれは日焼けのためだろうが浅黒い。体の大きさも相まって、まるで大きな熊のようだ。（まあ、熊はこんなに減らず口が回らないだろうが）

かくして、二人のこんな僅かなやり取りからでも、ランスロットが日常的にレグナにからかわれている様子が伺える訳なんだけど、斜に構えたランスロットをレグナがやり込めている事実は、両者への私の印象を大きく変えた。

そのまま惰性で続くかと思われた二人の喧嘩（？）だけれど、ラ

ンスロットが大きく息を吸い、背筋を伸ばして、その空気を変えようとする。

「オル騎士団長殿。王妃アイルフィード様の護衛を今日は私が巫女より直々に承っております。それ故、貴公の手間は取らせません。私がこのまま後宮までお連れします。」

優雅に一礼をして、役者が述べる様な口上を宣うランスロット……今更そんなことをしても、彼への崩れ去ったイメージは二度と戻らない。

なんて、そんな風に思った私も酷いかもしれないけど、それに返答するレグナは私の更に上をいく非道さだった。

「イヤ」

その礼儀の『レ』の字も感じられない返答にランスロットだけじゃない。私もルッティも息を飲む。

「はあ?!」

目上に対する礼儀も忘れ、ランスロットが思わずそう聞き返したことも、私は仕方ないと思う。

それに対してレグナは怒るどころか、寧ろ楽しそうにというか、意地悪く笑う。

「だから、イ・ヤだって言ったんだよ。王妃さんは俺が送っていくから、オメエは巫女の嬢ちゃんの所にさっさと帰れ。」

しっしと動物を追い払うような仕草をするレグナに、ランスロットの怒りは頂点に達したらしい。

「んなこと、できる訳ないだろ!!!」

上司（多分、騎士団長だっというんだからレグナが上司だろう）相手に、敬語も使わずに胸倉をつかまんばかりの勢いで詰め寄るランスロットに、私に見せていた貴公子然とした優雅さの欠片も見当たらない。

これは単にランスロットが逆上しているだけなのか、はたまたレグナによって表に出された彼の本質か…、どちらにしろ軽率だとか言いようがない。

彼らの関係がどんなものかは知らないが、少なくとも喧嘩を売るなら冷静さを欠いてはいけないだろう。

冷静さを欠けば、どんどん相手のペースに乘せられる。ほら…

「なんでだよ？頼まれたお使いもできねー、ぼっちゃん育ちの使えない奴だと思われるのが嫌か？」

その言葉はランスロットにとって凶星だったのだろう。

顔を真っ赤にして声も出ない彼に、私は自分の疲れも忘れてほんの少しだけ同情する。うん、ほんの少しだけ。

レグナにいいようにからかわれている彼は、それほどに哀れだった。

「じゃあ、いいぜ？お前が王妃さんを送ったってことにしてもらっても、俺は一向に構わねえ。だが、王妃さんを送るのは俺だ。お前にこの人は任せられねえ。」

ランスロットも小さいはずはないが、レグナを前にするとまるで少年のように華奢に見える。

レグナは自分の強みをよく分かっているようで、その大きな体で

相手を威圧しながら言い放つ。

それに明らかに負けているはずなのに、それでもまだ立ち向かうとするランスロット。：いや、負けていることすら気が付かない愚か者なのか？

彼を見ていると、だんだんさっきまでリリナカナイに対していた自分を見ているようで、ほんの少しだった同情心がむくむくと大きくなるのを感じる。

同族相憐れむという、悲しい人間の性。同時に急にレグナが憎々しく思えてしまう単純な私は、やっぱり疲れているのだろうか？

「どうしてだ！？馬鹿にするな！後宮に送るくらい私にもできる！」

「オメエが弱いからだよ。色男。弱い奴にアイツの王妃さんを任せられるか。」

その簡潔で、あまりに鋭い言葉にいよいよランスロットは顔色をなくす。

それを見て私は少しだけ息を吐き、傍観者から当事者へとシフトした。正直、自分と重ね合わせてしまったランスロットの境遇を、これ以上放っておけなかった。

「いい加減にして頂きますか？」

リリナカナイと対面している時から張り付いた笑顔でそう言ったけど、自分の声がもんのすごく苛ついていることに声が出た後に気が付く。

（あれ？）

それに対して自分でも一瞬驚く。

どうやら、自分でも自覚がないくらい、相当苛々しているらしい。

「なんでえ？王妃さん。」

「こんな所で延々騎士同士の争いに付き合っているのは飽きました。もう、その辺りでやめて頂けませんか？」

「ほう…」

刺々しい私の言葉にレグナの太い眉毛が片方だけ上がる。

それからまるで値踏みされているように、下から上まで舐めるように見つめられる。

その視線に厭らしさはないが、私に対する含む感情を彼は隠すこともしないらしい。

それに対して常の私であるならば、にこりと感情が見えない笑顔という奴で煙に巻くところだけれど、今日の私は…ダメだ。

レグナに真っ向から立ち向かうような挑戦的な顔をしている自分が、鏡を見なくてもわかる。

（ヤバイ…私、このままじゃ）

発散できない溜りに溜まった淀んだ感情が、外に出たいと私の中で制御できないものとなっている。

だから、早く後宮に戻って泣いて発散しようとしていたのに……

「貴方は黙っていてください！」

（なのに、この男のせいで！！！）

さっきまでの同情心はあっけなく消え去った。

私はレグナからランスロットへと向き直って、一言。

「どうして、黙ってないといけないんです？」  
「え？」

その声の冷たさに、そして、多分表情の冷たさにランスロットが固まった。

ちなみに私の言葉は丁寧だし、浮かべている表情は至って笑顔。だけど、自分で言うのもなんだけど、こういう時の私の絶対零度の声と表情は死神よりも怖いと、昔から怖がられていた。

どれくらい怖いかなんて自分と対することができないので分からないけど、同年代どころか年上の男の人もこの状態の私には昔から絶対に逆らおうとしなかった。

（こうならないように我慢していたのに。まったくこの男のせいではない！）

泣いたり、ヒステリーを起こすよりも、こうやって強い攻撃性を爆発させた方が印象は遥かに悪いだろう。

オルロック・ファシズというだけで色々言われているというのに、更に口さがない人たちに餌を与えるようなことはしたくなかった。言っておくけど、これが私の本性ではないのよ？

私は基本的には穏やかで平和を愛する性格なんだけど、どうやらこうして感情が沸点を超えらるものすごい攻撃的な性格になるらしい：いや、らしいっていうか、そうなる。

自分では普段の私より少し怒っているくらいの感覚なんだけど、周囲に言わせると二重人格かと思うくらい人格が違うらしい。

なので、あまり自分でもこのモードの自分にはならないように気を付けているんだけど、まあ、こうなっては仕方がない。

（私を怒らせたランスロットが悪いということだ）

実際に彼が私を怒らせた度合いなどたかがしれていたけど、最後の引き金を引いたんだと思って諦めて欲しい。

色々と切れてしまった私はもはや自分でも止まらなかった。

「今、貴方たちが話していたのは、私を誰が送るかという事ではないんですか？その私がどうして黙っていないといけないんです？」

笑顔で捲し立てながら、一步前に出てランスロットを見上る。

身長はランスロットのほうが私よりはるかに高い。

だけど、心情的には私の方が彼を見下していた。

「それにこう申してはなんですが、私もか弱い女です。守って頂けるならより強い騎士様を望みます。貴方様とレグナ様…お二人の中で選べるとしたら、クス、言うまでもありませんわよね？」

止めとばかりに笑顔を嘲笑へと変える。

それに対してランスロットは美しい顔を歪め、詰め寄った私にたじろぎ、足をもつれさせてよろめく。

（これ以上言ったらさすがに泣くかしら？）

私にすっかり気圧されて、言い返すどころか泣く寸前の顔をしているランスロットによくやく溜飲が下がる思いがした。

泣くよりも遥かに手短ですっきりした気分になって、息について私はそこではっとした。

ばかりと目があう、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべるレグナ。呆然とこちらを見つめるルッティ。そして、こんな時でも離宮の扉を守る職務を全うしようと、視線だけ興味津々でこちらに向けている兵士。



(やっちゃった)

心の中でそれ以外には何も言えない私だった。

『……………』

にやつきながら顎の髭を触るレグナ、茫然自失で貴公子の仮面が完全に剥がれたランスロット、私の突然の暴挙に無表情のルッティ、そして、どんな顔をしたらいいか分からない『やっちまった』私。四者四様にさまざまな感情のまま、誰も声を発することなく沈黙すること数十秒。

とりあえず、私はこの場から去ろうと思い立つ。

このままここで揉めて、後からフィリーたちと鉢合わせでもしたら目も当てられない。

「ともかく！早く後宮に帰りましょう。」

何がどう『ともかく』なのかは、言っている私も分からない。

だけど、この状況では私から動かない事には、誰も動いてくれそうになかった。

「はいっ！ランスロット様も今日はお疲れのようですし、早く帰ってお休みください。」

「あんたが再起不能にしたんだろうが」

私がニコリと笑っただけで肩を震わせたランスロットと、背後でぼそりとそんな事を呟くレグナ。

だけど、私には王妃に怯える半泣きの騎士も、それを楽しそうに見物しているだらしない騎士も見えないし、何も聞こえない。

「さあさあ、帰りますよ。」

キレてみたはいいけど、その後のことを何も考えていなかった私は、ここを離れたい一念で一同を先導するように早足で歩きだす。すると、それまでただ気味の悪い笑いを浮かべているだけだったレグナが急に焦って、私の前にその図体からは考えられない速さで立ちはだかる。

「待て！分かった。後宮にあんたが帰ってくることに、何の意義もないから。ともかく、俺の傍を離れるな。」  
「はあ。分かりました。」

そんな彼に私はそんな風に気の抜けたような返事をしつつ、首を横に傾けた。

かくして、時間にしては数十分の滞在だったけど、その何倍も長い時間いたような気がする巫女の離宮を離れる。  
そして、当たり前だけどランスロットの気配は私たちを追ってこない。

（また、私のストレス解消に付き合ってくれたりすると嬉しいけど）  
半泣きにした男相手にそんなことまで考えてしまう私は、まだまだストレスの全てが解消されたわけではないらしい。



後宮は私にとって居心地が悪い場所だと常々思ってきたけれど、帰ってきて思わずほっと息を吐いたことに気が付いて、自分がこの場所に慣れ始めていることを知った。

数カ月のほとんどをこの場所で過ごした証拠だ。

だけど、それだけずっと閉鎖された空間にいたということ。

それを今までは疑問には感じてはいたが、フィリーやルッティを困らせたくなって、深く考えたことも、それを追求したこともなかった。

しかし、今回、リリナカナイというきっかけがあったとはいえ、あまりに呆気なく後宮から出れたことで、その事を、そして自分の存在意義について強い違和感を感じた。

（いくら私がオルロック・ファシズの王妃で、警備の面で難しいっていても、後宮に軟禁状態にされる意味が分からない。）

今までの私であれば、それを自分の中で悶々と悩んで終わるしかないのだろうけど、今回は運良くそれに答えをくれそうな人物が目の前にいる。

私は自室のテラスで向かいに座る男に視線を向ける。

大きな体を彼には小さいだろう椅子におさめたレグナ。正式にはレグナ・オレ近衛騎士団長。

後宮に戻ってきたというのに、当たり前のように私とお茶を共にしているこの男は、基本的にフィリー以外の男を認めない後宮の中で異質だった。

ちなみに私がお茶を誘った訳じゃない。

後宮に付いた途端、

『え？お礼にお茶をご馳走してくれるのか？さっすが、王妃さんは心が広いねえ！』

と、何も言っていないのに勝手に話を進め、抵抗を見せたルッティを強引に丸め込みんだ。

そして、私の後ろで彼を睨みつけるルッティと、数人の好奇に満

ちた侍女たちに気が付かないふりをして、現在彼は音を立ててお茶を啜っている。

繊細な白磁のティーカップは、レグナの手の中ではまるで子供のままごとの道具のように小さく見える。

そんな風に彼を観察しつつ私もお茶を飲みながら、はてさてどうやって話を切り出すべきかと模索する。

何しろランスロットに対するキレっぷりを見られているため、微妙に私の方からは言葉をかけにくいのだ。

更にルッティも表情や声が固いことが気になる。

彼女は私付きの侍女の中で、私がオルロック・ファシズの王妃でも良く仕えてくれる唯一の侍女だ。

ルッティに警戒されたりすることは、何が何でも避けたい。

だけど、見られたものを無かったことにはできないし、かといって『私実はキレると怖いんです』なんて自分から言うもの馬鹿馬鹿しい。

（大体、私だって人間なんだから、ストレスだって溜まるし、怒ったりして何が悪いっていうのよ？）

と段々と思考が脱線しつつ、心の中だけで開き直っていると、私より先にレグナが口を開いた。

「ごちそうさん。さすが後宮だなあ、いい葉を使ってる。」

あんたに茶の良し悪しが分かるんかい…と突っ込みつつ、とりあえず笑みを返す。

ちなみに私はここで出されるお茶が美味しいとはあまり思えなかったりする。

数か月前までは安くて薄いコーヒーばかりを職場で飲んでいたた

め、高級すぎるお茶に慣れないのだ。

「それにしても、あんたも今回は災難だったなあ。」

きた：と表情は変えずに気を引き締める。

理由もなしにレグナが後宮でお茶を飲みたがる訳もないだろうと思っていたため驚きはしない。

ただ、ランスロットのように簡単にやり込める相手とは、先ほどのやりとりから考えられないから、私も笑顔のまま臨戦態勢に入る。

「何のことですか？」

「巫女の嬢ちゃんに強引に後宮から連れ出されてみれば、フィリーにさっさと帰って言われちゃあ：あんたも立つ瀬がないだろう？」

「いいえ。お二人もお忙しい様子ですし、仕方ありませんわ。」

そんな事、微塵も思っていない。

だけど、このレグナにはランスロット相手のように強気に出ると、痛い目を見るのは自分であると予想が付く。

とりえず、様子見のために当たり障りのない事を聞きながら、彼の思惑を探る。

「それより、レグナ様とは初めてお会いしますが、陛下や巫女様とも大変お親しい様子で驚きました。近衛騎士団長とはいえ、主従関係なのに：こういうっては何ですが……」

「口が悪くて、申し訳ないねえ。」

がははと大口を開けて一人で笑うレグナ。

地位や階級を重んじるはずのレディール・ファシズの中で、世界王や巫女相手にあんな口を叩けば普通は首がないはずだ。

「お偉いさんにも良く怒られるんだが、そういう畏まったしゃべり方は性にあわねーの！大体、フィリーや嬢ちゃんにしても、俺のガキと同じ年ぐらいだからなあ…そもそも敬えつつーのが無理なんだよ。守りたいとは思うけどなあ。」

そう言っただけでなく、服の上からも筋肉質でかなり鍛えられていることが分かる。

その彼が私たちの親世代と同年代とは、てっきり老け顔の30代位だと想像していた私は驚いた。

「お？言っとくけど、王妃さんのことも守りたいと思ってるぜ！」  
「それはありがとうございます。」

しかも、この落ち着きのないしゃべり方だ。

礼儀や作法を重んじる事をファイリオンから徹底的に教わっている私から言えば、彼が近衛騎士団長ということも信じられない。

（それだけ腕が立つっていうこと？）

彼のこういった態度を不問にせざるを得ない何かがある…そう考えれば辻褄があう。

「そのせいであんたに窮屈な思いをさせていることは申し訳なく思っているけどなあ。」

レグナについてあれこれ想像を膨らませていると、そんな全く謝っている心がこもっていない言葉と声がかかる。

今の殺気立っている私だったらそれにカチンとくるところだけど、その言葉を待っていましたとばかりに私は笑みを深くした。

「そのお話なんですが、私に対してどうしてそこまで嚴重な警備が必要なのでしょう？城の外に出るといっているのであれば話は分かりませんが、城の中を移動するだけで騎士団長にお出でいただくほどの必要があるとは私には思えません。」

レグナは私の言葉に目を見開いた後、面白いものを見つけた子供のような顔で身を乗り出す。

「さっき、ランスロットに半べそかかせた時もあったが、あんた、フィリーの話とは全然違うんだなあ。」

「え？」

「いんや、なんでもねーよ。俺は気の強い女は嫌いじゃねー…それにあんたの意見はもつともだ。話…してやってもいいが少し長くなるぜ。構わないか？」

どうせこの後は特に何の予定もない。

この際、はっきりさせてもらおうじゃないかと、私は頷いた。



長い話になるという言葉に、私はお茶のお変わりと上に羽織るものを侍女に頼む。

私たちが今お茶を囲んでいるのは、後宮の庭園だ。

気が付けば太陽も次第に傾きかける夕刻。

長い時間とはいえ何時間もかからないだろうが、現在の初夏の陽気ではワンピース一枚では少々肌寒かった。

そんな私にレグナは中に入って話を続けようかと提案してくれたが、私はそれに首を横に振った。

何度も言うけれど、後宮は基本的に男子禁制なのだ。

もうレグナが後宮にいるという事実は消せないけど、せめて室内ではなく屋外で、更にルッティ他たくさんの侍女の目のあるところで、レグナとの対面は済ませておきたかった。

フィリーがこの事を気にするとは思えない。

だけど、後々レグナと後宮で会っていたことを重箱の隅をつつくように誰かに追及された時、その逃げ道を念のために用意しておきたかった。

かくして、レグナの長いような短い話が始まった。

「まず、王妃さんの警護が嚴重な理由には、一つあんながオルロツク・ファシズであること。そして、現在のレディール・ファシズが一枚岩じゃないことが大きな要因だろうな。」

ルッティがレグナの空になったカップに静かにお茶を再び注ぐ。

それを再び口元に運びながら、レグナは私を見て少し目を細める。

「まあ、面倒な話は省略するぜ？ 30年前のくバルバトスの箱舟」

事件以降、陣営は表面的には神の權威を笠にのさばる教会によって支配されていたが、その教会から神を救い出そうつつう反教会組織・名もなき十字軍が結成され、テロやデモが頻発するようになった。対する教会もそれを鎮圧しようと武装化を進めていって、正直、フリーが世界王になるまで＜神を信仰する陣営＞は本当にひどい有様だったよ。」

その時のことを思い出しているのか、にやけた顔に影が落ちる。すると意外に顔の皺が深いことに気が付き、レグナの顔が急に年相応に老け込んだ。

それを見つめながら、私は省略された部分を補いつつレグナの話  
を咀嚼する。

そもそも成り立ちが相容れないため、反発せざるを得ないレディール・ファシズとオルロツク・ファシズだけれど、両者の領域は重なり合うどころか、距離としてかなり離れているために無関心と不干涉が長きにわたる不文律だった。

更に両陣営の領域は共に＜不入の荒地＞と呼ばれる不毛の大地に  
囲まれていたため、不文律はより確かなものになっていた。

私も嚴重警護に守れつつアップパー・ヤードに到着するまで、丸一週間ほどかったし、食糧や飲み水もなく、天候も昼は灼熱、夜は極寒、更に人知の至らぬ魔物も出没するとなれば、よほどの準備と覚悟がなければ荒地を越えることは不可能だと分かる。

そんな感じで行き来自体が限りなく難しい故に、互いの存在を憎々しく思っている、連絡を取り合う事すらなく均衡状態がずっと続いていたのだ。

——＜バルバトスの箱舟＞事件、それがおこるまでは

レグナの話を訂正すると、それがおこったのは正確には29年前

になる。

今説明した通り、互いの存在を認識していても、交流がほとんどなかった二つの陣営にその事件は大きな衝撃をもたらした。

それは大規模な亡命。

レディール・ファシズの人間が何百人単位で暴徒と化し、＜バスバトスの箱舟＞と呼ばれる完成間近だった世界初の巨大空中戦艦を奪取し、オルロック・ファシズへと亡命したのだ。

その暴挙に至った理由は神の教えを説き、守るために存在する教会への不信。

彼らは教会の独裁政権下で神の教えは守られないと主張し、オルロック・ファシズに亡命を果たす。

オルロック・ファシズは教会の教えや神を信じていないが、だからと言って基本的に神とその教えを排除するという差別意識はなく、寧ろ政治的思惑を有して亡命者たちを好意的に受け入れた。

ちなみに教会について説明不足だと思うから補足させてもらうと、レディール・ファシズは神を頂点として世界王と巫女が次点に並び立っている。

世界王は主に執政により民衆を導く立場であり、政治的実権を握る議会と軍事の実権を握る騎士団の長だ。

対して巫女は世界王を補佐する他に、民衆を宗教的立場から導く立場として、教会という唯一神の教えを説き、守る存在の長として存在していた。

だけど、いつしかこの教会という存在は本来の役割だけに収まりきらず、騎士団とは別に独自の武力集団を持ち、執政などにも強く影響力を持つようになっていった。

それに伴って世界王や巫女はいつしかお飾りの存在となり、教会によって次代の世界王と巫女が選ばれることが慣習となり、教会の権力はレディール・ファシズにおいて絶対的なものとなり、民衆を蔑にする腐敗した政治が行われるようになった。

それだけの力を持つ教会である。

＜バルバトスの箱舟＞事件も大規模な亡命という前代未聞な大事件とはいえ、それらを反逆者として扱い、徹底的な情報操作や弾圧を用いて事件後に、反教会派である名もなき十字軍を生み出さないことも難しいことではなかったはずだ。

実際、情報は様々に操作され、教会の武装集団による武力弾圧も何度もあったらしい。

だけど、この事件がただの大規模な亡命という事実に残まらないことが、名もなき十字軍が今日まで教会に屈しない大きな存在になる要因だった。

――何しろ、その亡命には当時の世界王と巫女が含まれていたのだ

これには教会も二の句が告げないというか、完全にお手上げとしか言いようがなかった。

世界王と巫女、権威の象徴である二人がそろって教会に反旗を翻し、オルロック・ファシズに亡命した。

民衆の教会に対する尊敬や信頼は地に落ち、反教会勢力によるテロやデモは武力弾圧にも屈することなく続いていく。

更に教会にとって苦しかったのは、次に世界王になれる血筋が亡命した世界王以外にはあらず、世界王がいない以上、巫女を選定することができなかったのだ。

よって、レディール・ファシズ史上初の世界王不在の期間が生まれてしまった。

――その期間、およそ21年

「崇めるべき神の代弁者を喪失した21年は長すぎたってことだ。教会は世界王と巫女の権威を利用しまくっていた以上、世界王不在

を埋める絶対者を作る理由を考えられず、結果、30年くらいまでは強固な団結力があつたレディール・ファシズも今はバラバラ。」

レグナの話はあまりに端折りすぎの感はあるけれど、予備知識があるおかげで私は特段困ることなく彼の話を聞いた。

むしろ、私が聞きたい話はここから先だ。

「表面上は八年前、正当な王位を継ぐ者フィリーが現れたことでテロやデモは一定の鎮静化を見せている。長きにわたる内戦状態の中で空位だった世界王という存在は、教会を信じられなくても継り付きたくなる希望だ。」

城の中に、更に後宮に押しこめられてる私には全く分からないけど、中心地であるアッパー・ヤードでさえその治安は悪いと聞く。

長い内戦はレディール・ファシズに大きな傷跡を残し、未だにその傷は膿を孕んだままなのだ。

「フィリーや巫女の嬢ちゃんが、教会の独裁に異議を唱えて、民衆のための政治をしようとしていることも反教会派の鎮静化の大きな要因だ。それでも教会の堅物共は二人の邪魔をしまくっていて、八年経ってもあまり状況が好転したわけじゃないけどな。それでも…前進はしているんだ。」

離宮でのリリナカナイの言葉が思い出された。

彼女が言っていた頑固爺もとい【重臣】というのが、多分レグナが言うところの【教会の堅物共】なんだろう。

それらに対抗し、現状を良くするためにフィリーやリリナカナイはオルロック・ファシズの王妃を欲した。

その真意は分からない。

分からない以上、簡単に協力はできないと思うけれど、私だって

こちらの事情をある程度理解していて嫁いできた。

こんな風に何もかもから隔離されて、弾きだされさえしなければ、王妃としての役割くらいは果たすつもりだった。

辛くてもフリーが求めてくれるなら本望だった。

なのにリリナカナイから王妃として求められ、フリーからは無視されて、一体彼らが私に何を求めているのか分からずに振り回されては、私はあまりに辛い。

そんな風に先ほどまでの離宮での出来事を思い出して苛ついていると、レグナがふと言葉を切って私の顔をまじまじと見ている。

「？」

それを不思議に思っで見返していると、適当感たっぷりのレグナが不意に真剣な顔をしてこちらを睨み付ける。

さすがに近衛騎士団団長の役職を賜っているだけあってその迫力に、私の後ろに控えている侍女が息の飲むのが分かった。

「……とここまの話はオルロック・ファシズの人間であるあんたが知るはずのない情報だ。だけど、あんたは嫁ぐ前から全部知っていただろう？ でなきゃ、今の話が全部理解できはずがない。それとも、意味も分からず訳知り顔をしているだけか？」

カップを音を立てて乱暴に置いてこちらを威嚇するレグナ。

急に人が変わった彼にルッティが抗議しようとするのを私は静止して、代わりにのんびりと答えた。

「答えを知っているのに、わざわざ私の答えさせるんですか？」

そのまま冷めてしまったお茶を啜り、あまりの不味さに入れなおしてもらおうようお願いする。

「とぼけるのもいい加減にしておらおうか？」

対するレグナは私のそんな態度に業を煮やして、今度はテーブルを叩いて私に詰め寄る。

そのまま鬼の形相で息がかかるほどの距離で私を下から上に睨み付けた。

（まるで取り調べみたい）

だけど、それに負けたくなくて、私は平然としたままその目を見つめ返す。

「腹の探り合いは面倒だからやめにしようぜ？オルロック・ファシズ軍、情報部アイルフィード・ファシズ少尉。軍人だってネタは上がってるんだ。あんたの警備が嚴重なんじゃない、警備は軍人であるあんたが変な行動をしないか監視するためのものなんだよ。」

告げられた言葉は真実。

確かに私はこちらに嫁ぐまで、オルロック・ファシズ軍に在籍する軍人であった。

『王妃』になると自分で決めた時、その言葉があまりに自分に縁遠くて、その言葉が自分を表すものになる実感は微塵もなかった。

だけど、それは『王妃』なんてお伽噺の中に出てくるような甘い幻想ではなく、厳しい現実を伴って私に突きつけられた。

それは【アイルフィーダ】という個の喪失。

誰も私を【アイルフィーダ】ではなく、オルロック・ファシズの人間で、お飾りの王妃：ただそれだけの存在としか認識していない。そして、気が付けばそれを受け入れている自分がいた。

【アイルフィーダ】ではなく王妃として、ここで生きようとしている愚かな自分。

王妃としても打ちのめされて、最後にはランスロット相手に八つ当たりしてしまうような可哀想な自分。

——だからかもしれない

私はレグナからオルロック・ファシズ軍情報部【アイルフィーダ・ファシズ少尉】と呼ばれた瞬間に、何だか目が覚めるような思いがした。

（そっか、私、アイルフィーダのままでいいんだ）

18歳になって学校を卒業後、色々理由があって私は軍へと入隊。結果、三等兵から始まって意外と出世を果たし、入隊後6年目に少尉になった。

まさか、それから一年も経たないうちに結婚するために除隊する羽目になるとは思っていなかったけど。



そういった自分の経歴を別に取り立てて隠していたつもりはない。まあ、自分からそれについて話したことはないし、釣書のようなものを用意したことも無い（それについては自治議会で勝手に用意していたかも知れど）。だけど調べればすぐに分かる。

少なくともこんな風に取調べみたいになれずとも、聞かれれば素直に答えていただろう。

そもそも後宮に入った直後、ほぼ軟禁状態にされて私は、レグナが告げたように、元軍人だから監視されているんだろうと理解していた。

ちよつとばかり厚遇されているのは気になったけど、気楽な捕虜くらいの感覚だったのだ。

だけど、その認識は時を追うごとに改められた。

何しろ監視という面において、後宮の警備はあまりにお粗末としか言いようがないのだ。

今回、私があっさり後宮から出られたことにしても分かるように、私に対して過保護な一面を見せつつもそれに強制力はなく、更にランスロットという身内かもしれないけれど侵入者まで許している。

更に軍人の性で色々後宮からの脱出ルートをシミュレートしてみると、案外あっさりと成功しそうで……決して良からぬことを考えた訳じゃないけれど、私がここから逃げ出したり、スパイみたいなことをすることは多分、この警備の中では難しいことではないように思えた。

だから、元軍人だと知られていないと考えた私だけど、それを確かめなかったのがいけなかったんだろうか？

それならば……と、多分私はより一層『王妃』らしくありたいと思ってしまった。

元軍人という、どうみてもマイナスイメージがないなら、もしかしたら『王妃』として認めてもらえるんじゃないかと淡い期待を抱いたんだ。

（無駄な猫を被っていたってことか）

そのために私は私らしさを捨てたというのに、実は知っていたって：『こいつ（私）、元軍人のくせに大人しいふりしているの？』くらい思われていた訳？？…そう思って脱力して何が悪い。

ばれているなら、これ以上暑苦しい猫を被っている理由もない。こうなったらヤケクソだ！私はさっさと無意識で被っていた猫を呆気なく掘り投げた。

途端に気持ちが悪くなったような、視界がクリアになったような気がして、自分の単純さに呆れる反面、本当の意味でレグナと対決姿勢を強めた。

かくして私は視界一杯を覆い尽くすレグナに笑いかける。

「レグナ様、近いです。離れてくださいませんか？」

ランスロットと対した攻撃的な声とは違う落ち着いた声。

だけど、【アイルフィード】としての自信を取り戻した私の声には、レグナに負けない強さがあった。

レグナが目を見張るのが、すぐ近くだったので良く見えた。

「そんなに近づかれると逆に話しづらいです。そんなに近くで見張って頂かなくても、私は逃げも隠れも致しませんよ。」

「そんなつもりはねーよ。」

吐き捨てているように言いながら、身を乗り出していたレグナが椅子に乱暴に座る。

息を詰めていた侍女たちが、ほうつと息を吐き出す気配にちらりと振り返ると、彼女たちは慌てて背筋を伸ばす。

それを見てニヤリと笑うと、これまでの【好かれる王妃】を目指

していた私なら、それを見て見ぬふりをしていたからだろう、侍女たちも一瞬呆気にとられたような顔をする。

（驚くのはこれからよ）

「ありがとうございます。さて、それで何がお聞きになりたいんですか？ いえ、初めは私が質問したのではなかったですか？」

「黙れ。」

茶化した言い方にレグナが低い声を更に低くする。

だけれど、それに眉一つ動かさずに笑顔を湛える：うんうん、これが本来の私。

「一般人ならともかくオルロック・ファシズの軍人だったあんたが、どうして世界王妃になった？ 何が目的だ？ 正直に話せ。」

目の前のレグナには先ほどまでの適當さも、だらしなさも無く、間違いなく歴戦の騎士の氣迫がある。

研ぎ澄まされた鋭く、重いプレッシャーともいえる氣配に、私は更に昔の感覺を鮮明にさせていく。

「例えば私に何か目的があったとして、軍人の端くれを名乗っていたのなら、それを簡単に話すとも思っているんですか？ 入隊した時、しっかり誓約書を書かされているんですよ。『汝、軍内部の機密を漏えいせしめた時は、重罪に処す』って。しっかり母印まで押させられましたよ。」

もっとも、レディール・ファシズに嫁いしまったため、その効力があるかと問われれば難しい所だけれど、軍人だった以上、軍や国の機密事項を守り通す義務が私にはある。

「あくまでもしらばつくれる気か？」

「今の聞いていませんでした？『例えば』と私は申しました。軍人としての私に目的なんてありません。それに誰も期待していません。」

あるのは私『個人』の目的だけ。

それも他愛無く、醜い私からフリーへの恋情…それが大半を占めている、絶対に誰にも言えない目的だけ。

「そんな事、信じられるか。」

まあ、そうだろう。だけど、だからってこんな私の感傷をレグナに告げるつもりはない。というか言いたくない。

「そうは言われますけど、大体、私はそちらから望まれて嫁いできたつもりですよ？望んだでしょう？オルロック・ファシズ自治議長の縁者を王妃にと。」

「縁者だと？結婚前に養子縁組しただけじゃないか。」

皮肉に歪む唇が告げた事実、これまた真実。

自治議長の娘として嫁いだ私だけど、彼と血は一滴も繋がっていない。

「あら、ちゃんと調べていらっしやるじゃないですか。知っていて娶ったなら、それは私が悪いんじゃない、それを了承した貴方たちが悪いのではないですか？王妃候補は他にもたくさんいたはずですよ。その中には本当に自治議長の血縁者で、普通の女性だったかもしれません。それを選ばずに私を選んだのは——」

「フリーだ。」

（まあ、実際には私が【選ばせた】んだけど）

苦々しく私の言葉をひったくるようにレグナが告げた名前に、私もそつと自嘲する。

本当はレグナが思うように、私は望まれて世界王妃になった訳ではなく、フィリーの中にある罪悪感を利用して、そうなるよう仕向けた。

それが卑怯で狡猾な所業だと分かっているけど、私はその方法を選んだ。

だけど、それはフィリーと私しか知りえない、そして私たちの間にあるたった一つの契約であり絆。

「では、貴方がそれを私に言うのは筋違いだとお分かり頂きますよね？」

「それでもフィリーを、王族を守るのが俺の役目だ。憎まれ役でも、何でもやってやる！！」

先ほどのまでの適当でだらしないのは、あくまでフリだけらしい。私ののりくらりとした対応に、フィリーを守るために彼が本気で憤っているのが分かる。

情報部とはいえ私の担当はレディール・ファシズではなかったの、レグナの人となりまでは分からないけど、いい部下に恵まれているらしいフィリーに少しだけほっとした。

「では、どうしますか？王妃ではなく捕虜として私を扱って拷問でモしますか？構いませんよ…ですが、そうなった時点で私にも考えがありますけど。」

「アイルフィード様！！」

私の挑発にルッティが悲鳴のような声を上げ、レグナが眉毛を片方だけ器用にあげる。

ぐっと握られた拳が振るえ、彼はそれをテーブルに叩きつける。テーブルが一瞬浮き上がるほどの衝撃に、食器がけたたましく音を立て、お茶が零れた。

「んなもん、できるもんならやってるさ！俺だけじゃない、重臣たちだってこれだけは意見が珍しく俺と同じだ。情報部だったあんたは、万が一にも目的がないとしても、オルロック・ファシズの重要情報を持っているはずだからな。だが、フィリーが首を縦に振らねえ。」

その言葉には表情には出さないけど、私が驚いた。

契約は私を世界王妃にするというものだっただけで、その後には捕虜にするという範囲にまでは及んでいなかった。

だからこそ、私は現在の待遇に戸惑っている所がある。

「せめて監視を付けさせろと言っても、あんたに悟られるなど無理な難題を押しつける！それに後宮内部に男を入れるなどぞ？そんな中、どうやってあんたを監視できるんだ！！そのくせ今回の騒動でネチネチと嫌味を言いやがって。」

穴ばかりだと思っていた警備については、レグナとしても物申したいらしい。

だけど、それよりも――

「ふいゝいえ、陛下がそんな事を？」

フィリーだって私の経歴を知っているというのであれば、捕虜にしないにしても監視の一つや二つ付けようとしてもおかしくないは

ずだ。

「しらばっくれるんじゃないよ。フィリーがあんたに惚れ込んでるのは、一目瞭然。知らねーのは、可哀そうな巫女の嬢ちゃんくらいか？アイツも全く罪な野郎だ。おかげで周りの俺たちがどれだけ苦々しく思っている事か。」

「……………」

その言葉には咄嗟に声が出なくなった私である。  
どうやら、レグナはとんでもない勘違いをしているらしい。

（フィリーが私に惚れ込んでいる？）

一瞬、違う言語を聞いているのかと思う程、意味が理解できなかった。

だけど、その一方で私とフィリーの契約を知らなのであれば、それも致し方ないのかと思に至る。

そして、同時にフィリーが私にそんなことまで気を遣ってしまうほど罪悪感を感じている事を思い知る。

そうなるように契約を仕向けたのは私だけど、今更にそれが苦くて、辛くて、自分で自分を笑うしかない。

彼にとって私は罪悪感の塊だ。

それについてフィリーだけが悪いわけじゃない。だけど、フィリーさえいなければ、私はあれほど傷つかなくても、苦しまなくても、悲しまなくても良かった。

彼もそれを理解している。

だからこそ、彼は私を世界王妃にしたんだ。

だからこそ、彼は私に気を遣う。

だからこそ、愛してもいない私に愛を囁く。

きっと、これまで可哀そうな私に彼は私の知らない所でいくつも  
気を遣ったんだろう。

それが、レグナにフィリーが私に惚れこんでいると思わせた。

——本当はただ憐れんでいただけなのに

沈む思考に伴って、落ちる視線。

時は経ち夕日は燃えるように赤くなり、白磁のカップは同じ色に  
染まり、その中に笑いも泣きもできない、あまりにみつともない顔  
をしている自分がいる。

「さっきも見ただろう？ アイ——」

もはやレグナの言葉を右から左に聞き流しつつ、自分のそんな感  
情を整理しようとしていると、テーブルの上が不意に陰った。

——ガシャンッ

先程、レグナがテーブルをたたいた時より、はるかに大きくて激  
しい音が、静かな後宮に響く。

咄嗟にテーブルから離れていた私は、その音源に目を細める。

レグナも同様に音とともに、もはや原形を留めていない煙を上げ  
て半分溶けているテーブルから離れている。

「キャー!!」

甲高い侍女の悲鳴がいくつも上がる中で、ルツティが私を守ろう  
として近寄ってくるのを制した。

彼女に何かあってはいけない。

私は行儀悪くもテーブルの上に仁王立ちになる人影を睨みつけた。



#### 4-4 (後書き)

アイルフィードは普通の一般市民でしたが、オルロック・ファシズの最高行政機関＜自治議会＞議長という、総理大臣とか大統領のような人の娘として嫁いでます。というか、嫁ぐためにその人と養子縁組をした訳です。

## 4-5 (前書き)

戦闘描写があります。また、残酷な描写もありますので、苦手な方は避けてください。

侍女たちの悲鳴に警備兵が十数人近く集まり、突如として現れた侵入者を取り囲む。

静かな後宮が俄かに物々しくなる様子に、私の背後に隠れるようにしている侍女たちからはすすり泣きも聞こえてくる。

そんな中、ルッティだけはその場から動かない私の横から離れようとしなない。

「王妃、お逃げください。」

私を守るように立つ兵がそう告げる。

だけれど、私はその肩越しにこちらを睨み付ける侵入者から視線を逸らせずにいた。

侵入者は背が高く痩身の若い男。顔も隠すことなく堂々と晒しているが、年齢は若くも見れば、老けても見える。一見してどのくらいの年齢か判断が付かない。

その右手には長く太い大剣が握られ、シューシューと煙を上げており、その重みのためか男は大きく右に傾いて立っている。

ぴったりと体に張り付くような光沢のある素材の服を着ていて、痩せすぎの体を更に細く見せるように全身を黒で固めている。しかし、その黒い服には全体的に文字が書かれていて、白い光が浮き上がっているように見えた。

こちらを睨み付ける瞳は夕日の中のためか赤く光って見える気がしたけれど色は黒、髪も黒い。しかし、散髪など長い間していないらしく、伸びたい放題の髪は痩せこけた侵入者の顔を鬱蒼と覆っている。

ちなみにこの男に私は一切見覚えなどない。

だけれど、まるでこちらを射殺さんばかりの形相は私に用があると告げていた。

（私が動いたら、攻撃してくる）

それは確信だった。

テーブルへの一撃以降、私を睨み付けたまま微動だにしない侵入者ではあるが、その視線は私の呼吸、視線の動き一つを確実に追っている。

私を攻撃したいのならば、襲ってきた勢いのまま攻勢を仕掛けるのが定石だろうけれど、この侵入者はそれをせずに動きを止めた。だけれど、私がこの場から離れることも許そうしない。

（私、一人だったら逃げるのは難しくないんだろうけど）

思いながら視線だけ少し横に動かして、ルッティや背後で固まっている侍女たちを窺う。

強張った顔をするルッティはまだ気丈にしている方だけれど、他の侍女たちは駄目だ。腰を抜かしたように放心している彼女たちをここから退避させるにも、今は警備兵たちも侵入者を取り囲むだけの人数しか到着していないから無理だろう。

かといって、この状況で私が逃げると仮定して、侵入者が攻撃を仕掛けてきた時、彼女たちを巻き込む可能性は高い。

視線を侵入者に戻せば、長い前髪の奥から覗く瞳が、私と同じように侍女たちに向けられ、だらりと下げられた右腕の先に握られている大剣が僅かに動くが、私が動く様子をみせないためか、大剣もそれ以上の動きはない。

レグナや警備兵が取り囲んでいる現状として不安に思う要素は少ないのかもしれないけれど、その状況下においても眉一つ動かさない侵入者の不気味さが、私が逃げだすことを躊躇わせていた。

さほど待たない間に増援が来て、侵入者は捕まるだろうことは予想できる。

だけど、城の中でこんな凶行に及んでおいて、兵に取り囲まれる状況を予想できない訳もなく……それともそれも分からないほどの異常者による犯行なの？

相手が要求ひとつ発しないので、憶測だけが私の中で膨れ上がる……なんにしても、侵入者の目的を知る必要があるだろう。

「私に何か御用ですか？」

「挑発するな。」

一応は私を守るつもりでいるらしいレグナが、侵入者を挟んで反対側で首を横に振るが、私は構わなかった。

彼も侵入者の不気味さに警戒して、武器を構える様子もない相手に、何もするなと警備兵を制止していた。

「大丈夫ですよ。私に何かするつもりなら、既にやっているはずですよ。何か目的があるんでしょう？」

するとそれまで全く動く気配のない侵入者が一步前に出る。

周りを囲む兵たちは、完全に侵入者に飲まれていて彼に伴って一歩動く。

「警告だ。」

発せられた声は私が想像していた声よりはるかに若い。もしかしたら十代半ばの少年くらいかもしれない。

しかし、その声には感情という気配がなく、何を考えているのか全く分からず、私はより一層相手に警戒を強めた。

「オルロック・ファシズの王妃よ。命が惜しくば、この場所から早く立ち去れ。」

言いながら重そうな剣を易々と持ち上げて、私の方へと突き付ける。

それに警備兵たちが殺気立つ。

レグナがそれを制止しようとするが、間に合わず一人の警備兵が槍を構えた。

「大人しくしろ!!」

それをきっかけに警備兵が次々に侵入者を取り押さえようと動き出す：が、彼らは呆気なく吹っ飛んで地面に叩きつけられた。同時に上がる絶叫。

「あついいいいい！」

何が起こったか、警備兵たちが壁になってよく分からなかったけれど、僅かな爆発音のようなものが聞こえた後、彼らは侵入者を中心に吹っ飛ばされ、同時に炎に包まれた。

地面にのた打ち回り、苦しむ兵の姿にルッティは息をのみ、侍女たちが再び悲鳴を上げる。残った警備兵たちも驚いて言葉もない様子だ。

幸い火の勢いはなくすぐに消えて、黒い煙を纏った警備兵たちが自力ですぐそばにあった噴水に飛び込むのを横目で確認しつつ、私は再び口を開く。

「それは私が世界王の妃としては相応しくないから：という事でしょうか？」

『警告』、『命が惜しくば』というからには、この場では私に危害を加えるつもりがないということなんだろうが、それにしても少々パフォーマン스가過ぎるだろう。

私個人に敵意があるだけにしては、警備兵が来る前に私をどうにかする時間があつたのに何もしないのは変だ。

「違う。貴様など、我らの眼中にはない。」

「わざわざこんな場所まで警告しに来てくださったのに、つれない言葉ですね。」

軽口を返しつつも、内心では侵入者の言葉に混乱していた。全く彼の目的が見えてこない。

それはレグナも同じようで、盛大に眉間に皺が寄っている。

「これから起こる争いに、無関係な者を巻き込むことは我らの主義に反する。貴様はオルロック・ファシズの人間：これから起こる戦いに何一つ関係ない人間だからな。」

オルロック・ファシズの私は無関係：ということとは、単純に考えてレディール・ファシズの人間は関係があるという事？

だから、警備兵を丸焦げにしておいて、私を巻き込みたくないなんて訳の分からない論理が彼の中で成り立っているの？

「【我ら】とは一体何なのでしょう？貴方は何と戦うつもりなのです？」

苛立ちが声に出ないように、極力声を抑える。

警備兵に取り立てて思い入れもないけれど、目の前で傷つけられて何も感じないほど、私は鬼じゃない。

それにしても侵入者が何を抛り所にして意思を決定しているか、

私を持つ情報では推測が不可能だ。

本当に『警告』だけが目的で警備が嚴重な後宮まで単独で侵入して、この凶行に及んでいるとしたら、よほど自分の力に自信があるのか、頭の螺子がぶっ飛んだ異常者とししか考えられない。

「我らはく神を天に戴く者。我らが敵は教会、そして世界王。」

言いながらゆらりと侵入者の体が左右に揺れる。

「それに関わるものを悉く討ち果たし、神を天へと開放し、真の自由を得るために我らは戦う。オルロック・ファシズの王妃よ、我が問いに返答無きはすなわちこの場から去らぬという意味にとる。それはすなわち、貴様が世界王の関係者という事実!!」

言葉が後になればなるほど大きくなり、言い切った途端にそれまでのゆっくりとした動きが急に俊敏となり、剣が私に向かって突きつけられた。かと思った次の瞬間に、カッと赤く光る。

それが何かは分からないが、嫌な予感がしまくりで私は咄嗟にルッティを押しつけて、私も反対側に跳んだ。

その際も外さなかった視線の先で、光が線となり、その上を炎が素早く走るのが見えた。そして、次の瞬間、爆音と焦げ臭い匂い。

「警告が受け入れられぬ時は、王妃を始末しろと言われている。精々、愚かな自分を恨め! 公衆の面前で灼熱の業火に焼かれて死ね! のた打ち回れええ」

(何が警告よ! 最初っから、私を殺す気満々なんじゃない!)

すぐに振り返った先には座り込んだ侍女たちの真横の後宮の壁が、跡形もなく吹っ飛んでいるという光景。

彼女たちは顔中を涙で濡らして美しい顔が台無しだけれど、煤で



黒くなっている以外には怪我をしている様子もない。

それにほっとしつつも、また強い西日より赤い光を感じて私は全力で駆け出した。

「アイルフィーダ様ああ！」

ルツティの悲鳴が、爆音で遠くにしか聞こえない。だが、その悲鳴にも構っている余裕はない。

どうやら、侵入者の目的は確かに私を殺すことらしい。

兵が来るまで待ったのは、『公衆の面前で』という言葉から推測するに、私を襲う舞台に観客が欲しかったということだろう。

加えてその前のややこしい前座じみた警告は、恐らく彼の所属する集まりにおける決まり事で、世界王や教会の関係者でなければ危害を加えられず、それを確認するというプロセスが必要だったと思われる。

それが解消された今ではこちらに向ける瞳には私に対する殺意しか宿っていない。感情が宿っていないと思われた生気を失った顔には、狂気に取りつかれた悦楽の表情が浮かんでいた。

「ふはははははっ」

（ちよっと、温度差ありすぎでしょ！！）

さっきまでの慇懃無礼までのローテンションはどうした！と、私は走りにくいヒールで後宮の庭を駆ける。こんな時に限って、リリナカナイに会うために普段よりも高いヒールなのが恨めしい。

ともかく建物に被害があっても、人的被害だけは避けなくてはと思っではいるが、後宮の庭と言っても広さはそこまで大きくない。

逃げる場所に限られ、どこから建物の中に入ったほうが良いかと、ちらりとこちらを追いながら大剣を振り回して炎をぶつけまくる侵入者を振り返った途端、再び光が迸り、それを遮るように人影

が立ちはだかるのが見えた。

「レグナ！」

人影に思わず敬称もすつ飛ばして名前を叫んだ。

いくら頑丈そうな御仁でも、後宮の壁を跡形もなく吹っ飛ばすほどの炎を受け止められるはずもない。

名を呼ぶ以外に瞬間的にできることがある訳でもなく、無情に爆音が響き、レグナが炎と黒煙に包まれた。

「？」

しかし、炎も黒煙も一瞬で消え去り、変わって青い光が一瞬だけ瞬いたかと思えば、火傷一つ負った様子もないレグナが現れた。

彼はこちらを振り向くと、にやりと不敵な笑みを浮かべて告げる。

「言っただろう？ あんたを守るのも仕事だって…まあ、とりあえずだな。」

言いながら無骨な彼には似合わない細身の鋭い剣を二本両手に構えて、侵入者と対峙する姿が少しだけ頼もしく思えた。

「この近衛騎士団長の目の前で王妃様を殺そうなんざあ、いい度胸してるじゃねえか、くそ餓鬼。」

両手の細身の剣、恐らくレイピアだろう、を手中で器用にぐるぐる回しながら、どうみても騎士の物言いじゃない恫喝を吐くレグナ。

剣は全体が青白く光っていて、夕日が沈みかけて暗くなりかけた庭の中で幻想的な雰囲気すら漂わせている。

レグナの登場に攻撃の手を止めた侵入者は、それでもその前髪に隠れた表情を焦りに歪めることもなく、にやりと気持ち悪く笑う。

「近衛騎士団長レグナ・オレ……神を冒瀆する怪物か。」

「言ってる。お前らみてえな、違法魔導師の方が余程神を冒瀆してる。」

「……貴様も何も知らぬ愚か者か。まあ、いい。」

私を殺そうとした時の激しさはあっという間に消え去り、勝手に自己完結しながら侵入者は大剣を振り上げる。同時にこれまで以上に禍々しい赤い光が当たりを包む。

それに対抗するようにレグナが剣を構え、侵入者へと突っ込んだ。

「何をする気だ!!」

「言っただろう？今日はあくまで警告だからな、これで失礼させてもらう。本番はまた後日。その時は必ず命を貰い受けよう、世界王妃。」

侵入者は私にそう告げながら大剣を振り下ろし、レグナがそれを

二本の剣で受け止めた…瞬間、赤と青の光がスパークして目もくらむ光が満ちた。

光はすぐに消えたが、音を立てて発生した熱い水蒸気のような白い霧に視界がほとんど効かなくなった。

「逃げるな!!」

近くでレグナの怒鳴る声が聞こえても、彼の姿はどこにも見えず、私は闇雲には動きは無なかったが忙しく辺りを見回す。

しかし、侵入者の気配は何処にも感じられない……どうやら侵入者は言葉通り警告だけして逃げたようだ。

（＜神を天に戴く者＞…か。教会を敵とする＜名もなき十字軍＞とはまた別なの？世界王…フィリーを敵だといったけど、どうして私を標的にしたの？）

王妃と言えど政略的な意味合いが強いことは百も承知だろう。その政略的な繋がりが、彼らには邪魔だということだろうか？

憶測は色々浮かぶけれど、混乱し疲れた頭ではいまいち考えが纏まらない。

何だかとても遠い出来事のような気もするけれど、リリナカナイと対峙した時のダメージも蓄積されて限界なんてとうに昔に越えている。

私は額に手を当てて溜息をつく。本当に疲れた。

「おい、大丈夫か!？」

霧はすぐ晴れて、すっかり辺りが暗くなっている中、レグナがぐったりした私を心配そうに覗き込む。

先程までは私を親の仇のように睨み付けていたけど、今はまるで

しよげた犬のように、妙に愛嬌のある顔をしていた。

「今回のことは完全に俺の失態だ。すぐに助ければ良かったのに、あんたに対する懷疑心がそれを僅かだが躊躇させた。騎士として決して許されることじゃねえ。」

律儀なもので、そういつて私に大きく頭を下げるレグナ。だけど、私は言葉を返さずに周辺に目を走らせた。

侵入者の攻撃によって壊された後宮、抉られた美しい庭、傷ついた兵士、放心した侍女：そして、応援の部隊が今となっては遅くなつたがやってきて救護が始まっている。

昼までは変化のないただ美しくて穏やかだった世界が、音を立てて崩れ果てた姿に私は何ともいえない気分になる。

（私は確かに変化を望んでいた：だけど）

刺激のない毎日、誰にも相手にされない日常、そんな穏やかに死に絶えるような毎日を辛いと感じていたのは嘘じゃない。何か刺激が欲しいとも望んだ。

だけど、こんな変化は絶対に望まない。

「怪我人の容態は？」

「あ？ ああ、部下達が食らった攻撃は派手だったが、軽い火傷くらいだ。後宮の侍女達もほとんど無傷だ。むしろ、今回一番の被害者はあんただよ。」

言われて改めて自分を見下ろしてみると、庭を転げまわったり、全力疾走したりで、足からヒールは脱げていて傷だらけだし、綺麗なドレスも汚れたり破れたりしている。これじゃあ王妃の威厳もないだろう。（まあ、元々ないのかもしれないけれど）

「私も掠り傷程度です。それより人的被害が最小限に抑えられて良かった。レグナ近衛騎士団長：貴方のおかげです。礼を言います。」

「んな：やめてくれ！！あんたに懐疑心を抱いていたとはいえ、俺は王からあんたの警備を頼まれていた！あんたを守るのが仕事だったんだ。それを侵入者に入りこまれた上に、あんたに怪我をさせたなんて：俺の首が吹っ飛んでもおかしくない。」

まあ、そうだろうと思う。

後宮に侵入者を許しただけでも警備を任されていた近衛騎士団の責任を問わなくてはいけないだろう上に、王妃である私が命を狙われていたというのに、この騎士団長殿はそれを僅かな時間だろうが助けに入らず黙って見ていたのだ。

これで私が普通の王妃だったとしたら、彼が言うように首が吹っ飛んでも文句は言えないだろう。

「それでも貴方が遅くても助けに入ってくれたから、私も掠り傷程度で済みました。まあ、私が挑発したのも悪かったかもしれませんが：だから、助けてくれたことには素直にお礼を言わせてください。ありがとうございます。ですが、心配しなくても別に貴方の職務怠慢を許したとは言ってませんよ。」

「あんたに許されずとも、今日の事はフィリーに報告して、しかるべき処分を受ける。」

私の上からな物言いに気分を害したのか、むっとした顔をするレグナ。

「そのしかるべき処分とやらで、近衛騎士団長を勝手に辞められたら困るんです。」

「何?！」

彼にどんな処分が下されるかは分からない。

王妃を危険に晒した以上、重罰が下るだろうと思うけれど、私はここでは規格外な王妃であるし、レグナ自身はかなり特殊な立場にある騎士のようだ。

案外、大した罪を受けないのかもしれないけれど、彼自体は私に申し訳ないと思っているらしいから、この際それに付け入らせてもらおう。

私は疲れた心と体に鞭打って、レグナに対した。もうひと踏ん張りである。

「貴方が近衛騎士団長をやめたら、誰が私をあつ侵入者から守ってくれるんですか？今の侵入者は私をまた狙うと言っていました。当たり前ですが、私にはこの城の中に頼りにできる人なんて誰もいません。誰が強いのか、弱いのか、私を嫌っているのか、疑っているのか、それすらも分からない。だけれど、今あなたの實力は十分に見せていただきました。貴方が私をどう思っているのかも、大体把握できました。私を守るのに貴方ほどの適任は他にはいないんです。」

私は背筋を伸ばし、胸を張って、精々王妃らしく偉ぶってみる。

「近衛騎士団長レグナ・オレ、貴方には私の護衛を命じます。そして、必ずや私の命を狙い、ましてや陛下に弓引く輩を捕まえなさい。」

こちらを遠巻きに見ていた兵や侍女たちが、何事かと聞き耳を立てているのが分かる。

それを意識しながら、私は力強く告げた。

この城で私がほとんど身動きが取れない以上、自分の身を守るた

め、この場所で生きていくためには、私の手となり足となる駒が必要だ。それも量是用意できないから、少なくて質のいい駒。

「あんたに命令される筋合いは――」

「貴方、こんなことで陛下の傍を離れることになってもいいの？」

私の言葉にかつとなったレグナに、他には聞こえないよう囁く。  
悪役になっても構わない。レグナを私の駒にするために、手段は選べないと思った。

「貴方と陛下の関係は分からないけど、貴方は陛下を守りたいんでしょう？それは近衛騎士団長という職を失ってできることなの？」

気安い言葉をかけあう二人に絆を見た。

レグナとのやりとりで、彼のフィリーへの強い想いを見た。  
多分、フィリーにとってレグナは重要な人物だ。そして、レグナにとってもフィリーは大切な主であろうと想像がついた。

「そ・れは……」

予想通り、レグナがの表情に躊躇いが現れた。ここで畳み掛ける。

「だったら、ここは私のいう事に従った方が利巧よ。今回の事、オルロック・ファシズに知られたら、どうなるか分かるでしょう？例えば私が即席の自治議長の娘であっても、それを蔑にされたと聞けば、あちらも対面がある以上、約束していた支援は見送るかもしれない。」

私とフィリーの結婚は、対外的には両陣営の歩み寄りが大きくあるとされているが、実際のところは長い内乱で疲弊しつつある教会



が欲した、オルロック・ファシズの支援が目的なのは明白であった。オルロック・ファシズを認めなという割には、利用できるものは何でも利用しようとする狡猾な教会の思惑ではあったが、実際国民生活が破綻する一歩手前まで状況は悪化の一途を辿っていた。

オルロック・ファシズは継続的に教会を通して支援を続ける代わりに、レディール・ファシズの技術とこちらに駐在員を置くこと、そして、私を嫁がせることを認めさせた。

はつきりいって、自治議長と血縁関係のない私に人質としての価値を故郷は微塵も見出しではないだろうけど、体面というものを鑑みればオルロック・ファシズが私に何かされて、放っておくとは考えられない。

「こちらの上層部は今回のことを隠そうとするでしょうが：私は元軍人ですよ？それを自分で伝える方法なんて五万とありますよ。そうになったら：貴方、どうするおつもりですか？あなたの首一つでそれは贖える？」

十中八九、脅迫でしかない言葉を多分私は人の悪い顔で吐き出しているんだと思う。

だけど、既に悪意の目で見られているんだから、今更いい子ぶって色々我慢するのも飽きた。

「：本当にフィリーの話と全然違うのな。だけど、うちのお偉方から俺の罷免の話が出たらどうする？」

そんな私に意外にもレグナは笑いかける。：まあ、その笑顔に覇気はなく、疲れて草臥れたような笑みだったけど。

「そんなの今と同じように、今度は貴方を罷免するならオルロック・ファシズに言い付けるっていうだけです。どうですか？貴方にとっ

ては悪い話じゃないと思いますけど？」

「了解！分かったよ、王妃様：なんつーかあんたは王妃っていうより女王様の方が似合っているぞ？」

最後は降参というよう両手を上げてレグナが叫んだ。それに、「よし！」という気分になった私だけど、最後の言葉は聞き捨てならない。

「誤解を招くような発言は慎んでください。誰が女王様なものですか、私は普通です。ふ・つ・う。」

小声でそんな風にレグナと言葉を交わしていると、ルッティがこちらに小走りで近寄ってくるのが見えた。

「ともかく今日は疲れました。これ以上の話は明日にしましょう。是非、＜神を天に戴く者＞の話を伺いたいです。」  
「了解した。」

疲れたのはレグナも同じらしい、私の言葉に素直に頷くと、部下たちの所に足を向ける。

入れ替わりにルッティが私の前に到着した。

「アイルフィーダ様、大丈夫ですか？動けるようでしたら、人が多く集まっています。すぐに部屋へ、着替えを用意いたします。」

「ありがとうございます、レグナ様？」

確かにこの格好で沢山の兵などに姿を見られるのは避けたい。

ルッティに礼を言いながら、私はこちらに背を向けるレグナに声をかけた。それに億劫そうに返事をするレグナ。

「今夜は後宮に詰めてくださいますよね？それとも私は別の場所で寝た方がいいんでしょうか？ああ…また、あの侵入者が来るかと思うと怖くて！」

いいながら大げさかなと思いつつも、よろりとよろけたふりをしてルッティにもたれ掛かった。

「くくくかしこまりました！王妃を後宮から出すわけには参りませんので、不詳私が今夜は警護に当たらせていただきます！！！」

それを聞きながら見えないようにぺろりと舌を出して、その後、にこりと彼に笑って見えた。

「本当ですか！ありがとうございます！！では、また明日、なるべく早い時間に今日の報告を聞きたいので、その時にお会いしましょう！」

「なっ！早朝！？おい、待て！！！」

追ってくる声には振り返らずに、ルッティとともに自室に引っ込む。

レグナは恐らく今夜は後宮の警備で寝ずの番だろう。にもかかわらず、早朝に報告しろというのは、明らかな嫌がらせだ。

（悪役やるなら徹底的に…よね）

久々に帰ったような気分になる自室は、後宮でも奥まった部分にあつたためか、被害の気配一つない。

それに安堵しつつ、私はルッティが用意しておいてくれた風呂に入ることにした。多分、私が事後処理に付き合わされることはないだろうと思つたし、正直、やれと言われてもやりたくない。

「ふいふい」

温かいお湯に浸かった瞬間に、体中の凝りが解れていく快感に腑抜けた声が出るけど、今はそれを咎める人は誰もいない。

大人が10人くらいは足を延ばして入る事ができる、大浴場と言つていい豪華な浴室が自室に併設されている時にはビビったものだ。更にお世話をさせて頂きますと侍女たちが一緒に入ってきて、一層驚いた。

お風呂くらい一人でのんびり浸からせて欲しいと、泣きそうになりながら頼み込んだ結果、勝ち得た一人の入浴は私の数少ないリラックスタイムだ。

「ほんつとに今日は散々だった……」

だから、こんな独り言だつて存分に呟ける。

私は大きく息を吐きながら、縁に凭れ掛かつて天井を見上げる。

宗教画だろう神々しいステンドグラスが描かれているが、その輝きも今日は目に入らない。

私のさしあたっての問題は、明日のレグナからの報告よりも、ルッティが今日のことをどう思っているか……という事。彼女が今後、どう出てくるかが重要事項だった。

今日はもう何も考えたくないというのが正直なところだけれど、これだけは早急に手を打たないと手遅れになる問題だ。

侍女という役職の女性はこの王宮に数多くいても、オルロック・ファシズの王妃に仕えてくれる侍女が果たしてどれくらいいてくれるのか。

いや、彼女たちも仕事だから、やれと言われればやるんだろう。さりとて、ルッティの仕事は私から言えばほぼパーフェクトに近い仕事をしてくれている。

今にしたって、疲れている私が一番求めている入浴を勧めてくれた上に、用意してくれた着替えは寝間着。

それを着るには早い時間帯だけれど、彼女は迷わずにそれを用意してくれた。私が疲れていると察しての行動を、果たしてやつつけ仕事の侍女がしてくれるだろうか？

ルッティが私のことをどう思っているかは分からない。だけど、現状、ルッティ以上に私に仕えてくれる侍女がすんなり現れるとは到底思えない。

（あー、やっぱりルッティに嫌われるのは困るわあ）

湯船に浸かっているせいか、どうにも言葉に深刻さが足りない気もするが、私の悩みは案外深い。

自分でも反省しているんだけど、今日は自分でも我慢が足りなかった。……いや、今までが我慢のしすぎだったのかもしれないけれど、どちらにしても今日の私はこれまでの私と大きく違いすぎた。ルッティがその事をどう思うか？ やっぱり、オルロック・ファシズの王妃は怖いと私を倦厭するだろうか？ 私の侍女をやめたいと思っっているだろうか？

私としてはこのまま続けて欲しいというのが願い。

だけど、ルッティにそれを強要することは難しいだろう。

レグナのように脅迫まがいなことはしたくない。それをしてルッティに留まってもらっても、それでは彼女じゃない他の侍女に代わってもらっても大して変わらないに違いない。

できることなら、今まで以上に彼女に働いてもらいたかった。…だけど、それをお願いするための言葉が見つからない。

（ええい！もう面倒臭い！！）

疲れた頭では何も思いつかず、私は勢いのまま湯船から出ると寝間着に着替えて浴室を出た。

すると件の侍女が私をいつも通り完璧な所作で迎え入れる。

「アイルフィーダ様。ご夕食は本日は如何いたしますか？」

「あ…うん。今日はもういいや。このままもう休むよ。」

そう私に対するルッティの様子は、いつもと変わらない…ように見える。

むしろ、私の方が微妙にびくついている気がする。

「畏まりました。今夜からしばらくは今までの倍の人数の警備兵が後宮の警備に当たります。私もしくは後宮内にお部屋を頂くこととなりました。何かありましたら何でもお申し付けください。」

その言葉に引っかかる。

「後宮の兵を倍に？」

「はい。何か問題がありましたか？」

再びの侵入者を許さないための処置か、はたまた危険因子かもしれない私への牽制か。元々少くはなかった兵を増やす意味が分か

らない。

兵を増やす代わりにレグナ一人を置いてくれと、暗に含めたつもりで言ったのだけれど、その意味を彼は察してくれなかったという事なのだろうか？

「陛下がご心配をされて指示されたようです。今日もお渡りがありますし、それくらい警護があつたほうがよろしいかと。」

「何ですって!？」

訝しみつつ、湯上りの冷たい飲み物を飲んでいた私は口の中ものを思わず吹いた。すかさず、ルッティがハンカチを渡してくれたが、私の驚きに彼女も眉を顰めている。

「それは本当なの？陛下が今日、お渡りになるの？」

「：はい。そのように連絡がございました。侵入者のこともありますし、アイルフィーダ様のご心中を心配されているのかと思います  
が。」

「そんなことはどうでもいいの。」

湯船の中でルッティに侍女をやめてもらわない方法を必死で考えていたはずなのに、気が付けば彼女をはねつけるような言い方をしている自分がいて、内心まずいとは思つた。

だけど、それよりフィリーが今夜ここに來ることの方が大問題だ。

「悪いけれど、至急今日陛下のお渡りをやめて頂くように表に伝えてきて。レグナ様に言ってもいいわ。」

自分で言った方が早いかとも思うけれど、安易に後宮からは出れないし、後宮内でも寝間着で外は歩けない。

「どうしてですか？」

「どうして…て？」

「陛下はアイルフィーダ様をご心配されて今夜お渡しになられますのに、拒否される意味が私には分かりかねます。アイルフィーダ様も陛下を憎からず思われている様子ですし、こんなおいしい状況で陛下の気持ちを掴むいい機会ではありませんか。『守って下さい』と纏わりついては如何でしょうか？往々にして男性とはか弱い女性がお好きなものです。他にもこんなシチュエーションなんていかがですか——」

と、延々とどこかのメロドラマのような展開がルッティの口から次々に出てくる。いつもはこんな風に意見を言う彼女ではないけれど、何だか妙に輝く表情に私は一瞬だけ言葉に詰まった。

「普段は気丈にされ、あのようにご気性も実は激しいアイルフィーダ様が、陛下の前だけでは弱弱しく振る舞われる…ああ、これは今はやりの『アレ』の予感がします！おいしいです、アイルフィーダ様——」

「おいしい???」

いまいちルッティの言っていることが理解できない。『アレ』って何だろう？

だけど、彼女の案は却下。

「今日の侵入者のおかげで後宮が安全でない事が分かった以上、侵入者が捕まるまで陛下がこちらにお渡しになっていい訳がないないでしょう。後宮よりも安全な場所にいて頂かなくては。」

後宮は世界王の妃が集う宮だ。警備自体は嚴重にされていると思うけれど、その場所の大きさがその警備を完全なものにはしない。



そのあたりの改善や、少なくともほとぼりが冷めるまでフィリーが後宮に来ることは、私が軍人として警備にあたっていたら絶対に許さない。

「ですが、そのために警備の兵を倍にしたのでは？」

「後宮の警備兵を倍にするくらいなら、陛下の普段お守りする兵を倍にするべきなのよ。広い後宮の警備の兵を倍に増やすだけで、どれだけの兵が必要な事が想像に難しくないでしょう？それより、後宮より守りやす場所で、陛下の身辺警護を増やす方がよほど効率的で有意義だと私は思う。」

侵入者は私を狙っていると言っていたけど、世界王を狙っているとも仄めかした。目的が不確かな今、私より優先されるべきはフィリーでなくてはならない。

その考えを曲げるつもりがない私は、こちらを大きな目で見上げてくるルッティの視線を真っ向から受けた。彼女は私にも聞こえない声でぶつぶつと呟いた後。

「それが軍人としてのアイルフィーダ様の見解ですか？」

「それもあるけれど、王妃として：と今回は言っただけ。優先すべきは陛下の安全でしょう？」

「畏まりました。なるほど、ご自分よりも相手のことを心配する健気な姿勢：そういう展開もあり！ということですね。とても参考になりました。」

どうやら了承してくれたらしいけれど、やっぱりどうにも話がかみ合っていない気がして私は腑に落ちない。

大体、今の会話でどうして【健気】なんて言葉が出てくるのだろう？

「あの、ルッティ、さつきから何を——」

「アイルフィーダ様」

「はい」

彼女の語りかけようとして、名前を呼ばれ遮られた。

しかも、背後に妙な迫力をしょっていて、思わず背筋が伸びた。

「こんなことを申し上げては不敬にあたるかと思いますが、私……ずっと王妃付きの侍女なんて望んでいませんでした。」

うん。まあ、そうだよな。

「だって、私が見たかった後宮のドロドロなんて、後宮に王妃しかいなければ絶対に見られません。巫女様と陛下が強い絆で結ばれているという噂でしたから、陛下の姿も王妃付きの侍女では見られないだろうし、アイルフィーダ様も……そのあまり特筆していられないので、キャラクター的に弱いと申しますか——」

「???」

だんだん話が私の知らない方向へ向かっている気がする。

ごによごによ言葉をつづけた後、ルッティはこちらを強い視線で射抜く。そして、

「いいえ!ともかく、私、今日のアイルフィーダ様を見て考えは変わりました。これからは、今まで以上に侍女としてアイルフィーダ様のお近くで、じっくり観察……いいえ、お仕えさせて頂きます!」

と高々に宣言。

いや、私としては願ったり叶ったりなお言葉だけど、どうして今の流れでそうなったのか全く分からない。更に彼女は止まらない。

「今日のアイルフイーダ様は乙女の夢！姿形はこの際、置いておきまして、状況、ご性格、強さ！何をとっても今までの私の中になかったキャラクターでございます！ああ、今までどうしてそれに気が付かなかったのでしょうか？傍におりましたのに、私の最大の失敗です。ですが今後は違います！是非、陛下との色々も併せて私、参考にさせていただきますから！侍女としても頑張りますので、これからもよろしく願います！！！」

かくして、散々捲し立てた後、『それではレグナ様に会ってまいります』と頭を一つ下げて部屋を颯爽と出ていくルッティ。

それをぼかんと口を開いて見送って、私は訳が分からないけれども、ともかく自分の憂いの一つ除かれたんだよね？と自分で自分に問いかけた。（ルッティは侍女をつづける気満々のようだし）

だけど、何故だか、別の憂いが…それも大きな憂いが誕生してしまったような気がしなくもないけれど。

（…本当に疲れた）

かくして外に見張りの兵の気配がうじゃうじゃしていようと、やっと自室に一人になった私はのしかかる疲れに抗うことなく、ベッドに倒れ込んだ。途端に体が鉛のように重く感じられる。

だけど、すぐに眠気は襲ってこず、ベッドの上でごろごろしていると、二人で寝るのにも大きいベッドが、一人ではそれがより一層強く感じられた。

（思えば…この部屋で初めて一人で寝るんだ）

一緒に寝ていても何があったわけじゃないけれど、これまでずっと

と眠るときにはフィリーが横にいた。

触れ合うことはなくても、その気配が寝息が近くに感じられる。それが辛くもあり、だけど、やっぱり嬉しいと思う自分が確かにいた。

それがないと思うだけで、急に寂しさがこみ上げる。自分勝手だよね：今、自分で来るなど言ったのに。

『愛している』

（ああ、今日はその言葉も聞けないんだ）

ぼんやりとした思考でそんなことを考える。

リリナカナイの部屋を出た当初は泣きたくて仕方なかったはずなのに、今は一滴の涙も出てこない。

ランスロットやレグナに八つ当たりをしてみたところで、結局根本が解決していない以上、泣きたかった心はただ只管に疲れただけ。そして、その疲れすぎた心は、涙を流すことすら億劫だと訴えている。

（フィリー、少しは私のことを心配してくれているの？）

兵を倍しようとしたのは、本当に彼の指示なのだろうか？それを指示した彼は何を思ったの？

本当に今日も私の所に来てくれるつもりだった？

理屈ではフィリーが後宮に来ることは絶対にありえない。だけど、それとはまた別の感情的な部分でフィリーに会いたいと切に願っている自分がいる。

ルッティが言うように、『守って欲しい』と纏わりつくまではないかなくとも、『大変だったね』と言葉をかけてくれるだけだっていい。

そばにいて辛いのは分かっているけど、会いたいと思ってしまう厄介で面倒で…だけど、私にとっては大事な感情。

（こんなに会いたいののに、自分で会うことを拒否するなんて…本当に嫌。ああ、だけど、前もそんなことがあったなあ）

鈍い思考で過去へと思いをさせる。

だけど、それを思い出す前に重くなる瞼が自然と閉じて私の意識は段々と遠のいて行った。

『愛している、アイルフィーダ』

フィリーがいなくて久々にぐっすり眠れたからだろうか、頭の片隅で優しい声がそう囁いて私の体を暖かい何かが包んだような気がした。

## 声を大にして言いたい 1 (前書き)

アイルフィーダ視点ではなく、レグナ寄りの話になります。

## 声を大にして言いたい 1

(いやいやいやいや、違うだろう)

レグナはそう声を大にして言いたかった。



彼の名前はレグナ・オレ。レディール・ファシズ世界王直轄近衛騎士団団長という誉ある役職についている騎士だ。肝っ玉が据わった妻に、既に成人した息子が二人いる。

生意気な若者などは、彼の事を粹がった中年と蔑む者もいるが、彼自身としては脂がのりきった男盛りだと自負していたりする。

確かに47歳とはとても見えない鍛え上げられた体と、役職に合うだけの実力を彼は実際に有しているのだから、言っている若者の方が余程粹がっているといえるだろう。

そんな彼が声を大にして言いたかった言葉を言えぬ相手は、彼が家族とは別次元で一番守りたいと思う相手、主君・世界王フィリー。そもそもの始まりは：何処から話しているものやら、まあ、フィリーの妻である王妃アイルフィーダが後宮に入った侵入者に襲われたこととしよう。



（あの王妃：いや、女王様は曲者だ。何が悲しくて騎士団長にまどなった俺が寝ずの見張り番をしにゃならんのだ……まあ、あの侵入者を許したのはこちらのミスだが）

そのせいで狡猾に責め立てられ、気が付けばレグナは何年ぶり：いや、何十年かぶりに夜通しの警備に立つこととなった。

まあ、それは仕方ないでしょう。

レグナ自身もあの侵入者がアイルフィーダを狙うと宣言した以上、彼女を守らない訳にはいかないのだ。

だが、近衛騎士団長としてアイルフィーダだけを守っている訳ではない以上、あれこれと後宮に詰めながらも部下に指示を出したりしていたところに、件の王妃付きの侍女が現れた。

「アイルフィーダ様より、本日は陛下のお渡りを中止してほしいとお申し出がありました。」

元々そのつもりでフィリーには報告の使者を立てていたレグナであつたが、その伝言を聞いて感心する。

さすが元軍人だと思いつつも、彼女が普通の女性でないことを改めて感じ入った。

普通の神経ならば、あれだけのことがあつたのだ。夫であるフィリーに泣きついたっていいだろうし、彼がいなければ心細いと思つても仕方ない。

（まあ、あの女王様ならそんな風には思わんか？）

だが、この王妃は侵入者を許した後宮では危険があるとして、一番身を守らなくてはならないフィリーを遠ざけようというのだ。自分はその場で留まらざるを得ないとしても……だ。

まったくもって王妃の鏡ともいえる彼女の対応に感嘆しつつ、レ



グナは侍女に了承の意を伝えた。



「なのに、どうしているんだよ？」

詰めていた表と後宮を唯一つなぐ次の間に現れた人物に、レグナは頭を抱えた。

「王が後宮に来て何か問題があるのか？」

レグナと比べると非常に華奢で、身長も男性としては左程高くないレグナの主は、見ようによっては美女とも見紛う程の美貌で彼を睨みつけた。

どうやら、あまり機嫌はよろしくないらしい。

（ん？珍しいな）

それを感じ取ってレグナはそんなことを思う。

世界王フィリーはその柔らかな美貌に見合う穏やかなイメージを損なうことのない人物としていられていたが、レグナから言えば結構腹黒くて性格の悪い男だと常々思っていた。だけど、それをあまり表には出さない面の皮の厚さがフィリーにはあるはずだった。

「その後宮の前に『今日、侵入者に入りこまれた』と付けてくれよ。まだ、どこに侵入者が隠れているかもしれない場所にお前をいさせられない。」

「後宮に侵入者があったのなら、どこでも同じだろう？」

だから、入れろとばかりに横を通り過ぎようとしたフィリーをレグナは通せんぼする。

「馬鹿言うな。地上にある後宮より、お前の自室や巫女の嬢ちゃん  
の離宮がある【世界塔】の方が遥かに防衛面では優れているし、護  
衛もしやすい。お前はしばらくそっちで寝泊まりしろ。」

一つの都市のように広い世界王城の中で後宮は入り口から一番遠  
い地上に位置する。対してフィリーの自室やリリナカナイの離宮が  
あるのが城のど真中にそびえ立つ【世界塔】だ。

天を突き抜けるほど高く、まっすぐではなく入り組んだつくりにな  
っている塔は遥か昔から存在しているが、人間の技術では決して  
つくることができない神が残した居城であり、代々世界王の住まい  
とされている。

「その分、お前が頑張ればいいだけだろう？それが近衛騎士団の仕  
事だろう。」

「なっばっ！！お前は どうしてそういう事を、俺がどれだけ！！」

赤くなって怒鳴るレグナにフィリーは淡々と言いながら彼に詰め  
寄った。

「大体、今日の数々の失態。お前は どう釈明するつもりだ？王妃を  
後宮から無断で出した上に、侵入者を許した？彼女に何かあったら  
お前でも容赦しない。」

女性的な美しさを有するフィリーであるが、今彼が浮かべている  
表情にその柔らかさは微塵もない。鋭い刃のような美貌はそれを見  
慣れているレグナでさえ一瞬たじろいだ。

「ともかく、現状お前以上の騎士はないからな。後宮の兵を倍にするように指示をしたが、お前はしばらくは王妃付きの護衛に付け。」  
「何言ってるんだ！お前の誕生祭も近いのに、王妃にかまけている暇は……！」

今夜はアイルフィーダの嫌がらせに乗っても、明日以降は世界王付に戻るつもりだったレグナは驚く。

「俺は自分の身くらい自分で守れる。だが、王妃：アイルは違う。彼女は普通の女性なんだ。今日の事も怖かったと思う。もう二度と彼女を危険な目に遭わせるなよ。」

「あの女王様がか？冗談いうなよ？今日分かったけど、お前が言っている王妃と俺が話した女王様はどう考えても同一人物じゃない。」

直接話したのは今日が初めてだったが、レグナは前からアイルフィーダの事をフリーーから聞き及んでいた。そのギャップに今日は只管振り回された。なのに……

「何が違う？アイルは俺とは違って普通の女性だ。そんな彼女を【また】巻き込んだのは俺だ……【今度】は、【もう二度と】俺は彼女を傷つけないんだ。」

どうやら冗談など言っている様子じゃないフリーーにレグナは気が遠くなるように感じた。彼は本気でアイルフィーダを『か弱い普通の女性』だと思っているらしい。

「だけど、元軍人だぞ？」

「だから、なんだ？元軍人だろうがなんだろうが、彼女がか弱い女性だということに変わりはないだろう。俺が傍にいてやれない以上、

「お前が彼女を守るんだ。」

そして、話は冒頭に戻る。

（いやいやいやいや、違うだろう）

確かにアイルフィーダが戦力的に強いと言われるれば、今のところ否と答えるだろう。

見る限り体格的にも、体力的にも普通の女性と確かにアイルフィーダが特別違う部分があるとは考えにくい。だけど、レグナは思う。

（あの女王様がか弱いってキャラじゃねーだろう。）

自分とフィリーの中のアイルフィーダ像が、大きく食い違っていることにレグナは思わず天を仰いだ：とその瞬間にフィリーが彼を振り切って後宮に入っていく。

慌ててフィリーを追うレグナ。フィリーはレグナと話をするために人払いをしていて、彼に護衛はついていないのだ。

「おい！待て！！さっきも言ったが、今日は――」

「分かっている。今日は世界塔で休む。だけど、ここまで来たんだ。少し顔を見るくらいいいだろう？」

こうなっては頑固なフィリーの事だから、アイルフィーダに会うまではいう事を聞かないだろう。レグナはそれ以上は何も言わず彼に付き従った。

（それにしても：【あの】フィリーがあんなに感情的というか、お優しくなるとはねえ。あの女王様、違う意味でも大物か？）

それは言葉にしないままアイルフィーダの自室にはすぐに到着する。

傍の部屋で控えていた先ほどレグナが会ったばかり侍女が応対し、フィリーは案内されて部屋に入っていく。さすがにレグナは王妃の部屋には入れず、その扉の前でフィリーが出てくるのを待つしかない。

——とフィリーを案内した侍女もまた、外に出てきたが動こうとしない……どころか何やら扉に張り付いている。

その明らかに不審な動きにレグナは眉を顰めた。

「おい、何をして——」

「きゃー！陛下ったら、そんなことしちゃいます!？」

問いかけようとしたら、小声で侍女が叫んだ。

その言葉から彼女が鍵穴から部屋の中を覗いていることが分かる。何となくはしゃいだ彼女の雰囲気から危険はないと判断しつつも、そんな出歯亀のようなことを許すのは近衛騎士団長として無理だ。

溜息を吐きつつレグナは侍女の首根っこを引っ掴むと、自分の顔のあたりまで彼女を持ち上げる。すると小動物のように彼女が体をジタバタさせるが、それに動じるレグナでもない。

「何するんですか!」

「それはこっちのセリフだろう?」

「見るくらいいいじゃないですか!別に減るもの——」

まるで猫のように毛を逆立てようとする若い女を、どうしてやるうかと思った次の瞬間に扉が中から開いた。

「いいや、減る。」

そう一言言ったフィリーに侍女が顔を青ざめて、体を硬直させた。それを確認してレグナは彼女を床に下した。

「もういいのか？」

「ああ。アイルはもう寝ていたし。俺も休むよ。」

そう言ってさっさと歩きだすフィリーの顔は、何故だかとても嬉しそうというか、優しそうというか：近年レグナが一度も見ただけも無いような顔をしていた。

しかし、少し歩いた後、振り返ったフィリーの顔を見てレグナはそれが幻であったと思い直す。

「ああ、ルツティ？次の【アレ】楽しみにしているね。」

そう言うのにやりと笑った人の悪い顔は、いつの通りレグナが知るフィリーであった。

——会いたい会いたい……会いたいんだ

会えなくなって初めて気が付いた。

貴方がいなければ、自分が自分ですらいられない。それほどに貴方を求めているということに。



気が付けば夏はとうに過ぎ秋が深まっていた。

あの日、メルト・ファウンドでフリーと別れた日から、すでに二か月がたとうとしているが、私はあれ以来彼に会っていない。

それまで足しげく通っていたにも関わらず急にローズハウスへ行くことをやめ、更に気落ちしたような様子の私に周りには心配してくれた。

しかし、夏休みも終わりに差し掛かり新学期前だったため、学校が忙しくなりそうだから行くのをやめたという私の嘘を優しい皆は信じ、そして忘れていった。

現に私は学校で忙しくしていた……いや、自分で自分を忙しくさせた。

勉強は勿論、今までやったことのない部活にも入り、時にはローズハウスではないけれど奉仕活動にも参加した。

何も考えたくなくて、ただひたすらに忙しく学生生活を送った。

（もう、彼の事なんか忘れた。彼女って誰の事？）

そう思っている内は何も忘れられていないと分かっているても、そう言い聞かせながら私は自分を誤魔化し続けていた。

だから、それが私の元に届いた時『どうして?!』と悲鳴を上げたかった。

「ファシズさん。郵便物が届いていますよ。」

部活帰りに寮の入り口を通った私に、そう言って寮の管理人が渡したものは、何の変哲もない普通の手紙用の封筒。宛名には学校名と私の名前が書かれていた。

（誰からだろう?）

実家は近く、エリーと月に一回は帰っているため、私には特段文通をする相手もなく、基本的に郵便物なんて届かない。不思議に思っ封筒をひっくり返して、差出人の名前を見て息を大きく吸う。

——ニア・ヘインズ

体中から汗が滲むのを感じた。

「ファシズさん?その手紙がどうかした?」

手紙を受け取って固まった私を心配して、管理人が首を傾げる。それに曖昧に笑って礼を言うと、私はすぐに自室へと駆け込んだ。ボタンと近くの部屋の寮生に迷惑がかかるかと分かっているても乱暴にドアを閉めて、カバンを投げ捨てると、その封筒を開けようと鋏を手を取る。

だけど、その刃を封筒に当てたまま私は再び固まった。



（私、これを開けてどうするの？）

自分にそう問いかけて、分かりきった答えに笑いだしたくなる……当然読むだろう、この手紙を。

だけれど、手紙を読んだあとはどうするんだろう？ いや、そもそもこの手紙には何を書いてあるんだろう？

私は力が抜けたように、自室の床に座り込み、今まさに開けようとしていた封筒を見つめた。

ニア、いや、フィリーが何をこの手紙に書いているか推測しかできないけれど、多分、全くローズハウスに来なくなった私を心配してくれているんだと思う。

一応、ローズハウスには忙しくなるので暫く行けなくなると、フィリーに会った次の日に伝えに行った。（フィリーは次の日に用事があると Saying だったので、彼がいらないと知った上での行動だ）

対応してくれたのはレイチェルさんで、理由こそ問われなかったけれど、急な私の申し出に残念だと言葉をかけてくれてはいたが、やはり不審げな様子をしていた。

フィリーだってそれを不審がったとしても仕方ない。

そんな素振りもなかったのに、急にローズハウスに行かなくなるなんて、理由もないのにする行動ではない。

——理由はある。それを口にできないだけで……

だから、この手紙はきつと、どうかしたのかという心配の言葉と、またローズハウスで会おうと言う当たり障りのない表面上の言葉があるだけ……そうに違いない。けれど、それでも目にするのが怖い。二度と会うまいという決心が、フィリーにとっては社交辞令の言葉でいとも簡単に破られてしまいそうなのが怖かった。

手紙が来ているという事実だけでこんなに動揺しているのだ。内

容を見てしまえば、自分がどれだけ取り乱すか想像するのは難しくない。：だとしても、もう会わないと決めた相手なんだから、私は少しでも自分の心労の少ない選択をする。

——結果として私は手紙の封を開くことはなかった

だけれど、捨てることもできなくて、私はそれを机の引き出しの奥にしまった。

自分で自分が情けないと思うけれど、私は逃げると決めた以上、とことん逃げるつもりだった。



「ファシズさん。郵便物が来ているわ。」

再びそんな寮の管理人の声を聴いたのは、私が手紙をしまった一週間後。

その存在を忘れたふりをしていた私は、その言葉にぎくりと心臓が嫌な音を立てるのを聞いた。

「ありがとうございます。」

何でもないように礼を言いながら受け取った封筒が、一週間前のものと同じことに気が付く。

私はそれを差出人を見ないまま再び引出しの奥にしまった。

返事をしなかったから、もしくは私がローズハウスへ行かなかったから、またフィリーは心配をして手紙を送ってきたのだろうか？

手紙の内容を見ないままの私にその理由は分からない。

（どうして放っておいてくれないの？）

フィリーは何一つ悪くないのに、そんな身勝手な思いが胸を支配する。

本当は嬉しい。

手紙はフィリーが私を気にかけてくれている証だ。それが自分と同じものじゃなくなたって、それは嬉しいに決まっている。

だからこそ、忘れたはずの手紙に手が伸びる。それも毎日だ。

だけど、手紙に手が触れる前に私の頭の中に、メルト・ファウンドで焼きついたフィリーと可憐な少女が並んでいる美しい光景が過る。

『貴方さえ巫女色を受け継いでいてくれたら！！！！』

そして、耳の奥で響く激しい金切声に頭痛が走り、私は手紙を再びしまふ。

（大丈夫。返事が返ってこなければ、フィリーだってすぐに私の事を忘れる）

それが辛いと感じる自分を無視できない。だけど、その辛さは私がフィリーと会うことを躊躇わせる原因よりはまだマシだった。



しかし、私の思惑は外れる。

「また、手紙が来ているわよ。ここの所毎日ね。文通でも始めたの？」

その言葉に私は何も答えられず、ただ手紙を受け取った。

次の手紙は二通目から一週間後に、その次は三日毎に手紙が届き、ここ数日は毎日手紙が届いていた。

ちなみに私はまだ一度も手紙を見ていない。

しまった手紙は二十通を超え、机の引き出しを無視できない広さで占拠し始めている。

すぐになくなると思った手紙が続いていることに驚くと同時に、フィリーに：というか彼の母親に何かあったのだろかと私は心配になった。

（また、行方不明になったり、暴れたりして、フィリーは傷ついて私に助けを求めているんじゃない??）

執拗ともいえる手紙に私の中にむくむくと嫌な予感が膨らんでいく。

部屋に戻り、しばらく葛藤すると私は意外とあっさり手紙を開くことに決めた。

手紙を開けないと決めた理由は、私自身の心の平穏のためだったけれど、手紙の内容が私の想像するものと違ったとしたら……。

フィリーに会わないと決めたけれど、それは私の勝手だ。

もし、彼が何かの助けを求めて私に手紙を出しているのだとしたら、それに応える応えないは別問題として、それを私の勝手に無視し続けることはあまりに後味が悪い。

私の心労は無いに越したことはないけれど、もし私の悪い予感が外れたとしても私が少し我慢すればいいだけのこと。

そうと決まればと、私はとりあえず今日届いた手紙を鋏で封を切

る。瞬間にふわりと薫る優しい匂い。

封筒の中には便箋が一枚入っているだけだったけど、それを開いた瞬間に匂いがまた広がったのでこの便箋自体に、多分何かの花の匂いが付いているんだと分かった。

これがもし普通の状況だったら、私も何の匂いだろう？とかオシヤレだなぁ。とか思うんだろうけれど、ともかく手紙の中身を知りたい私はそれをスルーして便箋の中の文字に目を走らせ、時計を見た。

部活を始めてから寮に帰る時間が遅くなっていて、備え付けの味気ない時計の針は夕刻をとうに過ぎ、夕飯には遅い時間を指している。

私は机の引き出しに入っている手紙を最近のものから数通取り出して開ける。

その度に同じ匂いが薫ったけれど、私は便箋に目を走らせるとすぐにほかの手紙を確認した。全部が同じ内容。

『アイルフィーダへ

今日の夜、お前の学校の裏門で待つ。会って話したい。

フリー』

手紙全部に目を通したわけじゃないけれど、少なくともここ数日のものにはそれだけが書かれていた。

特に時間や日付の指定はない。

手紙がいつ届くかも、私が読んでいるかも分からない中、フリーがこの手紙を送り続けているとしたら、そして、本気で私に会って話をしたいと望んでいるとしたら：

（フィリーはここ数日毎日、うちの学校の裏門に来ている？）

そう考えが至った瞬間に私は部屋を飛び出していた。

本当にフィリーが来ているという保証もないのに、もう二度と会わないと決めた事など頭のどっかに飛んでしまったまま私は全力疾走した。

## 5-1 (後書き)

毎日手紙とかまるでストーリーカード……と冷静になるとそう思うんですが、恋に盲目なアイルフューダにはそう思えないんです。はい。

クライン・ステイリア女学校に公式な裏門は存在しない。

あるのは南側の正門と、東西にも出入りできる入口。

それぞれは生徒の門限が過ぎると施錠され、正門の傍に住んでいる守衛さんだけが門を開けられて、非常時以外は門限外で学校を出ることはできない。

なので基本的には学校が終わり、門限を過ぎてしまえば、学校外の人間と接触を持つことはできない。

だけれど、年頃の女学生たちが恋する乙女になった時、そんな制約は無意味なものとなり果てる。その結果、生まれた一つが【裏門】なのだ。

その裏門が50年以上続くこの学校の歴史のいつ頃にできたものなのか定かではないけれど、学校外の恋人や想い人との逢瀬のために裏門は脈々と受け継がれている。

校舎の北側に位置する寮の、そのまた北側には生い茂る木々が森や林という規模ではないけれどある。

夜になれば月明かりくらいしか頼りにならず、かなり気味が悪い雰囲気醸し出す場所であるが、そこを通り抜けると、学校の敷地をぐるりと囲む高い塀のある一部分だけに、いかにも手作りな階段のようなものがある。

階段というにもおこがましい、ただの色々なものを積み上げて塀を上りやすくしただけのもの。

どうみても【門】ではないが、学生たちはこれを【裏門】と称して、門限が過ぎた時間でも寮を抜け出して逢瀬を重ねている。

私はそれを使ったことも見たことも無いけれど、学生内ではあまりに知られている公然の秘密であったため、フリーの手紙を見た



瞬間に、まっすぐにその場所を目指していた。

しかし、少し考えてみれば他校の生徒であるフィリーが知っていることには違和感を感じるはずだ。だけれど、この時の私はそれすらもすっぽりと抜けたまま、雑木林を全力疾走し、一人壁をよじ登った。

頭は空っぽのまま、ただフィリーに会わないという使命感……いや、自分の感情に素直になっていた。

かくして、少しだけ呼吸を乱して塀に両肘を付けて、上半身を持ち上げたままの態勢で私は視線を彷徨わせた。

足は爪先立ちで、体は精一杯伸びていて正直楽な態勢ではなかったけれど、本当にフィリーがここにいるのか確かめる方が先だった。学校の裏は閑静な住宅街で、夕食時を過ぎる時間ともなれば人気はほとんどなくなる。今日はどうかやら逢瀬を楽しむ学生もいないらしく、私以外の学生も見当たらない。

一瞬、誰もいないと思って脱力感が体を満たした私の視界の端に、見慣れない光が瞬く。

それに目を凝らすと、離れてはいないけれど分かりにくい場所に人影が存在していた。

「フィリー？」

だけれど、学校から少し離れた街灯の下に佇む人影は、私が知るフィリーとは違う配色と姿だった。

いつもの長くふわふわとした亜麻色の髪ではなく、その人は街灯の安っぽい光を受けても尚神々しく輝く蜂蜜色とも思える金髪は短く、纏っている服は女性ではなく男性の服。

見た瞬間、ここにいるのがフィリーだと思い込んでいたため彼だと思った。

だけれど、俯いているため顔までは判別できないが、人影が見るからに男性だと分かると私はそれがフィリーでないと断じた。同時

に大きな喪失感が襲ってくる。

(いない……)

フリーから逃げ出したのは私。

彼といて傷つく自分が嫌で私は、自分で勝手に彼に二度と会わないと決めた。

なのに、フリーが会いに来てくれたと思った瞬間に心は喜びに溢れ、それ以外のことは何も考えられなくなった。

そして、彼がいないと分かれば、それはそれでこんなにも辛いと感じている。

結局、私はフリーの何一つも諦められていない。

それは本当にただ彼と会うという現実的な面でも、自分の感情からも逃げ出していただけなのだという事実を私に突き付け、強い自己嫌悪に囚われた。

「はあああゝゝゝ」

出た溜息は深く重い。

(それにしてもフリーの今日の手紙にも裏門で待っているって書いてあったけど、もっと遅い時間ってことなのかな？ それとも――)

ここにずっといてもいいけれど、街灯の下に如何にも誰かを待っていますといった風情の人がいる以上、多分ここに他の女学生が来るのも時間の問題な気がする。

二人の逢瀬を邪魔する訳にもいかなだろうし、かといってこのまま寮に帰ってしまつてはフリーに手紙の真意を聞くことはできない。

どうしたものかと思いを切り替えると、私の気配に気が付いたのか街灯の下にいる人がふいに顔を上げた。

（ごめんなさいね。貴方の待ち人じゃないのよ）

そう思いながら視線が合った瞬間に、その人が大きく目を見開き、その口が『アイル』と形作るのが分かった。

そして、駆け寄ってくるその人が髪や服装は違えどフィリーであることに私は大いに驚いた。

「久しぶりだな、アイル」

「フィリー」

塀の下までやってくると、フィリーはそういつて笑った。

驚きとか喜びとか、様々な感情が渦巻いていて私は呆然と彼を見下ろすしかできない。

「降りれないか？俺が受け止めるから――」

彼の口からは私がずっと彼の手紙を無視していたことを恨む言葉も、突然ローズハウスに行かなくなった不義理を責める言葉も出ない。

最後に会った時と変わらぬ彼の態度に、放心した状態から僅かに回復すると私は不思議と怒りに似た感情を覚えた。

「私に何の用なの？」

その感情のままに出た声は刺々しく冷たい。

フィリーに会えて嬉しいと、会えなくて辛かったと思う私はこんなにも感情を乱されているというのに、何一つ変わらない彼の態度

が恨めしいのだ。

分かっている。フィリーは何も悪くない。これは私の我儘だ。エゴだ。

だけど、だけど…と私の心は止まらなかった。止められなかった。

「アイル？」

「突然ローズハウスに行けなくなったこと…：貴方に直接は伝えなかったけど、レイチェルさんから聞いているでしょう？ 学校が忙しくなって今はとても行ける状態じゃないの。」

自分でもこんな言い方はないと思う。だけど、私はあえてそれを選んで言葉を紡ぐ。

どうせ、どんなにフィリーの傍にいたいと、諦められないと思っただとところで、私の想いは届かない。

必ずそこは【彼女】に取って代わられる。

だったら…嫌われたっていい、諦められないままでいい、自己嫌悪だってお手の物だ…私はこのまま全力で逃げ切る。

「貴方からの手紙も今日やっと開けられたくらいなの…：忙しいの分かってもらえる？」

「ああ…うん。ごめん」

フィリーの顔に浮かんでいた笑顔が消え、その瞳に傷ついた色が浮かぶ。

それに対して辛いとか悲しいとか思う資格は私にはない。私は言葉が続けた。

「それで？ 何か用があったんでしょう？ どうかしたの？ アイルフィーダさんに何かあったの？」

「え？」

のろりと動きも鈍くフィリーが目を瞬かせる。  
きれいな色。初めてみた彼の鮮やかな色彩は夜の薄暗さの中でも  
際立っていた。

（アイツはもっと鈍くて、くすんだ色だったな。）

その姿に今のフィリーとよく似た配色の男を思い出した。だけど、  
惚れた欲目かフィリーの方が私には輝いて見える。

「話がしたいって手紙には書いてあったでしょう？何か急ぎの相談  
事でもあるのかと思って、私も何とか時間を空けてきたの。」

「うん。あった…さっきまで、ううん、ここ数日、アイルを待って  
いる間…ずっとお前に会ったら、言いたい事や聞いてほしい事がた  
くさんあったんだ。…だけど、もうない。俺は——」

そうして、言葉を僅かに切って、傷ついた表情を浮かべた顔を俯  
ける。

言っていることが矛盾していて、彼が何を話そうとしているか全  
然分からなくて、私もかける言葉を探す。

しかし、それより先にフィリーがもう一度こちらを見上げる。

そこには先程、浮かべていた傷ついた子犬のような表情はなく、  
静かだけれど強い、私の知らない感情の色が浮かんでいた。

蜂蜜色の髪の間から覗く、青とも緑ともつかない宝石のような鮮  
やかな色が私を射抜き、私は不用意に心臓を高鳴らせた…その瞬間  
だった。ぞわりと背筋を悪寒が走り、私は体が小刻みに痙攣するよ  
うに震える。

それは恋する乙女が感じる類の感覚ではなくて、明らかに自分の  
中の本能が危険に対する警告を発しているものだった。

（これって!!?）

思い当たる感覚に人気のない住宅街に視線を走らせ、私は足を塀にかけてとひらりと軽い身のこなしで塀の上に立ち上がった。

「アイル？」

突然動き出した私に怪訝そうな表情を浮かべるフィリーの背後に伸びる街灯の光によって作られた影が、によきりと地面から立ち上がるのが見えた。

「フィリー！にげ——」

あまりの非現実的な光景だが幻ではない。私はフィリーの背後に忍び寄る危機に叫び、塀を飛び下りようとした。

「おっと、静かにしてもらいましょうか？」

だけれど、体は何者かに後ろに引っ張られ、冷たい感触が首筋に当てらる。同時に低い声が耳朶を震わせた。

私が今いるのは塀の上。そこに立つ私の首筋に、背後の人物は刃を当てている。

塀の高さは私の身長の一・二倍はあり、幅はせいぜい私が足を乗せるだけで精一杯くらいだ……ということは背後の人物はどうしたって私と同じ高さに建てるはずがないのだ。

なのに、どうして私に刃を向けられるのだろうか？

動かせない身体代わりに、視線を下へと移すと塀の上に立つ私のすぐそばに、誰かの足が宙に浮いているのが見えた。

手品の類でなければこれは――

「動かないでいただけますかな？」

私の視線の動きに気が付いたのか、首にあたる多分ナイフがぐつと押し付けられた。

緊張のためにほてり始めた肌に刃の冷たさが、ぞくりと体を震わせる。

「アイル！」

一方、フィリーの方は彼に近づいていた影に取り押さえられている状態で、私たちを見上げてもがいている。

この状況、結構ヤバイ。

叫んで助けを呼ぶのもいいかもしれないけれど、それでこの人物があつさりと逃げてくれる可能性も分からない。

何が目的ともしれない中、逆上されて切りかかれても面倒だ。

「いやいや助かりましたよ。」

：多分、成人男性が場違いなほど明るい声で言った。

同一人物の声かと疑うほどに先ほど私に囁いた声とは全く違う、殺気の欠片もない声。

「フリー様、私は貴方様とお話したかったです。そのためこのチャンスを狙っておりました。護衛を振り切ってここ数日、ここで何をしているのか観察させて頂いておりました。お一人の時にお話をしようと言っても、どうせ逃げられるだけですからね。」

私の横から男が顔を突き出した。

不健康を絵にかいたような土気色の顔色に、目の下には大きな隈、奇妙なほどにカラフルな帽子からはみ出た前髪の間からは大きくぎよろりとした目が爛々と輝いている。

「なので、こうして人質にうってつけのお嬢さんが登場して頂けて、私は本当に助かりました。いやはや、フリー様も隅に置けませんねえ。」

「何者だ？」

どうやらこの不健康そうな男の狙いはフリーらしい。

だけど、人質を取ってまで話したいことって何？するだけで人質が必要な話ってどんなの？：どうにもきな臭い予感がプンプンする。だけど、フリーの方には思い当たる節があるのだろうか？

こちら……というか、私の後ろにいる男を睨むフリーの表情は慌てた様子もなく、彼の髪や服装がいつもと違うこともあるかもしれないけれど、見たことがないほど厳しく、初めて会う青年のような印象を私に覚えさせた。

「ああ！自己紹介が遅れましたね。私の名前はヤウ・ロステイナー。



レディール・ファシズの筆頭魔導師でございます。次期世界王たる  
フィリー殿下？お話聞いていただけますよね？」

その声と共にナイフと同時にヤウと名乗った魔導師の腕が首に巻き付いた。

——レディール・ファシズ筆頭魔導師

——次期世界王

無視できない単語がまるで世間話の一つでもあるように、軽い口調で続けられる。

フィリーがそれに眉一つ動かさない。その事が彼がその事実が事実であることを証明する。

（フィリーが……次の世界王）

＜バルバトスの箱舟＞事件のことは、世情に疎いと言われる学生の私でも知っている有名な事件。

亡命してきたレディール・ファシズの人々は、現在もこちらで暮らしている。

彼らは＜神を捨てた移民＞、良くも悪くもそう言われ亡命当初は好奇の目に晒されたらしいけれど、結局見た目は同じ人間にすぎないので、彼らがオルロック・ファシズの人間たちに紛れてしまうのは簡単な事だった。

ただ、世界王と巫女だけは別格だというのは当たり前なのだろう。故に上層部は彼らの亡命は発表しても、その存在は国民たちにひた隠しに、亡命後彼らは一度たりとも人目に触れることも無く、世界王殺害説や、実は亡命していないんじゃないかという説も何度もとりにだされたりしたものだ。

だけれど、フィリーが次期世界王ということは、彼の父親ケルヴ

イン・ヘインズこそが亡命した世界王であり、彼の母親、ローズハ  
ウスに軟禁されているアイルフィーダさんが巫女という事……なの  
だろうか。

今はそんなことを聞ける雰囲気ではないが、多分、私の予想は当  
たっているんだろうな。

私のことなどアウトオブ眼中で見つめあう二人を窺いつつ、私は  
小さく息を吐いた。



ナイフを突きつけたまま私を抱え込むと、ヤウは塀から飛び降り  
り、ふわりと軽やかにゆつくりとそのまま地面に着地する。

まるで魔法のような感覚に、なるほどこの男が筆頭魔導師かはと  
もなく、魔導師であることは確かなようだと得心する。

これで彼が宙に浮いていたことも、影を実体化させてフィリーを  
襲ったことも説明が付く。

ヤウはフィリーが抵抗する様子を見せないことを確認すると、お  
菓子のようになちゃちい赤と白の縞縞ステッキを振ると彼を拘束して  
いた影を消した。

代わりに私の足元をステッキで軽く叩いて、私の影を実体化させ  
て拘束さ、自分はステッキを振り回しながらフィリーに近づいてい  
く。

ステッキには派手なストラップやチェーンやらが付いていて、じ  
ゃらじゃらと耳に五月蠅い音になった。

「私はまどろっこしいことが嫌いなので、本題をズバリ言わせて頂  
きますね。フィリー様、レディール・ファシズにお戻りになり世界

王とおなりください。」

ヤウ・ロステイナーと名乗った自称レディール・ファシズ筆頭魔導師は、そう言ってニコリと……いやニヤリと笑う。

真剣味が伺えない声と言葉と同様に、彼は非常にふざけた姿をしていた。

一般的な魔導師という存在は黒い服に身を包むが、この男の服は目にまぶしいほどの純白。それに金やら赤、黄色やピンクなどに見えるだけで目に悪い配色をこれでもかといわんばかりに服にあしらった、非常に派手な服を着ていた。

まあ、それも個人の自由だと、個性だというのなら、彼にそれが似合っているのなら許してやろう。

だが、ヤウ・ロステイナー。不健康すぎる彼に、その服は何一つ似合っていない。

いっそ、魔導師特有の黒いローブでも着ていれば、それはそれで貫禄みたいなものが出る様な気もするけれど、下手にこんな派手な服を着るものだから、彼という薄すぎる存在が、派手な洋服によって妙に浮きだっている。

まあ、目立ちたいというのであればそれは成功なのだろうけれど、魔導師って基本的に隠密行動ではなかったか？

「それをいうなら俺じゃなくて、親父に言うのが筋だろう。亡命したと言ってもあの人が世界王だ。例えば世界王になる血を引いていたとしても、親父が世界王である限り、俺が世界王になれるはずがない。」

ヤウの言葉をフィリーはきっぱりと拒否した。

それは理解したけれど、フィリーの不思議な言い回しに違和感を覚えた。

「なるほど、その発言が出るという事はケルヴィン陛下は、世界王について色々お話されているということですね。てっきり甘いあの人のことだ。何も言っていないのかと思いましたよ。まあ、そうでなければ特に男子として問題なさそうな貴方が、黙って女子に化けて生活している訳もありませんな。女装は我々の目を少しでも欺くためのものだったのでしょう？ 実際、最近まで騙されていましたよ。ケルヴィン陛下の子供は王妃が生んだ兄と妹しかいないとね。」

フィリーの女装にはアイルフィーダさんのためだけではなくて、次期世界王としての身分を隠すためのものだったのか。

「そうさ。親父はいずれあんたみたいのが、俺を世界王にするためにやってくることは予想済みだ。だからこそ、俺もしたくない女装を続けていたし、惑わされないよう真実も教わっている。」

「ほう！ 真実？」

スツテキをくるりと回し、彼はそれをもう片方の手でキャッチした。

楽しそうに顔に笑みを浮かべると、ずっとフィリーの顔を覗き込む。

今はフィリーが私に背を向けている状態なので彼の顔は見えないけれど、フィリーが僅かに体を仰け反らせたのは分かった。

「貴方がどこまでをケルヴィン陛下からお聞きになっているか私は存じ上げませんが、『世界王になる血』という言葉が出てくるのです。その条件に付いては無論お聞きになっていますよね？」

「ああ。」

こつこつと男のくせに高いヒールの音を響かせながらヤウがフィリーの周りを歩く。

ヤウの意識はもはや完全にフィリーへと向かっている。

私はどうにか自分を拘束している影を振りほどけないか腕を動かしてみるのが、背中でしたっかりと影によって押さえつけられた腕は全く動かない。

（なんていう馬鹿力よ。私の影）

フィリーが世界王になることを拒否しているらしい以上、このまま交渉が決裂することは決定的だ。

その結果、ヤウが力づくでフィリーを連れ去ろうとした時、私が捕まったままではフィリーも逃げるに逃げられないだろう。

ここは何とか私が突破口にならなくてはいけない。

だけど、今の私の力では影を振り払うことは到底敵いそうもない。それとなく影の足でも踏んでみたけれど、痛覚がないらしく踏んだ感触はなかったけれど、私の足を退かす気配もない。

痛みを感じないのなら不意打ちをすることもできない。

（できれば最終手段は取りたくないんだけど）

そう思いながら右の親指にはまっている指輪に意識を向ける。

「ならば、聡明そうな貴方のことだ。その真実の矛盾には気が付いているのでしょうか？」

親指の指輪を一纏めにされている指輪が嵌っていない方の指で外そうとしている私の目に、フィリーの肩が震えるのが見えた。

「その血を貴方が引いているのであれば、貴方は『妹』ではなく『姉』：いいや、『弟』ではなく『兄』でなくてはならない。少なくとも『バルバトスの箱舟』事件より前に巫女様のお腹の中に貴方は

いなくてはならなかったはずだ。違いますかな？」

私にはヤウの言っている言葉の意味が分からない。

＜バルバトスの箱舟＞事件より前にフィリーがアイルフィーダさんのお腹の中にいたとしたら、少なくともフィリーは既に22、3歳であるはずだ。

だけど、彼は私と同じ18歳だと言っていたし、とても20代前半には見えない。

「……」

「沈黙は肯定だと判断させて頂きますよ？無論、貴方はそれを陛下に問い質したのでしょうか？そして、それにあの方はお答えになりましたかな？」

フィリーはそれにも答えない。

それを見てヤウは上を向いて大声で笑いだした。

「あははははは、やはりなあ！！！」

その笑い声は常軌を逸したほどに大きく、近くの民家から誰か様子を見に来てもおかしくない程だったが、その気配はない。

案外、この魔導師によってこの場には結界が張られていて、音が漏れなかったり、人が近づかないようになっていいる可能性もある。

「では、これはどうです？貴方のお母上、巫女アイルフィーダ様がどうしてあれほど男という存在に恐怖を抱くようになったのか？どうして、あの方が幽閉されているのか？貴方は知っているのですかあ？」

大声で笑う事をやめたかと思えば畳みかけるように続けるヤウ。

その言葉にフィリーの肩が震えて、その拳が握りしめられるのが見えた。

「フィリー！」

動揺を隠せない様子のフィリーの名を思わず呼んだ私だったが、影が動く私をぐいっと引き戻す。

多分、アイルフィードさんのことはフィリーにとっては一番突かれたくない痛い部分だ。そして、このヤウという男はそれを知った上で、フィリーを挑発するためにそれを告げた。

ここで動揺してしまつては、相手の思う壺だ。

私は指輪を一気に抜き去ると、影を振り返ろうとした――その瞬間に聞こえた声に体の動きを止めた。

「世界王になれば、それが分かるのか？」

そう言った背中を私は呆然と見つめた。

（今、何て言ったの？）

先ほどまで『世界王にはならない』と言っていたはずのフィリーの言葉を信じられない思いで私は聞いた。

だけど、そういった彼の顔は、背中を向け続けられているために見る事ができなかった。

フィリーの言葉にヤウが大きな目を更に大きく見開いた。

「ほほう：世界王になる気になりましたかな？」

「なるとは言っていない。お前が言った事柄：もし、世界王になることで分かるんだったら、考えてやってもいいと思うだけだ。」

「いやいやあ！私としてはそれだけでも嬉しいですよ！」

ヤウがぱちぱちと手を叩くと、魔導か手品か花火のようなものがその手から瞬いて散った。

私はそれを見つめるしかできず、動くに動けなくなりつつあった。ここは強引にでもフィリーを連れて逃げるべきなのだろうか？それともフィリーとヤウの会話を最後まで見届けるべきなのか？

現状ではどちらとも決められなかった。

（せめてフィリーが表情さえ見れば、どうして欲しいか分かるかもしれないのに）

結局、何も理解していない私ではなく、現状はフィリーが何を考えているかが全てである。

だけれど、私に顔を見られたくないかのようにフィリーは頑なに背中だけを向け続けているので、私はどうしていいか分からない。

私はその事に強い焦燥感を感じ始めていた。

このままではフィリーが世界王になってしまふ。それはある意味、永遠の別れを意味するのではないだろうか？

レディール・ファシズの王となった彼と、オルロック・ファシズの一市民でしかない私に、<sup>まみ</sup>見える機会は永遠にないだろう。

二度と会わないと自分で決めたはずなのに、会えるけど会わない



のと、絶対に会えない存在になってしまいうのでは、その重みが全く異なる。

（そんなの嫌！）

今の私がそれを口に出せる雰囲気ではないことは分かっている。それを言う資格がない事も。

だから、フィリーとヤウの会話を私は固唾をのんで見守った。

「それで？世界王になったら、お前がそれを教えてくれるのか？」

「まあ、そうですね。分かる部分はお教えしてもいいですよ？ただ、色々私も調べてはみたものの未だわからない部分も多いものでね。それについては世界王にしか会わないと言われる【あの方】に聞くのが早いでしょうな。私に教えないことも、世界王になら教えてくれるはずですよ。」

【あの方】？

「なるほど、レディール・ファシズで世界王になれば、お前が言うところの【あの方】には会えないからな。ここでお前に口を割らせたところで、俺が知りたい真実は全部は分からないという事か。」

「ふむ。世界王になってもいいと口では言いつつも、それは方便ですかな？私が全てを知っているか確かめていただけでしたか。私が全て知っていたらどうしていました？」

「手段は選ばず、口を割らせる。」

フィリーは自分の容姿とは裏腹に、演技をしていないときは割と乱暴な物言いをする。だけれど、育ちが良かったためか、それがあまり下品に聞こえなくて好感が持てた。

女性っぽい話方も気品があって私は嫌いではない。

だけど、今ヤウと対しているフィリーの話し方を私は今まで一度も聞いたことがなかった。

冷静で感情の起伏がなく、容赦なく的確な言葉のみを淡々と語るのは、本当に私の知っているフィリーなのだろうか？

私にはフィリーを何処か遠くに感じた。

「おお！恐ろしい！！ですが、どうしても貴方が知りたいことは真実、世界王になれば一生分からぬままでしょう。」

あからさまな演技で気持ち悪くヤウが自分の体を抱きしめた。

「だが、初めにも言ったはずだ。世界王はまだ親父のままなんだ。資格があっても俺が世界王となるには、親父が俺に世界王の力を渡さなければならぬ。だが、親父は多分渡さないだろうな。結果、力がない以上は俺は【あの方】とやらにも会えないだろう。」

「それに付いてはノープログラムですよ☆お教えしましょう、貴方はすでに世界王の力を有しているのですよ。それも生まれた瞬間からね。」

ばちんと音が鳴りそうなほど大きなウインクと共に、星が散らばる。

（……なんなんだ、このメルヘン親父は）

そんな場合でもないけれど、彼から飛び出す小道具の数々に思わず心の中で突っ込む。

正直、話の内容は何一つわからない。だから、余計にヤウの鬱陶しさに苛ついた。

「と、いいですか。そうでなければ困るのですよ。フィリー様？世界王の力の無い貴方が仮初の王となったとしても、レディール・フアシズは簡単に滅びてしまう！ここ最近の自然災害、それに伴って深刻化する飢饉、流行病……どれ一つとっても世界王の不在こそが最大の原因。貴方もそれはご存じのはず。」

「だから、それは親父が――」  
「いいえ。」

軽すぎる声が一転し、潜めるように低く囁かれた。

その声に、ヤウが私の背後で最初に発した声のような殺気を感じた。

「貴方が世界王になれば、全てが解決するのですよ。何度でも言いましょう、貴方こそ生まれながらの世界王なのです。」

「どういう意味だ？」

これについてはフィリーも意味が分からないらしい。

「さあ？それは私にも何とも？ですが、【あの方】がそう仰った。それが全て！！フィリー様、貴方は世界王になるべき方なのです！！！」

言いながら満面の笑みでヤウが両手を広げた瞬間、彼の背後からクラッカーがなるような音とともにハトやリボンや紙吹雪が飛び出た。

なんというかいちいち反応に困るといとか、面倒なオッサンである。

分からない話が続いて、苛つていることもあるだろうけれど、その感情がダダ漏れな表情をしていたのだろう。

私を見て自分の演技に悦に入っていたヤウがむっとした表情を浮

かべ、気味が悪い笑みで私に近づいてきた。

「おやおやぁ？　そういえばすっかり忘れていましたね、お嬢さんの事。どうしましょうか？　もう、人質としての意味はありませんし、こんな重要な話を聞かれてしまったことです……ここで消ししましょうか？」

「なっ！？　やめろ！！」

物騒な発言をするヤウに、フィリーが久しぶりに私の方を見た……だけど、私と目が合った瞬間にそれは逸らされる。

（どうして？）

自分の中でそう思って……ああ、自分は先ほど彼を拒絶したのだと思ひ出す。

「ですが、今の話を言いふらされても面倒でしょう？　心配めされるな！　我が魔導にかかればこんな小娘、跡形もなく消して差し上げましょう！」

そう言ってステッキが鼻先に突き付けられた。  
だが、すぐにフィリーが私とヤウの間に入る。

「聞こえなかったか？　俺はやめろと言った。」

再び向けられる背中。それはもしかしたら私が知るフィリーの背中ではないのかもしれない。

ヤウとの会話で彼が見知らぬ人のように思えた。だけど、それ以前に私が拒絶したことで、彼は私から遠のいただけなのかもしれない。

（だったら：自業自得よね）

そう思うと体から力が抜けて、私はすんと座り込んだ。同時に影につかまれていた腕が外れて、だらりと下がる。

「おんやあ？」

俯く私の頭上でヤウのへんてこな声が上がる。

「彼女の事は俺が自分でどうにかする。この影も消せ。」

「あ？ああ、はいはい。畏まりました。」

生返事のヤウの言葉の後にぼんと小さな爆発音がした後に影の気配が消え、フィリーが私を気遣って肩に手をかけようとしているのが分かった。

それを察して、咄嗟に私は彼の手を避けるように立ち上がった。同時に手の中にあった、指輪を再び嵌める。

「アイル？」

「ごめんっ。何でもない、大丈夫よ。それよりも――」

それ以上は言わずに、彼に先を促すために頷いて見せた。この場面、少なくとも悲しくとも私が口を出していいところではないだろう。

フィリーもそれは心得ているようで、私に頷き返し、改めてヤウに向き直った。

「ともかく、お前の話は理解した。」

「それは有難き幸せ、で……お答えは？」

私はフィリーの言葉を前に唾を音を立てて飲み込んみ、

「正直言って、これは俺がすぐに決断を下せる内容じゃない。混乱もしている。確かめたいこともある。……時間をくれ。」

その言葉に大きく息を吐いた。

ヤウは少しだけ考えるように顔に手を当てた後、ポンツと音を立ててペンと紙を何もない所から出現させると、そこに何事か書き付けた。

「畏まりました。こちらとしては完全拒否されるよりは、よほど良いお答えです。では、決断を下されたらこちらにご連絡を。オルロツク・ファシズにおります協力者の名前です。」

そして、その書いたメモをフィリーに渡す。

「ですが、フィリー様。こちらあまり時間がございません。我らは世界王を求めています。その事だけはお心に留めおいていただきますよう。何卒お願いいたします。」

ヤウはそういながら恭しくフィリーに頭を垂れた。

フィリーに訴えたいことを概ね訴えたらしいヤウは、『では、本日はこれにて失礼します。』という、おもちゃのようなステッキを振った。

すると、爆発音とともに小さな家ほどの大きさの黒い鳥と、一人が入れるくらいの箱が煙の中から現れる。

ヤウはその箱の蓋を開けると、その中に入る。

「すみません。お嬢さん。今から私、この中に横になりますので蓋を閉めて頂けますかな？」

何が始まるんだと呆然と見ていた私は、突如として声をかけられてビックリしつつも駆け寄った。

すると箱の中には色とりどりの花が敷き詰められていて、その香しいというか、強すぎる匂いにうっと息が詰まった。

その中に納まるヤウを見て、これじゃあまるで棺桶だと私はこの男の趣味に眉を顰めた。

「よろしければお花を一つ如何ですか？」

横たわりながら花を差し出されて顔が引きつる。

「いいえ。結構です。」

「そうどうか、残念で——」

言いながら私の右腕に手を伸ばそうとしたヤウを、私は虫でも払うかのごとく引っ叩いた。

「何するんですか？」

「……それはこちらのセリフかと。ああ、痛い。」

（絶対嘘だし）

見るからに嘘くさい演技に、私は胡乱気な瞳でヤウを見下ろす。すると、こちらを油断なく見つめる眼光とぶつかった。そして、にやりと気味悪く笑った後、ヤウは視線を私の右手に合わせた。

「中々、美しい指輪ですなあ。どなたかからの贈り物ですか？」

言われた言葉に右手の親指に嵌る指輪を左手で隠した。

「クスクス。隠さなくても、盗んだりしませんよ。」

「……」

私は黙ったまま、指輪を覆う左手に力を込める。

女性がするにしては少々ごついこの指輪に名前はない。宝石類はついておらず、くすんだ銀で様々な模様が彫られていて、学生の私がすることは相応しくないだろう。基本的にアクセサリー類を身に着ける事は校則にも反している。

それを私は両親に頼んでもらい、学校に許可をもらって付けている。

「閉めさせてもらいます。」

だけれど、そうまでしてこの指輪を付けている理由を知っている人は少ない。また、それをこの魔導師に話す言われもない。

私はヤウの言葉の一切を無視して、箱の蓋を容赦なく閉めて鍵もかけた。蓋に何かが当たった音と、悲鳴のようなものが聞こえたが、



空耳に違いない。

かくして、早くしろという、黒い鳥からの無言の圧力に少しだけ笑って、私はそそくさと箱から離れた。

すぐに黒い鳥が羽ばたきだし、箱から延びているいくつもの糸が鳥の足にくくりつけられているらしく、鳥が上昇するにつれて箱は地面から宙に浮いた。

大きな鳥が羽ばたくことで、ものすごい風圧が一瞬襲ったが、あつというまに上空へ飛び去った鳥はヤウと共に闇夜だったこともあり私の視界からすぐに消えた。

それを見送って、やっと息をつく。

「アイル、大丈夫だったか？」

と、そうしていると声がかかって、どきりとした。

振り返ると、フィリーが強張った表情でこちらを見ていた。

「あ、うん。大丈夫だよ。」

「ごめん。変なことに巻き込んで、忙しいのに……」

その表情は先ほどまでヤウと対していた決然さが全く感じられず、彼も彼なりに気を張っていたのだと気が付く。

そして、『忙しいのに』と告げられて、彼が私が言ったことを気にしているらしいことも分かる。

一瞬だけ嫌味かとも思ったけれど、彼の表情にはそんな様子もなく、私の方も罪悪感を感じてしまい、どう返していいか言葉に詰まる。

『……』

互いに微妙な沈黙が落ちた。ヤウが消えてもなお、周辺に私たち

以外の人の気配はなく、静けさが辺りを支配する。

だけど、ヤウとの話を全て聞いていてそれらをなかった事にできるほど、私は大人ではないし、彼もまたそれを望んでいるようには見えない。

私はぐくりと唾を一つ飲み込んで口を開いた。

「フィリーは世界王……になるの？」

「！」

「フィリーの事情に私が首を突っ込むのが嫌なら、何も聞かない。忘れられないけど、忘れたふりをして誰にも言わない。」

私の言葉にフィリーは少しだけ視線を彷徨わせた後、意を決したように私を見た。

「アイルは俺が世界王だって、今の話で信じたのか？もしかしたら、ただの妄想話かもしれないぞ？」

確かに何の証拠もない言葉をすんなりと信じられる内容ではないだろう。

現に世界王やら巫女については、オルロック・ファシズ間でも一般人には何一つ知らされていないため、都市伝説の如き話が氾濫しているのも事実だ。

「信じているっていうか：多分、私にとっては今の話が真実でも妄想でも構わないんだと思う。」

「どういうことだ？」

「要するにフィリーにとってそれが真実なら、それを真実として受け止めるし。嘘だと妄想だというのなら、そうだと思うだけ。」

「そんなに俺のことを信じているのか？」

顔を酷く顰めていうフィリーに顔に私は少し笑った。

「信じてはいないよ。もしかして、フィリーが言うように妄想かなとも思ってる。」

そっちのほうが、どれだけいいか。

「私が貴方に世界王になるのかと聞いたのは、それが真実か妄想か、そういう事じゃなくて。要するにそれが真実であれ妄想であれ、貴方に世界王になる気があるのか：そういうこと。フィリーにとっての真実かどうかを聞いたの。それによって、私も何を言ったらいいか考えるから。」

本当はフィリーがいう事なら全部信じる：と、言った方が恋する乙女としては正解なのかもしれない。現に本当は私は彼を疑っていない。

先程の会話の緊張感にしても、おふざけというには緊張感たっぷり、信じたくなかったって信じざるを得ない状況だった。

だけど、私の性質として誰かを無条件で信じるということは多分できないんだと思う。

『信じる』ってそれは素晴らしいことだと思うし、誰にでもできる簡単な事じゃないと思う。でも、結局それはある意味『信じる』何かに自分の全てを預けてしまう、とても無責任な事なんじゃないかとも私は思っている。

『信じる』ことは大切。だけど、同時に私はそれを『疑い』続けることも大切だと思う。

『疑う』って言葉は悪いかもしれないけれど、それは要するに考え続ける事だと思う。

何かを信じたとしても、それについて考える事をやめてはいけな  
いと、私は昔散々叩き込まれた。その性質は今現在も、これから

多分なくなることはないんだと思う。

「……ありがとう。」

そんな思考に囚われていて、フィリーがこぼした言葉を一瞬聞き逃して、聞き返すと彼は苦笑する。

「え?」

「いや、何でもない。俺にとって次の世界王になるかもしれないという事実は、真実だ。だけど、今のところ世界王になるつもりはないよ。」

その言葉を聞いた瞬間に、私の方から力が抜けた。

「ただ、あの魔導師いう事をすべて鵜呑みにするわけじゃないけど、長年の疑問を解決するには良い機会なのかもしれない。そう思った。」

言いながら辛そうに顔を歪めたフィリーは、まるで泣きそうな子供ののような表情を浮かべる。

そんな表情を見たくなくて、私は何も考えずに彼の手を咄嗟にとっていた。

「私にできることは何かある?」

彼らの話のほとんどは私に理解できない話で、フィリーをこんな表情にさせる理由を私は何一つ知らない。

こういつてもフィリーはきっと私に何も頼みはしないだろう。分かっている。彼にできる事なんて何もない。

全てが自己満足でしかないと分かっている。だけど、それでも言

わずにはいられない。

恋なんて：どうしてこれほど厄介な感情なのだろう？

何もかもうまく立ち回れない自分が酷く滑稽で、嫌になる。

「うん。ありがとう。」

想像通りに少し困ったようにそうフィリーは言った後、私が掴んでいた手を強く握った。

そうして、無意識とはいえ自分が取った行動が今更に恥ずかしくなった。

「あ、ごめっ」

反射的に手をほどこうとすると、逆にフィリーが更に手を重ねてそれを留めた。

「このまま。少しだけ：このままでもいいか？」

「へ？は・はい！」

驚きのあまりに掠れた声で答えつつ、自分でもわかるくらい顔が熱くて泣きそうになる。

（待て待て、私！勘違いするな！フィリーはただ混乱していて、人の体温が恋しいだけよ！ここには私しかないし）

フィリーにその気がなくても、こんな風に顔を赤くするなんて空気を読めていないことは分かっている、仕方ない。

赤くゆでダコのような私はフィリーに片手を握られたまま、しばし硬直した。

「……あのさ、忙しいかもしれないけど、また…少し時間をくれな  
いか？」

「う、うんっ。私なんかでよければ、話くらいいつでも聞くよ！」

二度と会わないなんて決意は、もはや自分の中でなくなっている  
ことに気が付く。

フィリーについて自分がつらく悲しくなることは分かっているが、  
気が付いてしまったんだ。彼が私の手の届かない場所に行ってしまう  
と思った時の恐怖と喪失感。

その大きさに私は辛くても悲しくても、もう少しだけ…うん、も  
う少しだけフィリーの傍にいたいと願ってしまった。

いつかは絶対に諦めないといけない時がくる。だから、その時ま  
では……

「ありがとう。本当は今日聞いてほしかった話なんだ。だけど……  
今の俺じゃあ何も言えない。全部、決着を付けてから、その時、ま  
た話を聞いてほしい。」

——ドクン

言いながら向けられた視線の強さ。

ヤウが現れる前、そういえばこの視線と共にフィリーは何か言  
いたげだった。……ていうか、世界王になるなら無いの話を聞いてほ  
しいんじゃないのか？という突っ込みが冷静な部分ではあったけど、  
恋する乙女モードの私はそれをあっさりシャットダウンする。

心臓が急にどくどくとなりだして、私はどぎまぎしながら言葉な  
く頷いた。それを見るとフィリーは私がよく知る笑顔を浮かべた。

それを見てまた顔が一層赤くなるのを感じた。



そう、八年前、フリーが次期世界王であることを知ったあの日。確かに彼は世界王にはならないと私に告げた。

私はそれが嬉しかった。

だけど、彼はその後、すぐに世界王になるべくオルロック・ファシズを去ることとなる。

——私の心に大きな傷を残して……

高く晴れ渡る空に大きな歓声が響く。

「フィリー王万歳!!」

「我らの世界王、万歳!!」

空気を震わせるような歓声、誰しものが世界王の名を呼ぶことを喜び、彼の誕生したこの日を祝う。

それは世界王への絶対的信頼とでもいえるのだろうか？

一途で揺らぐこともないその感情は妄信的で、ある種の危険を孕んでいることに、歓声を上げる人々は気が付いているのだろうか？

世界王フィリーを讃え祝う国民たちの声に笑顔で手を振り続けるフィリーの背に、私は彼への誇らしさと同時に、あまりに大きな期待を一身背負う彼に不安すら抱きつつ、その傍らどころか背後に隠れるように立ち尽くすしかできずにいた。

今日はフィリーの26回目の誕生日。世界王である彼の誕生日は、誕生祭としてレディール・ファシズでは祝日とされ、一日お祭り騒ぎになるらしい。

その行事の一つとしてフィリーは民衆に演説をする。

城前の広場に面するテラスは演説をするにはうってつけの場所であり、かなり広い広場にはフィリーの演説を直接聞くために入りきれないほどの人がひしめき合っている。

後宮から外に出られない私が滅多に見ることがかなわない城外の景色は、未だに情勢が不安定だと感じさせない程美しい。

ファイリオンから聞き及んでいたように、白壁に赤の屋根の建物が多く、統一感を損なうことなく眼下に望む景色は絶景だ。

以前の姿を知らないから私はただ美しいとしか思えないけれど、



フィリーが世界王に即位してからの八年間を見続けてきた人々には、恐らく感慨深い思いがあるのだと思う。

フィリーは演説をすでに終えており、今はその歓声に応えているところだ。

迷うことなく、真摯に民衆に語り掛けていたその姿は、私が知っているかつてのフィリーとも、今、私の知るフィリーとも違う、若くとも堂々としたカリスマ性のある世界王として申し分ないように私は感じた。

そして、目の前にある人々の熱狂ぶりこそがその証拠だろう。

（遠いな）

それを喜びこそしても、こんな感想を抱くことが間違っている事は分かっている。

だけど、フィリーが世界王として相応しくあればあるほど、彼と別れてから八年間という歳月の重みを感じ、彼が遠のいていくように感じてしまうのだと思う。

だけど、その事を辛いと悲しいと感じると同時に、酷く安堵する自分もいたりする。

このまま世界王としてのフィリーを目の当たりにする機会が増えて、かつての彼と違う所を感じていく中で、もしかしたら私の中でしつこく残る恋情は過去のものになってくれるかもしれない。

私が好きになった普通の少年だったフィリーであって、世界王であるフィリーとは違うものだと思はそう思うかもしれない。

そうしたら、彼が私を好きじゃなくなったら辛くない。悲しくない。……ああ、それはとても私を楽にしてくれるに違いない。

こんな風に思う自分はらしくない。だけど、私は疲れてしまった。フィリーを想うことに、フィリーに想われていないことに、その横に美しい巫女がいることに疲れ果てた私は、そんな風に考えてしまっただ。

「君も民に手を振って。」

振り返らないだろうと思った背中を見つめながら、そんな昏い思いに囚われていたところ、急に笑顔を浮かべながらそう言われて驚く。

「え？ だけど――」

オルロック・ファシズの王妃と言えど、正式な王妃である以上、何もしなくていいからフィリーの後ろで突っ立っていて下さいと言われて（本当はそんな言われ方ではなかったけど、意味はそういう意味だと思う）、なるべく人の目に触れないように後ろの方で縮こまっていたというのに、そう言われて戸惑う。

そんな私を勇気づけるように笑みを深くして、フィリーは私の腕を掴むと強引に私を横に並べた。

私を認めた瞬間に沸き立っていた民衆がその勢いを失い、私は血の気が引くのを感じる。

城で少し表を歩いただけで、あの反応だった。これだけの数の人間に、あんな風に蔑まれたり、忌み嫌われるといった負の感情をぶつけられるのは私も怖い。

思わず体を竦めて身構えた…次の瞬間だった。

「王妃様だ！」

ここまではっきりと聞こえてきた声は、多分子供の声。次いでフィリーへの歓声とは比べ物にもならないけど、歓声…ともとれる、決して私を排除するものではない声がまばらに上がる。

「不入<sup>はいらず</sup>の荒地の向こうから、はるばるようこそ！ ！！！」

「早くこちらに慣れてくださいね！」

眼下で見上げてくる無数の眼に怯えつつ、その言葉を聞いて呆然としてみると、私の肩をフィリーがそっと抱いた。

「ほら、声にこたえるんだ。」

先ほどより歓声は明らかに減った。だけど、罵声どころか私を受け入れてくれるような声と、フィリーの後押しに私は笑顔が引きつらないように、強張りながら笑みを浮かべて手を振った。

せっかくファイリーンから上品な手の振り方を教わり、マスターしていたというのに、どうしていいか分からなくなって酷く遠慮気味な小さな手の振りになってしまう。

そんな私にも少なくはない人々が旗を振ってくれる。何だかレディール・ファシズに来て一番感激してしまって、私はこみ上げてくるものが耐えられなくなった。

視界が僅かに滲み、こんな大勢の人の前で泣けないと咄嗟に思いつつも、どうしようもできないでいると、後ろから声がかかった。

「陛下。そろそろ次の式典の刻限です。」

振り返ると先ほどまでの私同様、フィリーの後ろに控えていた文官の一人らしき青年が頭を下げている。

「分かった。」

それに一つ頷くと、フィリーはもう一度民衆に向かって一つ手を振った後、私の肩を抱いたままテラスを後にした。

テラスから城内に入っても私はまだ信じられない心地のまま、どこま放心状態でフィリーにエスコートされるがままだ。

そんな私を見てフィリーが困ったような顔をする。

「大丈夫か？」

「……はい。ただ、何とか信じられなくて」

レディール・ファシズにとってのオルロック・ファシズへの感情は、城の中でヒシヒシと感じたなくなっても感じてきた。それが民衆の前に出ることで、何百倍にもなって私を襲うんじゃないかという恐怖があった。

だけど、フィリーが横にいたからかもしれないけど、それなかった。歓声というほどのものでもなくても、まばらな声が上がった。

受け入れられたとは思わない。だけど、かけられた声に涙が出そうになるほどほっとした。

「城の中は信仰心の厚い教会の信者が多いから、必然的にオルロック・ファシズの人間であるお前の風当たりが強くなる。だが、一般の民衆はそうでもなかったりするものだ。」

「陛下」

世界王が軽々しく口にしてはいけないような内容を、さらりと言ったのけながらフィリーは私にハンカチを差し出してくれた。

ああ、なんで彼のことを好きじゃないかも何て考えた直後に、こんな風に急に優しくするの？なんて思いつつそれを受け取って目じりに溜まった涙を吸い取った。

ルッティが数時間かけて仕上げてくれた、フィリーが用意してくれた大人っぽいドレスに似合う、もはや私という面影が少ないメイクが泣いてしまっただけは台無しだ。

「いいだろう？ 実際、そうなんだ。オルロック・ファシズでもく神

を捨てた移民＞を一般市民は今となっては大して気にも留めていないだろう？それと同じだ。だから、怖いかもしれないが少しずつでもいいから、こうして民の前に立ってくれると助かる。」

「あ……」

そう言われて先日、リリナカナイから言われたことを思い出した。

（そうだ。私はレディール・ファシズにオルロック・ファシズを知ってもらったための王妃。必要なのは私ではなく、私がオルロック・ファシズの人間であるという事）

それに気が付いて、フリーが妙に優しいことにも納得してしまい、切ないような悲しいような気分とともに、自分の中で何かが冷めた。涙がすうっと引く。

「私は大丈夫です。今は少し急だったので驚いただけです。申し訳ありません。うまく民に答えることができなくて、次からはもっとうまくできるようにいたします。」

「いや、上出来だった。それにそんなに気負わなくていいんだ。ゆっくりでいい、時間はあるんだ。君のことを民はきっと受け入れてくれる。」

その言葉が優しいければ、優しいほど、私が惨めな思いをするとフリーは気が付かない。

彼の優しさの後ろにある思惑を知ってしまった今、それを純粋に嬉しいと思えなくなったことが悲しくて、でも、それに酷く安堵している私もいる。

知らずに彼の優しさに舞い上がって後で悶え苦しむよりは、きっとその方が私には楽だと思えるから。

「ありがとうございます。ですが、私は自分に与えられた役割くらいは、きちんと成し遂げたいのです。そうできるよう努めるくらいさせてください。」

だから、辛くとも悲しくとも私は笑える。

「アイルフィーダ？」

私の言葉の意味が分からなかったのか、問いかけるように名前を呼ばれる。

だけど、私が彼のその問いに答えることはない。

「次の式典が迫っております。お急ぎ願えますか？」

「：ああ。行こうか？」

タイミングよく文官に促されて私をエスコートしようとするフィリーに私は首を振り、腰を落とし頭を一つ下げる。

「申し訳ありません。以後は教会関係の式典ばかりという事なので、私は辞退させていただきます。」

「辞退：それではまるで君から断ったような言い方だな。本当は既にそう決まっていただけの話だろう？」

朝から始まって太陽は東から西に傾き始めた時刻だけど、式典やら行事やらは後半分くらい残っている。だけど、彼が言うように私がフィリーの横に立つのはその長い一日の中の半分もない時間だけだと『決まっていた』。

スケジュールを伝えられた時、教会関係の式典については辞退するようにと告げられた。表向きは参加してもいいのだけれど、空気を読んで辞退しろと迫られたのだ。

フィリーはその辺りの事情を知らなかったという事なのだろう。多分、それは教会側のお偉方の思惑なのだろうと察しはつく。

だけど、仕方ないな…とは思うのだ。国民や来賓に対するものと教会関係の式典では大きく意味が違うのだろう。

神を信仰する教会の式典に、オルロック・ファシズの王妃がいては大きな問題なのだ。

「陛下。お時間が」

「分かっている。」

私からそれ以上は言える言葉もなく、フィリーも考えるように一瞬黙って、二人で無言で見つめ合うような感じになると、急かせるように文官から声がかかった。

「いってらっしゃいませ」

なおも何か言いたげなフィリーを促すために、私はそう言ってもう一度頭を下げる。そういえば、朝は挨拶をすることも無いので、これをいうのは初めてなんじゃないかと頭の片隅で思いつつ。

「……いってくる」

かくして、時間がないのは確かなのでフィリーはそれ以上は何も言わないまま私を置いて足早に去って行った。

「それでは後宮までお送りいたします。」

フィリーを囲んでぞろぞろと去って行った一団とは別に、私を護衛するこれまた十数人の騎士がまだこの場に留まっていて今度は私を促す。

侵入者の襲撃以来、後宮に留まらず城全体がピリピリとした厳戒態勢なのだとルッティから聞き及んでいる。後宮もさらに警備が増員された。

そのおかげかあれから侵入者の襲撃は一度もない。同時にそれが捕まったという話も未だ聞こえない。

今日は世界王の誕生祭。

いつもの倍以上の人間が城の中にいて、侵入するにはある意味うってつけの日でもある。

（さて、今日はこのまま何事もなく済んでくれればいいけど）

先導する騎士の後に付きながら、そんなことを考える私の王妃としての役割は終わったけれど、実はまだ今日という日の仕事は終わったような。終わっていないような感じだったりするのだ。

何となく後宮に帰るのが億劫で、私は人知れず溜息を一つ付いた。



目がちかちかするほど煌びやかな空間の中、見渡す限りの人、人、人。

ここしばらく人の集まる場所に行くことがなく、元々そういった場所が苦手な私にとって、酸素が薄いと感じるほどの人混みは辛い。更に言わせて頂くと、目の前に対している人物に閉口している状態だ。

「とても素敵なドレス！それはどちらの仕立て屋で仕立てたのかしら？」

初対面にもかかわらず、挨拶よりも先にドレスの話をすると令嬢。彼女のような浮世離れした人が溢れる空間……レディール・ファシズの貴族たちの人混みに私は今紛れている。

彼女だけにかかわらず、この場所に紛れ込んで数十分の間に私は様々な人に話しかけられた。しかも、彼らは取り立てて私に用があったわけではなく、他愛もない世間話をしては去っていく。

偏見を持つのはよくないと分かっているけど、何て暇な人々なんだ、もっと他にやることがあるだろうと思わず心の中で苦言を呈す。（まあ、そんな中にいる私がいえる事じゃないかもだけど）

「こちらはティック・ア・リーセントのドレスとなります。お嬢様。

」

用はなくとも彼女を無視することもできず、さりとて、このドレスがどのドレスなのかなど知らない私が曖昧に笑っていると、後ろに控えているルッティがすかさずそう答える。

「ああ！やっぱり！！趣味が良いドレスだと思いましたわ。その鮮やかなブルーが貴方の金色の髪に美しく映えていますし、デザインも豪華！良くお似合いですわ！！」

（絶対、嘘！似合っている訳ないし）

心の中でそう断言しつつ、豪華な【ふりふりのドレス】を纏った、【金髪】の…王妃とは誰も思わないだろう姿で私は引きつった笑みを浮かべるしかない。

（はあ……なんだってこんな目にあってるんだろう、私？）

思いながらぼんやりと、ここに至った経緯を思い出す。



事の始まりは侵入者からの襲撃を受けた翌朝。

かなり深刻に悩んで、泣きながらいつの間にか寝たはずなのに、私の目覚めは酷く清々しいものだった。

その理由が疲れが取れたことで体が楽になったためか、寝て覚めたら全部忘れてしまう私が単純なだけなのか、はたまたその両方なのかは分からない。

かくしてそんな清々しさのためか、レディール・ファシズに来て一番の笑顔だろうと思える顔で私はレグナと対面していた。

「おはようございます。レグナ様。いい朝ですね。」

「…ああ、そうだな。」

私の言葉に同意を示しながらも、絶対にそうは思っていないだろう投げやりな返事をする、目の下に大きな隈を作って、明らかにお疲れモードのレグナ。

「あらあら、近衛騎士団長様ともあろうお方がそんなお疲れな顔をしていては他の方に示しがつかないのではありませんか？私も困ります。」

「あんたに心配されなくても、業務に支障はきたさねーよ。それより、さっさとあんたに報告してフィリーの警護につかなきゃならんのでな、さっさと終わらせてもらうぞ。」

この後も仮眠なしに働くらしいレグナに、若くないのにと思わないでもないが、そんなことを言って血圧を上げて倒れられても困る。私は大人しく彼の話に耳を傾けることにした。

「昨日の侵入者が言っていたく神を天に戴く者>についてだが、まあ、平たくいやあ、<名もなき十字軍>のチョー過激派って感じだな。まあ、正直、この情報もどこまで正確かは分らん。うちの情報部でも、ほとんど知られていねーようなマイナーな集団らしいかな。」

『チョー』の部分だけ妙に高いトーンになったレグナを半眼で見つめながら私はその意味を考えた。

<名もなき十字軍>とは教会に相対する民間軍事組織だ。

始めは教会の圧政に耐えかねた民衆たちによって結成されたテロ組織のようなもので、かなり過激なことを繰り返し、レディール・ファシズの内戦はそれによって激化したと言ってもいい。

しかし、近年、特にフィリーが世界王になってからは、その態度を軟化させ、同時にテロ組織というよりは軍事組織といった色合いを強くしつつある。

現在も教会からは目の敵にされ、小競り合いは続いているようだけれど、一般市民相手や貴族の護衛など正規の仕事を増やしているのだ。

「それは＜名もなき十字軍＞と関係があるということですか？」

「それは現在調査中だが、まあ、俺の勘から言わせてもらおうと多分関係ないな。」

「その根拠は？」

勘といっても、本当の意味の直感ではないだろう。

彼はうん十年、騎士をしているのだ。私の知らない情報の上での判断に違いない。

「＜名もなき十字軍＞は教会とは相対しているが、世界王の存在については容認している。そのおかげでフィリーが世界王になってからは態度が軟化した。しかし、＜神を天に戴く者＞の最終目的は教会だけじゃねえ、『世界王から神を解放する』ことにある：らしい。どこかで繋がっている可能性はゼロじゃねーが、＜名もなき十字軍＞としても同じにされちゃ困るんじゃないか？」

「：:そうですか。まあ、その辺りは推測の域を出ない訳ですね。」

レグナの勘とやらを否定する訳じゃないけど、その全てが確信を持って言えるとも思えない。

「それよりも＜神を天に頂く者＞は『世界王から神を開放する』という論理にどうやって行き着いたんでしょう？」

世界王は神の血を引く、神の代弁者という側面を持つ。

世界王を倒すことが、どうして神を開放することにつながるのだろうか？

「人間て奴はどこまでも強欲だ。どん底だった十年以上に比べれば、今は大分状況が楽になった。それが全て世界王の存在のおかげだとは誰しも思っていない……が、その存在が大きかったのは確かだろう。だが、それも八年もたてば更にもっともっと思うやつが現れる。現状は八年前に比べれば、良くなっていると言っても緩やかな改善になったしな。」

「それを気に入らないのがく神を天に戴く者」という訳ですか。要するに彼らは世界王に成り代わりたいという事なのでしょうか？」

『神を解放する』というのは建前で、その裏にはレディール・ファシズの全権を奪おうという野心が私には見え隠れしているように思えた。

それを率直に伝えるとレグナが疲れた顔で苦笑する。その顔は年齢よりも老けて見えた。

「世界王を廃する……か。さすがオルロック・ファシズ生まれの王妃様はいう事が過激だな。そんな事、俺は想像もしたくない。……だが、今時代の流れはあまりに不安定だと言わざるを得ない以上、あなたの言っている事を頭から否定はできないな。」

世界王を廃し、自分たちがレディール・ファシズの王となった方が上手くいくはずだ。そういう考えから世界王を、フィリーを狙っているのであれば、なるほど確かに過激だ。

オルロック・ファシズの代表や自治議員は選挙によって選ばれ、金持ちとか会社の社長とかが多いけれど、普通のどこにでもいる一般市民がその中に混じることだって現実にある。

だけど、レディール・ファシズにとっての世界王は神とさして変わりない、雲の上の存在だと私は認識している。少なくとも、この城の中の人たちはそういう風に彼を扱っている。

それを廃そうということは、もはや神や教会が植えつけてきたイデオロギーは、壊れ去ったことを意味する。

今は過激派として扱われているけれど、一步間違えばあつという間にそれは常識に取って代わるかもしれない。

オルロック・ファシズ生まれの私としては、神なんて見たこともないおとぎ話と同列の存在を、そこまで信心深く敬っているレディール・ファシズの人々を理解できない部分はある。

だけれど、それはレディール・ファシズにとっては歴史であり、存在の根幹そのものといっている。

それが揺らいでいる…結果、どう転ぶか分からない中、果たしてフィリーはどう舵取りをしていくのだろうか？

私が口をはさむところではないけれど、彼の立たされている立場の難しさを改めて実感する。

「……まあ、その話はここで私たちが論議しても始まらないでしょう。侵入者をとっ捕まえないことには分からない話です。問題はこれからあちらがどう出てくるか……これは今後分からないでは済まされない問題です。そちらについては何か考えがあるんですか？」

大体、目的が世界王を廃することならば、私を狙った理由がいまいち分からない。

オルロック・ファシズとレディール・ファシズが繋がることを阻止するためという可能性は捨てきれないけど、それより可能性としてあるのは……

「正直なところ、昨日の襲撃は囧じゃねーかと俺は思う。」

声を落としてそう告げたレグナと私は同意見なので頷く。

「順当に考えればそうですね。私が狙われていると思わせて私の

警備を厚くさせ、陛下の警護が手薄になるのを待っている……可能性はあると思います。ですが……」

だからこそ、昨日からフィリーが後宮に来ることを中止してもらうよう進言した。」

「何か引かかるところがあるのか？」

「自分で言うのも何ですが囧……というのに私はあまりに力不足ではないかと思うんですよね。」

そうなのだ。私やレグナの考え通り、昨日の襲撃はあくまで囧と考えて問題はない。囧だからこそあんなに派手な襲撃で、あっさりと退いたことも納得がいく。

だけど、果たして私に囧としての価値が如何ほどにあるかが引かかる。

「もし、私が普通にレディール・ファシズの人間で王妃だしたら、百歩譲ってまだ理解しましょう。警備だって嚴重になる可能性は十分あるでしょう。だけど、客観的に考えて私という王妃に陛下の警備を削ってまで新しい警備をつけると考えるでしょうか？」

「結果としてフィリーの奴はあんたの警備を増やすつもりだぞ？」

それはそれで問題だけど、今はそれについての論議は後回しだ。

「それはあくまで結果論です。増やさない可能性だってあるはずですよ。普通に考えるならとりあえずオルロック・ファシズに面目が立つ程度の警備を配備しても、間違っても陛下の警備を手薄にするなんて可能性はないはずですよ。それにオルロック・ファシズの王妃よりも遥かに確実に囧となる存在がいるのに、どうしてそれを襲わなかったのでしょうか？」

私が強く引つかかっているのはそこだった。

私という罔として不確かな存在より遥かに確実な存在がいるではないか。

「どういう意味だ？」

「要するに巫女リリナカナイではなく、私を襲った理由が全然わからないんです。私の方が襲いやすかった……と考えることもできるかもしれませんが、あれだけの手練れの侵入者だったら襲撃するくらいは可能だったはずです。」

「それは――」

私の言葉にレグナが考え込むように髭に手を当てた。

そう。別にリリナカナイの警護を厚くさせるための襲撃という結果だけを求めるなら、あの侵入者なら難しいことはなかったんじゃないだろうか？

リリナカナイ自身を傷つけることではなく、彼女を狙っている事実だけ知らればいいのだ。

それをわざわざ私を狙って、実際に攻撃まで仕掛けてきた。そのことに何か意味があるのだろうか？

「巫女リリナカナイを襲えない理由があったのか、それとも私でなくてはいけない理由が何かあったのか……そこに何か彼らの目的があるような気がするんですよね。」

「なるほど。だが、それもまた結局は侵入者をとっ捕まえなけりや分らない話だな。」

レグナからもたらされた情報が全くの無意味であるとは言わない。しかし、彼が言うとおりの結局、全ては侵入者をとらえてみない事には分らないだろう。



「では、侵入者を捕まえる宛てはあるのですか？」

警備が薄いとは到底思えないこの場所をあれほど堂々と襲撃してきた以上、どれほど警備を嚴重にしようと思まらないう限りの侵入者の影を気にし続けなければならないだろう。

「＜神を天に戴く者＞には＜名もなき十字軍＞のような実質の実体はない。構成員が誰で、どこでどんな集まりをしているのかも全く分からない以上、闇雲に街中を探し回るのは馬鹿げているし時間もねえ。だが、こっちもただ侵入者に怯えているだけじゃ始まらねえことは十分承知している。」

疲れが残るレグナの顔が、引き締まり騎士団長の顔となる。鋭い眼光が私に飛んだ。

「だから、罨を張ろうと思っている。ついでには王妃さん、あんたに一つ頼みがあるんだ。」

そんな訳で私はレグナの罫とやらに協力することとなり、結果、もうすぐ始まる世界王誕生祭のフィナーレを飾る舞踏会場にいる。

舞踏会場は城の中央に位置する巨大な建造物、世界塔の中。後宮以外を知らない私にとって、城の中核である世界塔は未知の領域だ。だけど、その事を差し引いてもこの塔の難解な造りは私の想像を超えている。

私の侍女に付く前は城の清掃をしていたルッティの話によると、天高くそびえ立つ世界塔には階層という概念が通用せず、多くの階段や廊下が入り乱れ、廊下を歩いていただけなのに気が付けば大分上層に上がってしまったていたり、階段を上っていたはずなのに気が付けば地上に降りていたりするという。

なので働いている人ですら迷うことは当たり前。簡易地図のようなものを皆が携帯し、確実な経路以外は使わないのが常識らしい。

遙か昔に神が建てたというこの建造物は、何百年も経った今でもその全てを明らかにされておらず、開かない扉や不自然な場所で行き止まりになっている廊下などが数えきれないくらいあるらしい…。

かくゆう、この舞踏会場である大広間に来る行程も、世界塔の10階という話を聞いていたけれど、実際は廊下を歩き魔導で動く各階で止まるはずの昇降機を使って上った後に、階段で1階降りた。ルッティに何で降りるのかと問うと、そうしないと着かないんですとにべもなく答えられた。

多分、それが大広間にたどり着くための経路なのだろうけど、本当に迷宮のような塔である。

まあ、世界塔の難解さについてはこのくらいにしておいて、私が

ここにすることが、何故に協力に繋がるかに話を戻そう。ちなみに私がその罠の肝という訳でもなく、本当にただの協力にすぎないのだ。

レグナの罠を簡単にいつてしまえば【罠作戦】。それもその罠は本物を使用するという大胆な作戦。

私も思った通りこの世界王誕生祭は侵入者にとって侵入しやすい日であるに違いない。レグナもまたそう考えた。

彼は今日この日、更に言えば一番人が城内に溢れる、舞踏会こそがその舞台となるのではないかと睨んでいる。

溢れるばかりの人々はみな豪華な衣装に身を包んだ招待された貴族しかいないとされているが、どれほど嚴重に来賓をチェックしたとしても、はつきりいつて侵入者の一人や二人紛れ込む可能性はゼロじゃない。

だからこそ、レグナは城内には必要最低限の警備を場内に配置しただけで、残り全ての騎士をこの場所に集結させた。

警備の騎士が多いのは言うに及ばず、貴族に扮した騎士も相当数この場所にいらしく、その圧倒的数を持ってフィリーに襲いかかろうとする侵入者を捕えるというのがレグナの作戦だ。

そして、その騎士の数を少しでも増やすために私はここにいます。

この舞踏会には不参加となった私は後宮にしか身の置き場がない訳だけど、私が後宮にいますと、先の襲撃理由に確信が持てない以上、襲われる可能性があるため後宮の警備は減らせない。

すると舞踏会に割ける騎士の人員が減り、レグナの作戦の効果も薄れてしまう。

そのためレグナは舞踏会に私を参加させることによって、後宮に割く騎士の数を減らしたかったのだ。

私が舞踏会場にいれば後宮の警備は手薄くても問題ないという、割り切っているというか、大胆というか……まあ、レグナの中では私はまだ狙われないという確信がある故の作戦だと言える。（これで

私が狙いだったら、私が舞踏会場にいるせいで、人々を巻き込むことになってしまう」

だけど、既に不参加を表明しているうえに、教会のお偉方が私の参加を許すとは思えなかったため、王妃としてではなく貴族として紛れ込むことになった。

おかげでルッティに完全におもちゃにされるような形で私は、絶対着ないと思っていたクロゼットの奥に押しやっていたヒラヒラでフリフリのドレスを着て、髪の色まで変えてここにいる。

初めはそれに若干の抵抗をして見せたのだけど、『それが嫌でしたら、男装という手もありますか?』というルッティの妙にウキウキとした様子に何となく危機を感じて、私は今の姿に変装させられた。

ちなみにどうして金髪なのかといわれればレディール・ファシズの貴族は総じて金髪が多いから：というか、その度合いや風合いは違ってもそのほとんどが金髪だから。

それには理由があって、レディール・ファシズの貴族のそのほとんどが元をたどれば世界王の子孫だというから、必ず金髪である世界王の子孫の彼らは総じてそれが多くなる訳だ。

私やルッティのような黒や茶の髪は世界的に見ればありふれた色だというのに、レディール・ファシズの貴族たちの中ではあまりに異質になってしまうのだ。

（まあ、おかげで金髪になっただけで違和感なく貴族たちに紛れ込めているんだけど）

思いながら延々と留まることを知らない令嬢の話に耳を傾け続ける私。

「私などいつもドレスは白!と決めておりますのに、今回はそれが

禁止されていますでしょうか？おかげで似合わないピンクのドレスを着る羽目になりましたの」

それを聞くともしに聞いていたが、そこで私は首を傾げた。

「どうして白ではいけないんですか？」

白いドレスを避ける理由が分からなくて問い返すと、令嬢は大きさに驚いた表情を浮かべる。

「あら！ご存じないのですか？では、ドレスを白にしなくて本当に良かったですわね。もし、白だったら貴方、二度と社交場には出てこれなかったところですよ？」

別に出たくないしと思いつつも、まだ世界王が登場しないために実際は始まっていないう舞踏会までの時間つぶしに彼女の話に付き合うことにする。

「そうなんですか。申し訳ありません。私、実はあまりこういった場所にはあまり出たことがなくて」

「まあまあ、それで連絡を受けていないんですのね。では、私がお教えして差し上げますわ。今日は結婚式なんですよ。」

「え？」

世界王誕生祭じゃないの？

「もちろん、陛下の誕生日を祝う舞踏会というのが大前提です。ですが、今回は巫女様の周りの方々が色々動かれたようで、ほら、先日、陛下は盛大なご結婚式を上げられたでしょう？」

「え、ええ」

盛大：私にとっては好きな人と結婚したというのに、心から喜ぶことができなかった苦い思い出。祝い事だというのに、参加した誰一人として心からの笑顔は存在しなかった。

だけど、令嬢はその時の結婚式の話を蒸し返している訳じゃない。何となく雲行きが怪しげな話の展開に、私は笑みを浮かべながら顔を引きつらせる。

「陛下と巫女様は強く想い合われているのに、それぞれの立場のためにご結婚するのは叶わない運命。先日の結婚式では気丈にふるまわれていたけど、巫女様はさぞお心を痛めていたと思いますわ。」

じとりと手袋の下で汗がにじみ出てくるのを感じる。

「お話の途中で申し訳ありません、私たち——」

「ルッティ、少し黙っていて。」

まだまだ続く令嬢の話にストップをかけようとするルッティを、振り返らずに私は黙らせた。

一瞬、そんなやり取りに戸惑った様子の令嬢に私は笑って先を促した。どうせ、舞踏会に参加するならこの話を聞こうが聞くまいが同じことだ。

「なので巫女様をお慕いする者たちの間で正式な結婚式は無理でも、それに似たことをできないかというお話になったようで、この舞踏会でサプライズ結婚式を企画されているらしいわ。私も詳しくは存じ上げないのだけど、お二人には白い衣装を纏っていただいて、教会の司祭様が結婚の宣誓儀式を執り行われるそうです。なので、白い服は今回は禁止という訳ですの。」

結婚式において白い服はタブーだ。それは花嫁のドレスの色。そして、聖なる巫女の色だったりする。

だから、彼女はフリーと私の結婚式の時にも白い巫女の衣装を纏っていた。それを咎める者は誰もおらず、むしろ花嫁衣装を着る私の方が邪魔者のような扱いを受けた。

あれは私の結婚式だったけど、フリーの横に立ったりリナカナイの姿は、私が寄り添うそれよりもよほど神々しくお似合いで、それを見ただけで辛かったというのに、今度は二人の結婚式？

「なるほど。よく分かりました。それは巫女様もお喜びでしょうね？」

せめてもの意地で『世界王陛下もお喜びでしょうね』とは言わない。

想い合っている二人が立場上、結婚式を挙げられないうえに第三者がうっかり妻の座に収まってしまったのだ。

リナカナイも会った時は何も言っていなかったけど、思うところはあったに違いない。

だけど、このイベントがあると知っていて彼女が私に舞踏会にできるように勧めたのであれば、私は彼女に対して心底理解に苦しむ。むしろフリーが私を舞踏会から遠ざけたがっていた事に納得する。

別に私が知らないところで、私に知れないようにやるというのなら、元々私が二人の間に割って入ったようなものだから、嫌だけど仕方がない。そう思う他、私に残された選択肢はない。

だけど、それを私に見せつけようとしているのであれば、それは私に対する悪意である他のなんなのだろう？それに対して私は怒ればいいのか？泣けばいいのか？…馬鹿にするのも大概にして欲しい。

「それはそうなんじゃありませんこと？まあ、私も巫女様を直接存

じ上げているわけではありませんので詳しくはしりませんけど。」  
「うふふ。そうですね。申し訳ありません、変なことを伺ってしまつて。」

にこにこ笑顔で言いながら、自分の声が全然笑っていないことに気が付く。令嬢も私が放つ異様な雰囲気気が付いたのか、さきほどまでにしつこさが嘘のようにあつという間に私の前からそくさと去って行つた。

同時にそろりと何食わぬ顔で私の傍を離れようとするもう一つの気配。

「ルッティ？」

「はい」

ちらりと後ろを振り向きながら名を呼ぶと、体をびくつと震わせる様はまるで怯える小動物。いやねえ、何も彼女に怒っている訳でも、そもそも怒っている訳でも私はないのよ？

「今の話、知っていた？」

うん、怒っている訳じゃない。ただ、どうにも収まりのつかない感情というやつが、私の声を妙に平坦にさせるのだ。

「も、申し訳ありません。わたしも、その話はここに来るまで全く存じ上げず。どうやら、本当にごく一部の貴族の方の中だけで計画されていたことのようにで。」

「そう：なら、私も貴方も知らなくて当然ね。」

例え知っていたとしてもルッティの立場上言いづらいことだったろう。



「だけど、レグナ近衛騎士団長も人が悪いわね。それがあると知ったら私が協力しないとでも思ったのかしら？」

これは一種の八つ当たりかな？とも頭の片隅で思ったけれど、私の言葉にできない感情の方向は気が付くとレグナへの苛立ちへと変わりつつあった。持っていた扇がぎしりと音を立てて軋む。

「そ、それは私にもっ分かりかねます。……ですが、恐らくレグナ様もそれをご存じないのではないのかと私は思います。」

「…どうしてそう思うの？」

「いえ、私も本当についさっき、他の方が噂をしているのを聞いて、この事を知ったのですが、潜入されている騎士の方もそれを聞いて慌てた様子だったので、レグナ様も知らなかった可能性が高いのではと。」

それを聞いて扇を持っていた手から力が抜けた。同時に頭が切り替わる。

「近衛が知らない？そんなこと可能なの？」

「どうやら貴族間でも今日まで箝口令が引かれていたようです。城の中の人間もほとんど知らされておらず、知っていたのは箝口令を引かれた招待客と、企画をした巫女の周りの人間だけ。」

噂を聞いただけという割には、ルツティの情報量は少なくない。恐らく箝口令が舞踏会場に入った途端に解かれたということなのだろう。話好きの貴族たちは我慢できずに話したくて仕方ないに違いない。

それより問題は近衛も知らないイベントの企画、嚴重な箝口令、それは果たして本当にフリーとリリナカナイのための善意からの

催しなのだろうか？

騎士が慌てた様子だったという事は、恐らくすでにレグナには話が伝わっているだろうけど、だからといってこの土壇場で舞踏会が中止になるとも思えない。

だけど、警備の問題上、何の情報もないイベントを容認することはできないだろう。

「その企画：誰がしたかは分かる？ 巫女の取り巻きだと言っていたけど、私にはそれが分からないわ。」

「ああ、それなら――」

ルッティがその人物の名を告げようとした瞬間に、入口では新たな来賓者の名前が高々に読み上げられる。私たちはこっそりと会場入りしたけど、招待された貴族は皆が名前を呼ばれて会場入りするのだ。

「アルスデン伯爵夫人様、ご到着！！！」

舞踏会開始時刻まであと5分。ずいぶんとぎりぎりの到着だなど、つい数十分前まではひっきりなしだったけど、久々に聞く声にも私もふと視線が入口に吸い寄せられる。

同時にその名を呼ばれたとたんに、周りの貴族たちが一斉に色めき立つ。

（な、なに？）

たくさんの人が一気に入口に駆け寄り、私は一瞬だけドレスを着た女性の立ち姿を見た気がしたけど、その姿はすぐに見えなくなつた。

「今、名を呼ばれたアルスデン伯爵夫人様がその発起人だと噂では聞いております。」

その言葉に私は僅かに目を細めて人混みを見る。

人混みの中心にいる、一際輝く金髪の艶やかな女性がそこで笑っている。年は私よりもいくらか上だろう。真っ赤なルージュが似合いい、色気が匂い立つような大人の女。

彼女の外見は妖しいまでの美しさ、その一言に尽きた。

「あの方はファイリン様の実姉でいらっしゃり、十年前にアルスデン伯爵様に嫁がれましたが、7年前に伯爵様はなくなっており現在未亡人でいらっしゃいます。伯爵様が信心深くいらっしゃり、亡き後は夫人がそれを引き継ぐ形で教会にも強い影響力があるとか。」

「そう：伯爵様は事故か何かで？」

「いえ、ご病気でと窺っています。」

「それは残念だったわね。」

彼女の夫で7年前という事は、かなり若いときに亡くなったという事だ。

「いえ、伯爵様は享年78歳でいらっしゃいましたので。」

「……なるほど。」

金持ちの貴族とورا若き令嬢の政略結婚。詳しくは知らないけど、下世話な想像は容易につく。

信心深く金と力があつた伯爵からすべてを引き継いだ未亡人：彼女は一体どういうつもりで、この企画をしたというのか？

別に貴族の道楽だけならばいいのだけれど、私は疑いすぎなのだろうか？

そんな風に考えながら公爵夫人を窺っていると、高々に声が上がり、楽器による音が響く。

「フィリーー世界王陛下と巫女リリナカナイ様のご入場です！！！」

静まり返り、大広間に集まった貴族たちが腰を曲げ頭を下げる。私もそれに倣った。

大広間から歩き出るまるで一枚の絵のように美しい白い衣に身を纏った二人。にこやかにほほ笑みながら、まさに幸せな新郎新婦のように二人は舞踏会会場に現れたのであった。

### 6-3 (後書き)

まずは、一つお詫びを。

読者様からの連絡で私も知ったのですが、携帯からの閲覧されている方は拍手が見えないことが分かりました。私の確認不足と至らなさから、携帯から閲覧されている方にはご不便をおかけしてしまつて、本当に申し訳ありません。

ですが、多分、携帯から拍手を送って頂くことはできない…と思います。(ごめんなさい！もしかしてできるかもですが、私には方法がよく分からなくて)

パソコンからは不具合などの連絡は聞いておりませんので、もし拍手小話に興味がある方は、お手数ですがパソコンにて閲覧をしてください。お手間を取らせますがよろしく願います。

また、ご要望とうががありましたら、いつかどこまでまとめて小話は番外編的な感じで表に出せたら(そこまでするような内容でもないかもですが)とも思っております。

本当に申し訳ありませんでした。

（やっぱり、王妃として参加を辞退したのは正解だったな）

ぽつりと心の中で呟いた言葉は、負け惜しみでも、強がりでもない掛け値なしに私の本音。

ファイリールから地獄の特訓を受けたのだから、誰かと……うん、ファイリーと踊りたいという気持ちがない訳じゃない。だけど、

「ああ、本当にお美しいわねえ」

「まるで互いが互いのために存在しているかのように、似合いのお二人だ。」

「あれほど見栄えのする世界王と巫女も珍しい。」

囁きあう貴族たちの言葉を聞きながら、大広間で立った二人で踊るファイリーとリリナカナイをただただ見つめているしかできないでいると、次第にそんな気持ちは萎んでいった。荒れ狂っていた感情も不思議と静まる。

この感情の動きに何と名を付けていいのか、私にもよく分からないけれど、近い言葉は……諦め？ 失望？ 色々な感情の名前は思い浮かぶけれど、どれも今の心情的を得た言葉ではない気がする。

互いに白い婚礼衣装（まで豪奢とは言わないかな？）を身に纏い、広い大広間の中央で人々の祝福の眼差しに見守られながら、息の合ったダンスを優雅に舞う二人。

それはまさに絵に描いたような、誰しもが見とれてしまう美しさ。シャンドリアの瞬く光に照らされ輝く純白の衣装、ふわふわと舞う金と銀の髪、絡み合う青と赤の瞳……全ての調和がとれ、何人も二人の世界を邪魔することを許されないような、絶対的な美しさと神聖な雰囲気には私は完全に飲まれていた。

だから、この場に王妃として存在していないことを安堵してしま  
うんだろう。

この光景を見てしまったら、リリナカナイと入れ替わった自分を  
想像したとき、あまりの場違いさに羞恥心で死ねるような気がする。

（今はそんなことで打ちひしがれている場合じゃないわ：＜神を天  
に戴く者＞がフィリーを狙うなら今が絶好の機会のはずよ）

躍る二人に目を奪われたのは数十秒のこと、醜い感情を振り払う  
ように首を振って気持ちを切り替えると、私は二人に見とれる貴族  
の人混みを縫うように歩き出した。

踊っている間はさすがに騎士も張り付いて警護する訳にはいかず、  
少し離れた場所で見ているしかない。だからこそ、フィリーを狙う  
絶好の機会なのだ。少なくとも私ならこの時を選ぶ。

「アイルフィーダ様?!」

「ルッティ、さっき言っていたアルスデン伯爵夫人が、どの辺りに  
いるか分かる?」

急に人混みを歩き出した私に慌ててルッティが付いてくる。

そんな彼女に声はかけつつ周囲を見回すけど、溢れかえる金髪に  
豪華な衣装いという誰も彼もがよく似た他人みたいな集団の中で、  
知らない人物を探し当てるといのは難しい。

「私もこの人込みでは分かりません。先ほども気にされていまし  
たよね?何かあるのですか?」

「あるという確信はないわ。だけど、何かがある可能性はゼロじゃ  
ない。何が起ころうという漠然としたものを不安に感じるより、  
可能性を一つ一つつぶしていた方が私は気が楽なの。」

「???」

二人のダンスの間が絶好のチャンスであるという事実は変わりない。それについては、山ほどの騎士が警戒している現状で私ができる事は少ない。

それと同じくらい現状で問題なのは、何が起こるか分からない疑似結婚式というイベント。

何がどのように進んでいくか分からない上に、その思惑が見えない。アルスデン伯爵夫人とやらが信用できるかも、私には不明である中、彼女を監視しておくという事は無駄になる可能性も大きいけど、現状では必要なことに違いない。

もっとも、そんな事はレグナだって考えてはいるだろう。

だけど、似合いすぎる二人を見ているしかないよりは、しなくてもいい心配をしている方が、数倍気持ち的には楽なのだ。

「仰っている意味は分かりませんが、要するにアイルフィーダ様はこの現状を打破したいということですか？」

「打破？」

「でしたら、いい案がございます!!」

問いに諾と答える前にルッティの表情が輝いて、私の両手を掴んだ。その勢いに押された私は高いヒールによるめいて、近くの貴族にぶつかってしまう。

周囲に白い目で見られて、頭を下げながら私は自分の世界に完全に入り込んでしまったルッティを引きずって貴族の集団から抜け出す。

今は二人が躍っているのをたくさんの貴族が囲むようにしているので、人混みさえ脱してしまえば広々とした大広間には護衛の騎士くらいしかいない。

「いきなりどう——」



「当て馬でございます、アイルフィード様！」

「はあ?？」

きらきらと可愛らしい笑顔のルッティに私は盛大に顔を顰めた。

「幸いに今ここには当て馬にうってつけの殿方が、そこかしこにいらっしゃるではないですか！陛下との現状を打破するために、ここは一つ他の殿方と親しげにしている様子を見せつけて焼き餅の一つでも陛下に焼いていただくのです!!」

(……はじまっちゃった)

先日の一件からどうやら籬が完全に外れてしまったルッティは、基本的に侍女としての仕事を完璧にこなしてくれるが、こうして妄想スイッチが入ってしまうと状況も他人の言うこともまるで関係なくなつて、自分の世界に入り込んでしまう。

基本的に害はなく、見当はずれな事ばかりいう彼女の言動が面白くていつもは聞いてあげているのだけど(聞いているだけで実践したことはない)、今はその時間はない。

「はいはい。その話は後でね。それより貴方もアルスデン伯爵夫人を探し——」

「ご気分でもすぐれませんか？」

ルッティを軽くあしらって伯爵夫人を探しに行こうとすると、貴族の人混みから抜け出した私を心配してくれた誰かに背後から声をかけられる。

「あ、いいえ。大丈夫で……す?」

その声に振り返りながら私の声が、思わず最後に上ずって疑問形のようになってしまふ。何故なら声をかけた人物が見知った人物であつたため驚いたのだ。

だけど、それは相手も同じだったらしい。

「王妃…？」

相手も疑問形なのは、私が金髪で先日会った時とはまるで印象が違うからだろう。だけど、顔は基本的に同じなので、相手にはすぐに私だと分かったらしい。

別にそれを隠す相手ではなかったので、問われて一つ頷く。それを見て先日見た時も派手だと感じたけど、今日が舞踏会だからか、より一層華やかさに磨きがかかった相手が酷く大げさに目を見開いた。

「どうして、ここにいらっしゃるんですか？」

その言葉の咎めるような言い方に、私は相手に先日感じた凶悪な感情を思い出す。

途端に自然と顔に笑みが作られるのを感じて、私って変なところで強いなあと他人事のように感心する。

「私がここにいるのはレグナ近衛騎士団長の采配です。疑われるなら確認して頂いても構いませんよ？ランスロット様。」

その笑顔と笑っていない声音に先日の一件を思い出したらしく、彼、ランスロットは華やかすぎる顔を引くつかせる。

「そ、そうですか。……それはそれは災難でしたね。」

それから何とか崩れた顔を整えて、見るからに好青年の皮を被り直したランスロットと対しながら、私は今更遅いのにと心の中で忍び笑う。

だが、どうやらランスロットとしては先日の雪辱を晴らしたいらしい。

「貴方という人がありながら、陛下も罪な方だ。そう思いませんか？」

どう聞いても嫌味にしか聞こえない言葉を吐いて、ちらりと貴族の人だかりに視線を送る。それに釣られて視線を送ると、ちょうど二人のダンスが終わったらしく、楽団の演奏が終わり、大きな拍手が割れんばかりに響いた。

「貴方もこの状況は想像できたでしょうに、わざわざお二人の仲睦まじい様子を見に来るとは…遅いと言いますか。図太いと申しますか。」

「あ、アイルフィーダ様」

畳みかけるように言葉をつづけるランスロットはお伽噺の王子のように優しげで優雅だ。だけど、その言葉は先日会った時と同じように、丁寧に話しているはずなのに全く敬意の感じられない、むしろ私を傷つけたくて仕方がないという意識が強く感じられる。

堪らずルッティが声を上げるので、安心させるために振り返ると、想像とは違って酷く楽しそうな顔をしている彼女がいた。

「ちょうどいい当て馬ですよ！」

しかも、弾んだその声（小声だけど）に思わず脱力。まだ、妄想スイッチは入りっぱなしだったようだ。

まだ、ごちゃごちゃと妄想を続けようとするルツティはこの際、無視しておくに限る。（無視しておいても、勝手に一人で盛り上がってしてくれるし）

私はダンスが終わり、鳴り止まない拍手を受けながら広間から玉座のある壇上に上がる二人に目を向ける。

（結局、何もなかったわね。これから……？それとも、また別の機会を狙っているの？）

侵入者どころか、騎士が動く気配もなかった。何もないに越したことはないけれど、あまりの静けさに不気味な印象すら受ける。

だけど、まだ疑似結婚式とやらがあるはずだし、こんな所で足止めにあっている場合でもないから、さっさとアルスデン伯爵夫人を探しに行かなくてはと思っていると、黙った私に何を勘違いしたかランスロットはなおも言葉を続けてくる。

いい加減、私にかまっている暇があったら警護の任に戻れと言いたくなった。

「まあ、貴方も陛下のためだとレグナ团长殿に言われては従うしかありませよ。考えてみれば貴方もお可哀想な身の上だ。たった一人、孤立無援の状況で頼りたいはずの夫には既に大切な人がいる。」

今まで面と向かって言われたことも無い、容赦のない事実。自分では何度も考えたことだけれど、他人に言われるとまた違った印象を受けるものだ。

——ペキリ

握りしめ続けていた扇から、何かが折れた音がした。

「だけど、貴方は世界王妃。世界王のためだけに存在しなければならない存在。ああ、その心をお慰めできればいいのですが!!」

最後は自分の言葉に酔ったのか、悶えるように身体を捻るランスロットにルッティからぽつりと『ナルシストの上にうざいキャラですネ』と、冷静かつ正確なツッコミが漏れる。

それにほんの少し笑いを誘われながら、それよりも私の中でどうしても我慢ならない言葉に心が先日以上に苛ついているのを感じた。

（あーあ、私をまた怒らせたね……さて、どうやって仕返ししてあげようかしら？ やられたものは三倍返しが鉄則よね？）

なんて、あっけらかんと考えている視界の端に、ダンスが終わったために散り散りになっていく貴族たちが私たちの傍にもやってくるのが見えた。

彼らが私たちの声を聴く事ができる距離に來たのを確認して、私は唐突に顔を手で押さえるとわあっと、下品でない程度に泣き出した。……ちなみに涙は出ていない。

「酷い！ランスロット様、そのお言葉はあんまりです!!」

さして大きな声ではないが、どうみても尋常ではない私の様子にぎよっとしたのは対しているランスロットだけではない。

周りの噂好きの貴族たちが一斉に私たちの方に注目するのを感じた。

「な!?!え?!?!」

動揺して騒ぐ私を宥めようとするランスロットを交わし、控えていたルッティに抱きつく。

果たして妄想大好きルッティが、この面白い状況に乗らないはずもなく：

「ああ、お可哀想なお嬢様！！女性に対するこのお言葉、騎士として、いいえ！人間として何と下劣な態度でしょう！！」

「な、何を言う！！」

いささか大きな言葉のような気もするけど、概ね私のやりたいことを理解しているらしいルッティの非難に、顔色を変えるランスロット。

しかし、現状はあまりに彼にとって不利だ。

遠巻きに、だけど、確実にこちらを窺うたくさんの視線。囁かれる言葉。

「あれは巫女付のランスロットか？こんな所で女と会っているとは、それでも騎士か？」

「あの色男め、こんなところまで痴話喧嘩か？」

「誰なのかしら、あちらの令嬢は見覚えがないわね？」

ここにいる貴族が私を王妃だと思うものは誰もいまい。騒がれ、噂されて困るのはランスロットだけだ。

いい気味だと思いつつ、ふと生ぬるい貴族の視線ではなくて、強い何かを感じて私は伏せた顔を少しだけ上げる。

(……フィリー？)

その視線の先にかなり離れた距離にもかかわらず、フィリーがいることに心臓が大きく高鳴る。

まさか自分に気が付いている訳がないとは思いつつ、こちらにしっかりと視線を合わせられているような気がして、私はルッティから

離れて彼の方へ一步踏み出そうとして、後方へ引つ張られる。

「こっちへ来い！」

居たたまれなくなったランスロットが場所を移すために、私の腕をとって歩き出す。

「離し――」

フィリーの方へ意識を持って行かれていたため驚き対応が遅れるが、その手を振り払ってもう一度フィリーの視線を確かめようとした瞬間に、突然ファンファーレが鳴り響く。

『!?!?』

突然のことに周囲の貴族たちも私達から意識がそれて、何が起ったのかと辺りを見回す。

「お騒がせして申し訳ない！これより世界王陛下と巫女様に対して、我々から細やかなサプライズをお送りしたいと思うが皆様如何かな？」

張り上げられた男の声に広間の貴族たちから歓声が上がり、一斉に壇上に人々が群がりだす。それに伴って、私とフィリーの間の視界は貴族たちによって遮られてしまった。

## 6-4 (後書き)

拙い物語を読んで頂いてありがとうございます！

いつも後書きと活動報告をまめに書いていますが、内容が重複することも多いので、今後は活動報告に後書きや今後の予定などをお知らせしたいと思います。興味がありましたら、そちらもよろしく願います。



上がった声に、貴族らの意識が玉座へと集中し、騎士らが一斉に殺気立つのが分かった。

わらわらと玉座近くに集まる貴族たちを油断なく見つめ、彼らに気が付かれるように紛れながら騎士らも玉座近くに陣取る。

大広間はかなりの広さがあるが、玉座の前にほとんどの人間が集まるという異様な状況が出来上がる。

その様子をいくらか離れた場所で観察していた私だけれど、ふとまだランスロットに腕を取られたままであることに気がつく。

手を離せと言おうとして背後のランスロットをみると、妙に真剣な表情で彼は玉座を見ている。

彼も騎士の本分を思い出したかと思ったけど、その割には表情が緊張というよりは憎々しげな表情のように思えて、私はかける言葉を一瞬だけ飲み込んだ。

「……くだらない茶番劇だな。」

「今のはどういう意味ですか？」

こぼれた言葉は腕をつかまれている近くにいたから拾えた小声だった。現に少し離れた場所で、玉座そっちのけでこちらを興味津々の様子で見ているルッティには聞こえている様子はない。

ランスロットも無意識のうちの言葉だったらしく、問いかけた私に虚を突かれた顔になる。

「ああ、王妃様…無礼を働きまして申し訳ありません。ですが、貴方もいけないんですよ。あんな風に悪役にされては私の立場も――」

言いながら丁寧に私の腕から手をどかして、一礼するランスロットに私は詰め寄る。

「そんな謝罪は結構。それより『茶番劇』……って言いましたよね？それはどういう意味なのか教えて頂きたいわ。」

彼が言葉にした『茶番劇』というのは、恐らく今まさに始まるうとしている疑似結婚式についてだろう。

考えてみれば彼は巫女付の騎士なのだから、私が知らない事を知っている可能性は大きい。

「意外ですね。普通は聞きたくないものじゃないんですか？」

「真面目にこのサプライズに参加するよりは、『茶番劇』っていう言葉の意味を教えてもらっている方がマシだというだけです。どうせ舞踏会が終わるまでは帰れないですし」

リリナカナイが喜ぶだろう企画に、巫女付の騎士であるランスロットが乗り気でないことも気になる。

「貴方も物好きだなあ。まあ、いいですよ。貴方を守っているという大義名分でここにいられるなら、空気の薄そうなあの人混みにいるより余程いい。そうですね、これは簡単に言ってしまうば『ごますり』なんですよ。」

「『ごますり』ですか？」

そうして、私がランスロットの言葉を繰り返したところで、拍手と共に再びファンファーレが鳴り響く。

「世界王と巫女は結婚することは許されませんが、愛を誓い合って

はいけない理はありません。強い絆で結ばれておられるお二人の愛の宣誓を持って、我々はその証人となるのです!!」

私たちが話している間にも疑似結婚式は着々と進んでいるらしい。

『愛の宣誓』という言葉に何も感じないわけではないけど、ここで私が出て行ったところでただ空しいだけだ。

「この声の主。枢機卿ティーベボルト・アインのアルスデン伯爵夫人に対するごますりですよ。まったく、あのおっさんも聖職者のくせにやるのが露骨で困るんですよ。」

「どういう意味?? そもそもこれは伯爵夫人が発起人だと聞いているけど、それがどうして彼女に対するごますりになるの?」

むしろ誰かに対する伯爵夫人のごますりだと考えるのが、自然な流れではないだろうか?

「簡単なことですよ。考えてみてください。この時期に近衛を始め巫女様や陛下も知らないイベントをするなんて、はっきり言って狂気の沙汰だ。本来は近衛や巫女付が連携して世界王や巫女を守ってしかるべき状況なのですから。」

ランスロットの話を聞きつつも、私は進行する疑似結婚式を無視することもできずにいた。

視線は彼に向きつつ、話も聞いているつもりだけど、意識の半分以上は聞きたくない玉座の方へと向けられる。

だけど、幸いにも『愛の宣誓』とやらにすぐには移行することも無く、枢機卿の講釈のようなものが続いていた。

「だけど、伯爵夫人はそれをやれと言ってきた。その方が陛下や巫女が喜ぶに違いないからと。当然、私たち騎士や近くに使える女官

私たちは大反対しましたよ？そのために巫女を危険な目に合わせるなんて、馬鹿馬鹿しいですからね。だけど、アイン枢機卿はそれを聞き入れることにした。伯爵夫人のご機嫌をとるために、巫女を危険に晒す事も厭わなかったんです。愚かだとは思いませんか？」

そう言って皮肉に口元を歪めるランスロットは、王子面を完全に放り投げている。

「結果、枢機卿と彼に従う巫女付の女官長は伯爵夫人の持ち掛けたこの企画を、完全に秘密裏に準備することを私たちに命じました。」  
「それに従ってしまったの？」

まだ若い下っ端のランスロットに詰め寄ったところで仕方がない事だろうが、そんなごますりのために、フィリーたちを危険に晒そうなんてその枢機卿の度量が知れる。

「巫女付の騎士や女官は、世界王の臣下ではなく、教会に所属する人間です。枢機卿に逆らうことは、私たちにとっては教会に逆らうことに等しい。今回、それでも巫女のためにと近衛にこの事を話そうとした女官はあつという間に職を奪われ、家族ともどもでっ上げられた罪で投獄されました。」

「教会の腐敗は深刻ね。反教会陣営の台頭もありながら、どうして教会が排されないのか私には分かりません。」

権力者が弱者を虐げ、その罪をもみ消しすらできるなんて聞いているだけで虫唾が走る。

私は未だにフィリーたちそっちのけで話し続ける枢機卿…姿が人だからで見えないけど、その方向を睨み付けた。

「弁明はしませんよ。そのために民衆の教会への信頼が揺らいでい

るのは間違いない。だけど、その数と同じくらい教会を信仰する民衆は存在する。それがある以上、教会という存在は無ければならないものなんだと私は思いますけどね。」

「……軽々しく口にしていい事柄ではないですね。ごめんなさい。」

教会に属している人が悪いことをしているからと言って、当たり前だけど教会の教えが悪いという事には直結しない。

王妃という立場上、それは言うべき言葉ではなかっただろうし、そうでなくとも教会を信仰する人々に罪はないのだから、言っていない言葉ではなかった。私は素直に謝る。

「……貴方みたいな気の強い女性でも謝るんですね。」

すると珍しいものでも見たと言わんばかりにランスロットが目を見開いて驚いている。

「当たり前でしょう。悪いと思ったら謝りますよ。私は。……いい加減、その開いた口を閉じないと、さっきよりひどい目に合わせますよ?」

「そ、それはやめてください!!」

冗談抜きで驚かれていることに居心地の悪さを感じつつそう言うと、本気で泣きそうになっているランスロットにいつそ哀れな感情すら浮かぶ。

私は気持ちを切り替えるように、咳払いを一つすると話を元に戻した。

「貴方たちが仕方なく、この企画を秘密裏に進めてきたことを納得はしませんが、理解はしました。ですが、結局のところそのごますりとは一体何のためなんですか?」

「来年の春、次期教皇を決める選挙。70人い枢機卿の中から選ばれるんですが、実質はアイン枢機卿を含む5人がその候補です。彼らの中のほとんどが今はそれしか考えていないでしょうね。そんな中で財力のある貴族で、教会にも影響力があるアルスデン伯爵夫人の力添えは喉から手が出るほど欲しいんですよ。」

唸るように吐き捨てるランスロットに、私の印象を改める。

何も考えていない上面だけのボンボン騎士かと思いきや、一応考える頭を持ち、それなりに教会の現状を憂いているらしい。かといって、彼の私に対する態度の悪さに目を瞑るつもりはないが。

それにしても、想像するに容易過ぎるごますりの理由に呆れつつも、同時に自分の無知さ加減にもうんざいりした。

次期教皇の選挙の時期も知らないなんて、王妃としてはまだまだ勉強不足だと言えないようがない。

フィリーの横に堂々と立つ日がくるのかは分からないけれど、それでも、この場所で生きていく以上、無知のままでは自分の身も守れない。

明日からはファイリーンにその辺りも聞いていこうと思いつたところで、枢機卿の話になってすっかり抜けていたアルスデン伯爵夫人のことを思い出す。

「ちなみにアルスデン伯爵夫人がどうしてこんなサプライズを持ちかけてきたかなんて：知らないですか？」

「まだ、知りたいんですか？」

「ええ、まあ、知りたいというか（疑っているというか）、そもそもどうして伯爵夫人はそんなに秘密裏にすることに拘ったんで――  
――？」

言葉の途中で地面が揺れたような気がして、私は言葉を止めた。

「どうかしましたか？」

周囲を見回す私にランスロットが不思議そうに声をかける。それを無視して周囲を探るけど、揺れは何も感じない。気のせい…のようだ。

「ごめんなさい。何でもないの、それでその辺りの事情は知らないんですか？」

「私も伯爵夫人からの話を直接聞いてはいないので、夫人の思惑までは分からないですね。まあ、貴族なんて暇を持て余した変人ばかりですから、単なる気まぐれじゃないんですか？」

「そうですか。ありがとうございます。じゃあ、行きましようか、ルッティ。」

知らないものは仕方ない。今回の事とは関係ないかもしれないけど、次期教皇争いとやらの中々興味深い話も聞けた。

私を怒らせた代償はそれと、さっきの慌てた顔で帳消しにしてあげましょうと私は最後ににっこり笑ってやると彼に背を向けた。

「ちょっと、待ってください。私の質問にもひとつ答えてくれませんか？」

するとどうしてだかランスロットに再び手を取られて引き止められる。別に手を取らなくても、質問くらい聞いてあげるわよ。そう思って手を引くが、ランスロットの手は外れない。

「さっき、貴方は何に対してあんなに怒っていたんですか？」

「どうしてそれを聞くんです？」

まあ、さすがに私が怒っていたことくらいは理解していたらしい。

この状況でそんなことを聞く悠長さに呆れる反面、何だか久々に自分の感情を誰かに気にしてもらったような気がして、気が付けば私も問い返していた。

「確かに私は貴方を怒らせるようなことを言っただけです。だけど、貴方は私が思っていたところとは別の所で怒ったような気がしたので。」

「……」

まあ、確かにそうかもしれない。彼の言動から私が怒るべき所で私は怒らず、結果として彼を助長させて、彼に私の逆鱗を触れさせた。

別に隠すようなことでもないし、こうして面と向かって聞かれるのも新鮮だったので私は一瞬黙った後に言葉が続けることにする。

「私は『誰かのために』っていう言葉が大嫌いなんです。」

「はあ？」

「『誰かのために』ということは尊いことだと思います、人間って一人じゃ生きていけないから、皆が誰かのために何かをすることは必要です。だけど、それって結局、『誰かのために』といいながら『自分のため』だと、私はそう思うんです。要するに誰かのために『自分が』それをしてあげたいと思う感情。」

「まあ、そうかもしれないですね」

今一つ腑に落ちないような言葉でランスロットは相槌を打つ。

「それは結局、自己満足の上に成り立つ感情です。自分が誰かのために何かをすることによって得られる優越感。人間はそれを美化して、相手に恩着せがましく『貴方のために』なんて言葉を使う。私、そう言われることも、そう言うことも大嫌いなんです。だから、私



は例えどんな状況でも、誰かのためにしたことだとしても、それは自分のためだと思いたい。」

捲し立てるように告げた言葉にランスロットがぽかんと呆気にとられたような顔になる。彼も全く想像していない言葉だったんだろう。

それに乗じて力が抜けた彼の手から、私は自分の手を奪いかえす。

「とはいっても、これが一般的な考え方とは違うことは理解していますし、誰かに共感して欲しいと思っている訳でもなんです。だから、普段は別にそれほど腹も立てないんですけど、貴方がただでさえ苛ついている所に『陛下のためだけに存在している』なんてことを言うから、ちよつとだけきれちゃったんですよね。私は自分の意志で自分のためにここにいます。ただそれだけですから。」

少なくとも今の自分の状況を誰かのせいにしたくない。

そんな精一杯の私の強がり聞いて、ランスロットは呆気にとられていた顔に笑みを乗せた。それはいかにも演技っぽい王子な笑顔ではなく、はにかんだ様な幼い笑顔。

それを見て、私は彼がもしかしたら私よりいくらか年下の、まだ青年にも満たないくらいの年なのではないかと初めて思った。

「はははっ。王妃様は色々とお強いですね。私はもった弱くて、女性らしい人かと思ってました。」

（あれだけやりこめられていて、よくそんな感想が抱けるわね。それに『色々』って何よ。『色々』って。）

笑うランスロットにそんな感想を抱きつつ、私も不思議と穏やかな気持ちになる。こんな風に肩ひじを張らないのも、久々なような気がした。

そう、思わず玉座への注意を僅かに怠るくらいに。

「!？」

再び感じた揺れに、一瞬でも気が抜けた私は高いヒールに乗った体がグラついた。

それを今度はランスロットも感じたらしく、慌てて私の腰を抱いて支えてくれる。本来ならばそれに礼を言うなりするべきなのだろうが、その直後に起きた異常事態にそんなものはすっぽ抜ける。

——ガシャンッ!!!

大広間に響く高い金属音、次いで上がるパニックになった人々の悲鳴。

私も目を疑う光景に絶句する。

玉座の前に集まった人々は、気が付けば何故だか檻に閉じ込められていた。そちらを見ていなかった私にはどうして、急に檻が現れたかもわからない。

「何が起きているの?!」

ルッティが悲鳴を上げながら叫ぶ。私も同意見。

だけど、それを教えてくれる人はなく、代わりにそれは私達にも降りかかろうとしていた。再びぐらりと地面が揺れる感覚。

「危ない!!」

それを感じた瞬間に、ぐいっとランスロットに引っ張られる。先ほど聞いた金属音がまた鳴り響く。

気が付くとランスロットに抱きかかえられ、目の前には檻の中に

いるルッティ。

「アイルフィーダ様！」

ルッティが鉄格子を揺らして助けを求めるが、それはびくともせず私とルッティを隔てる。

あまりの急展開に思考が全くついていかない。

この突如として現れる檻が、大広間の天井から鉄格子が下に向かって生え、床に突き刺さることによってでき上がっているのだと気が付いたのは、再び襲った揺れと鉄格子からランスロットに助けもらった後だった。

## 6-5 (後書き)

活動報告に後書きっぽいものをのせています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5374w/>

---

愛していると言わない

2011年12月31日17時52分発行